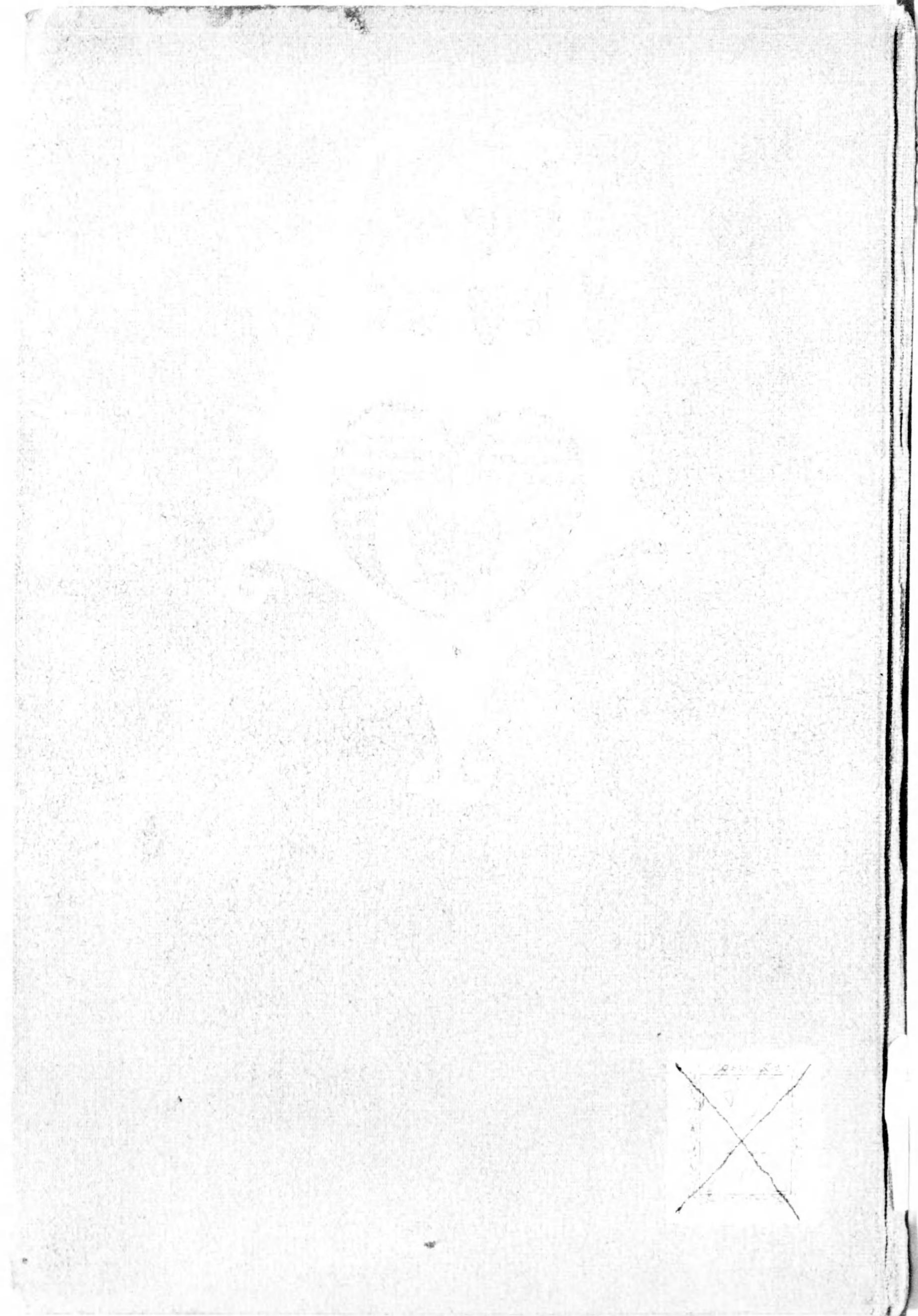
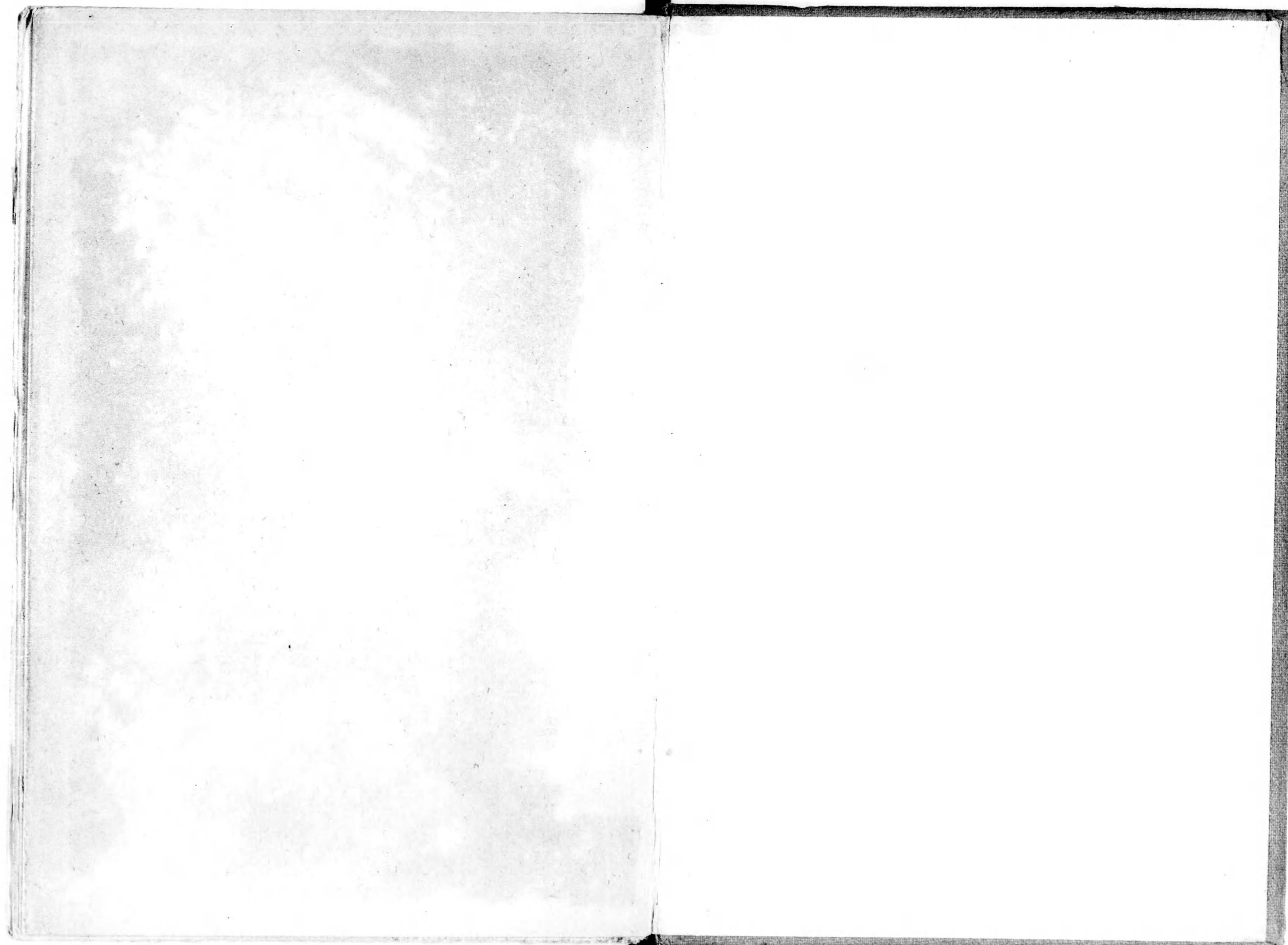


始







特102  
91



男

ハヴエロツク・エリス著  
鷺尾浩譯

と

女

冬夏社藏版

大正  
11. 5. 4  
内交



第一卷

男

と

女

# 第一章

## 緒論

勞働の原始的性的区分——男は重に戰闘的、女は重に殖産的——野蠻人種間にては女は男に劣らず——女の諸産業は男によつて漸次分擔されその後獨占されたり——パーバリズムに於ける女の地位——女に對する中世紀の態度及びその諸因——女の生理的神秘——女の近代的位置。

一人のオーストラリアのカイネイ人は嘗て斯う云つた(一)、「男は獵し、魚を刺し、戦ひ、馬に跨り歩く」その他の事は女の仕事である。此れは極めて原始的な民族間の仕事の性的区分の立派な叙述として容認する事が出来やう。それは種族と風土とを全く離れてゐる勞働の一區分である。エスキモー族の間では、地球の反對の側のその雪の家にお乍ら、オーストラリア人の間に於けると同じ勞働の區分があるのである(二)。筋と骨との力強い發達を要する仕事、及びその結果として起るエネルギーの間歇的奮發(相對する休息の時機を含む)に對する能力は男に歸する、幼兒の保護を籠から發し、又より連續的だ

がより低い緊張のエネルギーの消費を要する總ての極めて様々な勞働とは女に歸する、

(一) *Fi on and Hewitt, Kunjar-i-ni Kunai, Melbourne, 1880, p.206.*

(二)例へば、エーチ・エーチ・バンククロフト著「太平洋沿岸諸州の土着民族」第一卷、六十六頁を見よ。それは一般的法則である。然し斯ふいふ事には例外が極めて多い。例へば、英領コロンビアのシミルカミーン印度人の間では、彼等をよく知つてゐるアリソン夫人に依ると、昔は「女が男と殆ど同じ程立派な獵人であつた」が然し白色の移住民の嘲笑に感じ易かつたので、彼等は獵をするのを斷念したのであつた(一)。ティーエラー・デル・フェエゴのヤーガン族の間では漁獵は全然女に委せられてゐる(二)、恐らく今迄に知られた最も低い人種であらうと思はれるタスマニア人の間では、女が獨り魚を取りに潛水する、そしてタスマニア人の間では又こもりねずみを捕りに高い滑かな幹のゴム樹に登るといふ大變な業をなすのは女であつた(三)。世界の總ての部分に於て、濠州や亞弗利加に於て、並びに又古代ケルト族・チュートン族・及びスラブ族の間に於て、女も危急の際は戰闘し、又往々は絶えずそうしたのであつた。然し通常文化の進まない時代に於て斯く甚だ大切な戰闘と狩獵との危険な疲れ果てさす仕事は男に残されてゐるのである。此等の多くは舞踊が附加されるかも知れない。それは一見して多分明白であるよりも更に密接に他のものに關係してゐる、それは同時に肉體的訓練の一作用であり又戰爭に最も都合のよい立派な心的状態に達する一方法である、原始的女のもつと不偏なる活動力は力強い刺戟物によつて助けられるよりも寧ろ損はれるものである。

(一)アリソン、『シミルカミン印度人』、人類學々會報、千八百九十二年二月、三百七頁。

(二)ペー・イアード及びジェー・ドニケ、キャップ・ホーンの科學的布教、第七卷、巴里、千八百九十一年。

(三)バツクハウス(リング・ロス、タスマニア人、十六頁に引用さる)。

ギヤナのインディアン人は、極めて綿密な同情を持つた一觀察者によつて研究された加く(一)未だ野蠻状態で殆ど進歩をなさなかつた一種族間の勞働の性的區分の全く尋常な光景を我々に示してゐる。男の仕事は狩獵とカサヴァの植えらるべき時樹木を切り倒す事とである。男が樹木を倒し土地を開拓して了つた時、女はカサヴァを植え又總ての其後の仕事を引受ける、農事は全然彼等女の手にあるのである。彼等は殆ど少しでも男より弱くはない、そして終日働く、而るに男はハンモツクに乗り乍ら煙草をふかしてゐる事が往々ある。然し男によつて女に對し慘酷とか壓迫とか行はれる事は少しもない。陶器製造は全然女の手に委ねられてゐる、男は特に籠製造に巧みである、同時に男も女も共に紡ぎ又織る。若し我々がもう一つの大陸の中心に向くならば我々は東中央亞弗利加に於て酷似した勞働の區分を見出すのである。『仕事は重に女によつてなされる、此れは一般的である、彼等は畑を鋤き、種子を蒔き、作物を刈り入れる。彼等には又家作り、粉碾き、麥酒醸り、料理、洗濯、及びその社會の總ての物質的關係に對する配慮など總て此等の仕事が任されてゐる。男は家畜飼ひ、狩獵し、戰爭に行く』彼等は又總ての仕立事をなし、又事務執行に關する會議に坐して多くの時を費すのである(二)。

(一)エヴェラード・イム・サアーン、『ギアナの印度人間にあつて』千八百八十三年。

(二)ジエームス・マクドナルド、『東中央亞弗利加の諸習慣』、人類學々會報、千八百二年八月、百〇二頁。又原始民族間の勞働の性的區分のもう一つの狀態に對してはハツドン教授の興味深い論文、『トールス・ストレイツの西方蠻族の人類學々會報、千八百九十年二月、二百四十二頁』を見よ。『男は漁し、戦ひ、家を建て、一寸とした庭造りをなし、魚網・釣針・魚籠、及び其他の道具を作り、舞踊假面・頭被衣、及び神々の儀式や舞踏のための總ての裝飾品を作つた、彼等は總ての儀式や舞踊を演じ、おまけに非常に氣取つて歩き廻つたり、遊び暮したり、「長話したり」した。女は食物を料理し用意し、大抵の庭作りをなし、礁で貝を集め魚を突き、ペティコートや籠や、筵を作つた。』

總ての原始的民族の間で男が激しい簡單な筋力的努力を含む仕事に適してゐるのに對し、女は通常男よりも長引いた反動的な働きを忍ぶに遙かによく適してゐる。そして彼等は一般的な原始的運搬者である。例へば、コンゴに於けるアンドムビー人の間では(エーチ・エー・チ・ジョンストン卿に依れば)女は運搬者として又一般の勞働者として極めて烈しく働くけれども、全く幸福な生活を送つてゐる。彼等は往々男よりも強く、又より立派に發達し、彼等の或る者は實際上素晴らしい容姿を持つてゐると彼は言つて居る。そしてパークは同じ地方のアーリウイミのマニューエマに就て話して、彼等は立派な動物であり、又女は極めて美しいと云つて居る、『彼等は男のそれ程重い荷物を運び、又それを全く同様になしてゐる。』(一)北亞米利加でも又一人の印度人の酋長はハーンに斯う云つた、『女共は勞働のため作られ

た、彼等の一人は二人の男が出来るだけ運搬する事が出来る。(二)シエロングは人類学的見地からニユー・ギネアの獨乙保護領にゐるパピュアン人を綿密に研究したが、女は男よりも丈夫に作られてゐると考へてゐる(三)。又中央オーストラリアでは男は往々嫉妬から女を打つが、然し面白い場合には女が片手でその男を手痛く打ち据える事は決して珍らしくない(四)。キューバでは、女は男を離れて戦ひ、そして非常な獨立を享けた。印度の或る種族、北亞米利加のピューブロ人、パタゴニア人の間では、女が男と同じ程大きい。アフガン人の間でもそうであつて、彼等と共に或る蠻族の女は可也な力を享けてゐる。亞刺比亞人及びドリス人の中にあつてさへ、女が殆ど男と同じ位大きいと記されてゐた。而して露西亞人の中では兩性に英國人又は佛蘭西人の中に於けるよりもずつと相似してゐる(五)。

(一)デー・エーチ・パーク、「赤道附近の亞弗別加に於ける諸經驗」、千八百九十一年、三百四十四頁。

(二)ハーン(バンククロフトによつて引用さる、「土著人種等」第一卷、百十七頁)。此の酋長は斯う附言した、「彼等は又我々の天幕を張り、我々の衣服を作つたり修繕したりし、夜には我々は暖かにする、そして事實上彼等の助けなくては此の國では可也遠方な旅をするような事は出来ない。」

(三)シエロング、「パピア人に關する人類學的寄稿」、人類學雜誌、四號、千八百九十一年、百七十三頁。

(四)人類學々會報、千八百九十年八月、六十一頁。

(五)エーチ・シャアアッフハウゼン、「人間兩性」、人類學研究、ボン、千八百八十五年。

原始的文化の軍事方面は男に屬してゐる、産業的方面は女に屬してゐる。女の特色的道具は武器ではなく、エスキモー人によつて *stone* 即ち女の小刀と呼ばれるかの小刀である、それはもと總ゆる種類の産業的目的のために用ひられ、今尚ほ歐羅巴婦人の間に臺所の庖刀として残つてゐる(一)。男は狩獵の疲勞を受け、その獲物を女の足元に投げ出した時彼の仕事は終るのである、それを運び、それを料理する事は、食物の入られる容器を作る事と同様に女の役目である。皮や殘物を利用するのは彼女の役目であり、衣服と關聯した總ての工業は重に彼女の手中にあるのである(二)。

(一)オーテイス・デー・メーゾン教授による苦心の研究、「*Stone* 即ちエスキモー族の女小刀」、(合衆國國立博物館報告、千八百九十年)を見よ。

(二)斯くの如くこれにも數々の例外がある。例へば東中央亞弗利加では、彼等自身及び女の衣服のための總ての裁縫は男によつてなされ、而も極めて巧みである、「亞弗利加人よりも上手な裁縫師は何處を探したつてゐないだらう」とマクドナルドは云つた。裁縫は此處では男の仕事として特に認定されてゐるので、妻は若し「彼女の袴にある等閑にされた裂目を示す事が出るならば」離婚を得る事も出来る程である。(マクドナルド、「東中央亞弗利加の諸習慣」、人類學々會報、千八百九十二年八月、百二頁—百十頁。)

諸動物の馴養は通常女の手にあるのである。彼等は又通常原始的建築師である、世界の廣く相異つた部分に於ける——カプファイル人、フューギア人、ポリネシア人、カムチャツカ人の間に於ける——小屋



は女によつて作られる。女は何處でも原始的農夫であつて、尤もより暴つばいより激しい開墾の仕事は通常男の手に任せられるものである。而して女は今日の非常に文明化した歐羅巴にあつてさへ田畑に働いてゐる。例へば伊太利では、九歳以上の千百万の女の内で、三百万以上の者が農業に使はれてゐる。女は總ゆる所で最初の陶器作りであつた。歐羅巴にあつてさへ、殆ど現今迄、シアットランドの少女は陶器を作るように養育された(一)。最初の陶器作りとなつたので、女は裝飾的技術に對する道を備へたが、然し彼等はそれの端緒以上には少しも進まなかつた。實用から離れた裝飾は通常男に特有なものであるやうである(二)。女は最初の陶酔せしめる飲料水を拵らへたらしい。最初の女を醗酵する林檎を摘める者して表はす曖昧な神話に付いて我々が何んな事を考へやうとも、北部では古代の傳説が女を強麥酒を發見せる者として明瞭に表してゐるのである(三)。

(1) Hein, "A. preussische Wirthelehre, Geschichte bis zur Ordenszeit," (人種學雜誌、千八百九十年、第五號、二百四頁)によつて引用された證據を見よ。女による原始の陶器製造の記事としては、マン、

「ニコバー陶器(人類學會報、千八百九十三年八月)を見よ。

(2) イム・サーンの述べる所に依ると、ギネアでは、假令女が悉く陶器を作るにしても、而も裝飾は女と同様男の仕事であるといふ。

(3) 「フィン人の魔術的唄」、フォルクロア、千八百九十二年三月。

女は往々原始的の醫師である(一)。然し此れは決して一般的ではない、といふのは多分早い時代に於

ける醫術が常に重に男の手中にある僧業と差別されてゐないからであらう。危険なる狩りとか戦ひとかをして遠く幾山野を放浪する間の彼等の精進と噪宴と代るく、のより刺戟的な生活は、彼等をして病的な心的現象や、自然のより多く「不可思議な」方面により多く親しませるのである。

(二) 例へばカード人の間に於て、ピシヨツプ夫人は總ての醫術的智識が女の手中にあり、彼等は遺傳的醫師であるといふ事を發見した。「ベルシア及びカーデイス・旅行記」、千八百九十一年、及びマツクス・バルテルス、「自然人の醫術」、ライプツヒ、千八百九十三年、五十二頁、五十三頁を見よ。合衆國々立博物館内の人種學部の主事、故オーテイス・テー・メーゾン氏によつて與へられ原始民族間の女の産業に關する書ける如く概括された記事から引用する事はそれだけの價值ある事である。彼は北亞米利加の諸蠻族に付いてより多く殊に書いてゐるが、彼等は我々の智識の最も廣大である原始民族である(亞米利加好古家、千八百八十九年一月)。

「我々は野蠻人の女をその毎日の色々な心附けを通して會得しよう、さうすれば活動に於ける彼女の役割の意義を了解する事も出来るのである。彼女の洞穴、又は叢林の隱家とか天幕小屋とかの前に横つてゐる殺された鹿は、此の研究に於ける出發點であらう。彼女は小刀にするために燧石の鋭い片を打ち剥がするのである。その行爲によつて彼女は最初の刃物師となる。此のナイフを以て彼女は注意深く皮をはぎ取るが、自分がそれに依つて總ての其後の屠夫の守護聖徒になつてゐるといふ事は夢にも思はないのである。彼女は其の皮を巻き、それから心してそれを梳り、燻し、揉し、石や骨の道具を以て裂く

等、非常な骨折を懸けて、終ひに彼女は最初の革屋及び鞣皮工としての彼女の評判を作るのである。疲れ倦んだ指を以て、骨の針や、腱の絲や、燧石の鋏を以て、彼女は切つて彼女の首長や家族のための衣服を作る。何の標しもその門の戸にはないが、然し内には最初の仕立屋が住んでゐるのである。特に調製された鞣皮から、彼女は自分の夫のための靴を裁ち作る。……色彩のある貝又は石又は種子で補充された、小片の毛皮や羽毛から、彼女はその幼児等のための人形に着物をきせ、來るべき舞踊のために頭被衣と衣裳とを作り、彼女のみすぼらしい栖家の壁を飾り、斯くて單一の方法で幾多の近代工業を創造した——同時に玩具を作り、女帽子屋、女服屋、帽子製造人、室内裝飾人、及び壁飾り人。……彼女は最初一般の料理人であつた、そして今もそうである、そして食物を腐敗せぬやうに貯へ、人間の壽命を倍増してゐる。骨から最後に彼女は彼女の針と小飾物とを作る。……彼女の小屋の廻りの草から彼女は床筵、蒲團、簾、道具入、帆を製へる。彼女は總ての紡ぎ手、織る人、室内裝飾人、帆作りの母である。針歩を數へ様々にし、又彼女の織地に黒、青、赤、及び黄の少量を加へるので、彼女は最初の裝飾的技藝家となつてゐる、彼女は山形の裝飾、鯁骨形の縫目、總ての未來の技術の格子模様と渦巻模様とを工夫してゐる。畑には彼女は籠又は道具入をその前額越しに紐で括つて行く。彼女の顔の汗で彼女は自分のパンを得、世界に於て嘗て重荷の下に屈した最初の積荷動物となつてゐる。……彼女は橡實、根、種子等の荷を持つて家に歸り、それ等を臼で潰したり、又は石板で壓してたりし始める。此處に至つて彼女は明かに原始的製粉者として現はれてゐる。若くは恐らくは、彼女はその種子を平つたい盆の中

に入れ、風又は熱い石の助けで糠殻を除くであらう。此處に至つて打穀に於ける彼女の最初の教へは始まるのである。……多分火中で固められ尖らせられた棒を以て、彼女は根を地から掘り、又は有害な雑草を有用な植物から除いたり、むしり取つたりし、若くは穴を掘つて南瓜、葫蘆、又は玉蜀黍の種をその中へ落とす。我々が彼女の働くのを見てゐると同時に、我々は最初の庭作り、農夫、及び養樹者を看てゐるのである。恐らく或る寂しい平原又は寄洲の川岸には彼女や彼女の赤兒を宿らすやうな洞穴はないであらう。草又は皮の家を工夫し、初代の建築家となる事は此の往日の籠作り、皮細工師に幾ら長く掛らう？……初代の女は陶器師ではなかつた。彼女が往古の粘土工になつたのは上品になつた石器時代であつた。けれども陶器の總ゆる形式、裝飾、及び仕事が女によつて案出されたといふ事は眞實である。……個々の及び諸々の種の間には於ける如く、多くの職業の間に起る所の存在と昇進とのための争闘に於て、交戦は最早總ての男の打奮ふ運動を要求しない。女によつて案出された技工は優勢な状態にあり戦闘的の男は彼の共働によつてこれ等を立派にした。彼女の極めて古い掘捧は今や犁である、彼女の痛む額の上の彼女の原始的な運搬紐は今や鐵道の列車である、彼女の女の小舟は大洋の汽船に、彼女の石の手臼は高價なローラー臼に、皮を柔かくするための彼女の簡単な削り搔く道具は大きな鞣皮場と靴工場に、彼女の絲捲竿と織物棒とは機力織機に、彼女の粘土と滑かな小石とは陶工轆轤になり、彼女の尖を鋭くした棒と毛の束とは總て彫塑的及び繪畫的技術の具である。……藝術、言語、社會生活、及び宗教の早い歴史に於て、女は社會の工業的、製作的、保守的の半分であつた。今日の總ての平和な技藝は

嘗ては女の特殊な領域であつた。工業制度の諸線に沿ふて彼女の創始者、發明者、著者、原造者であつた。』

労働の原始的的區分の更に特殊な精細に涉つた例としては、ボアス博士に叙べられたような中央エスキモー人を擧げる事も出来る(エフ・ボアス、『中央エスキモー人』人種學年報、千八百八十四―八十五年五百七十九頁、五百八十頁)。「男の仕事の主なる部分は狩獵によつて彼の家族に、即ち彼の妻子に又供給者のない彼の親類に、供給する事である。彼は旅行の時橋を驅り、犬を養ひ、家を建て、又小舟覆ひと海豹浮袋とを除いて、彼の狩獵道具を作り備へて置かなければならない。女は家事の仕事、裁縫、及び料理をしなくてはならない。彼女は燈に氣を付け、天幕とボート覆ひを作り修繕し、皮囊を用意し、小さい犬を育て上げなければならぬ。小屋の内部の用度を作り、臺を平にし、雪家の内面を蓋ふ事等は彼女の分擔になつてゐる。ダヴィス・ストレイトでは男は彼等が捕へた總ての種類の動物を切り分け、けれどもハドソン・ベイでは、女が海豹を切り分ける。ここでは男が鹿皮を調製するが、東方蠻族間ではそれは女によつてなされる。何處でも女は大きいボートで男が舵を操る間に漕手とならなければならぬ。獵する事の出来ない不具者は女と同じ種類の仕事をしなければならぬ。』

原始的民族の人種學的智識が現在よりも進んでゐなかつた時屢々女は野蠻人間の柔弱の源泉であるといふ事や、又其故に彼等の位置は貶められて殆ど奴隸の地位にあるといふ事が述べられた。現今にあつてさへ、その未來に於ける所信が過去を不當に輕蔑させてゐる人類學的筆者は、自然野蠻人生活の諸々

の事實を誤説し附會した。事實のより完全な叙述と我々が今や其等の解説に關し持つてゐるより深い洞察とは、多くの種族間に於て女がより大なる程度か、より小なる程度か迄彼等のより力強い配偶者に從屬の状態であつたと同時に、大體に於て女が生産の手段上持つたより廣い抑制、並びに又外交術に於ける女の手腕(一)は彼等に勢力及び權威すらを與へたといふ事を我々に確かめ得させる。此等の結果には多くの場合に於て疑ひもなく、女により大なる威嚴を與へるに役立つた結婚と出産との或る諸形式に基づく可き相異つた種類の諸要素が貢獻したのである。

(一)多くの種族の女に付いては、シー・ハリゾン師がクイーン・チアローット群島のハインダ人に付いて話す如く、こう云ふ事も出来る、「女は非常な外交家であり、一般に自分の自由にしやうと圖つてゐる、彼等が奴隸のやうに取扱はれてゐると想像する事は大變な誤りである」(人類學々會報、千八百九十二年五月、四百七十二頁)。オーストラリアのデイエリー人の中では、女は諸々の盟約商議を處理する使節として勤め、その使命に何時も成功するとカー(一)オーストラリアの諸民族は云つて居る。

マツクレンナン、ルエボツク、及びルトウルノーは恐らく最も勝れたる人類學者であらうが、彼等は明かに文明化する女に關するその智識から、野蠻人の間では女が『柔弱の源泉』で、従つて壓迫を受け易いと主張した。然し野蠻人生活に復聞き以上に通曉してゐる人々によつて往々指摘された通り、之れは時としては事實であるけれども、而も眞理の逆其物である事も珍らしくないのである。例へば此の點を論じてゐるフィゾンとハウイツトとは、オーストラリアの女に關して斯う云つて居る、「平和の時には、

一般の規則として彼等は最も烈しい働き人でありその社會の最も有用な部員である。』又戦争の時には、「彼等は其間自分の身を始末する事が完全に出来る、そして戦士に足手纏ひである所か、若し必要なら男と同じやうに、勇敢に、又より大なる悍猛さへ以て戦ふであらう。」(フィンソン及びハウイツト、「カミラロイとカーネイ」百三十三—百四十七頁、三百五十八頁)。三十三年間オーストラリア蠻族の間に住んだバツクレイは、彼と一緒に住んだ者達が數多の敵勢に襲はれた時、「彼等は喊聲を擧げた、此れを聞いて女達はその毛布を脱ぎ捨て、各々短い棍棒を持つて、彼等の夫や兄弟の助けに走り赴いた」と述べてゐる(ウイリアム・バツクレイの一生と冒険、四十三頁)。フィンソン氏は斯く話してゐる、「唯だ文明化した女の諸々の状態にのみ慣れてゐる人々は、野蠻人の女がなし得る所のものを殆ど信ずる事が出来ない、彼等が多分その最も柔弱な状態にあると想像されるかと思はれる時さへそうである。例へば、或るオーストラリアの蠻族は行進の時殆ど分娩のやうな瑣々たる行爲のために休止しようとはしない。新たに生れた赤兒は皮に包まれ、行進は再び続けられ、その母は外の者と共にてくてく歩く。其上に、よく知られてゐる通り、他所の多くの蠻族の間では寢床に置かれるのは父で、母は何んにも起らなかつたかの如くに自分の仕事に取り掛かる。」

人間は總ての種の内でも最も恵まれた上首尾の者であつた、そしてメーゾン教授がよく言ふ通り、「若し此の種の一半、母の半分が多く自然の柔弱に附加して、最初から他のより強い半分の手に分ける惡意ある負擔と迫害との犠牲で、つたならば、人類は殘存しなかつたであらう」(メーゾン、「原始的文化

に於ける女の分擔」亞米利加好古家、千八百八十九年一月)。もう一人の有名な亞米利加人類學者、ホラシオ・ヘール氏は、千八百九十一年に王立加奈陀協會の年會に於て朗讀した(そして人類學會報、千八百九十二年五月、四百二十七頁中に再録した)一論文中矢張り同じく斯う記してゐる、「一般に蠻族間の女が苛酷に取扱はれ、奴隸の如く、又は少く共、下等の如く看做されてゐるといふ普通の見解は、多くの普通の見解に似て、狭い前提からの餘りに大きな混同した推斷に始まつてゐる、誤謬に基づいてゐるのである。より廣い經驗は此の女の壓迫された状態は實際上存してゐるが、然し唯だ僅かに或る地方に於て又特殊の環境の下に存してゐるに過ぎない事を示してゐる。……サモアンの地主又はナヴァジョーの妻は、彼女の家族又は彼女の民族の間に於ける彼女の位置の關係する限りでは、獨乙の農夫の妻を嫉むべき場合を持たない。」ヘール氏は更に進んで、「それは全く肉體的慰安の、又主に食物の豊富であるか缺乏してゐるかの問題である」と論じ、此の提議を北方亞寒帯のテイネ族(即ちナヴァジョー人)との女の位置の間の相違によつて例證してゐる、前者の蠻族間では「女は奴隸であり、他者の間では彼等は女王である」女はその社會の比較的弱い部員であり、従つて苛酷な生活状態の下では第一に苦しむ者であると彼は考へてゐる。

原始的な不安定な生存状態では、男は重に戦争の心を奪ふ義務と狩獵とに心奪はれるものである。一蠻族の位置及びその存続の方法が段々確かになるに連れて、男は彼等の武器を下ろして女の道具を取上げる事が出来、又女の産業を専門にする。例へばメーゾン教授の指摘する如く(一)、原始的な女は彼女の

ウールーを馬具屋に渡し、彼に明かに柔皮を取扱ふ方法を教へた。古代埃及の馬具屋は、紀念碑上に畫かれた如く、ウールーを用ひた。そして今日の馬具屋も尚ほそれを用ひてゐる。斯くして我々が野蠻時代からパーバリズムの初期に移つた種族、及び戦争が小さい位置を占めるやうになる種族間に尚ほ往々見出す如く、種々の産工業は兩性間に全く區分されるといふ事が起つたのであらう。例へば、そのいふ仕事に多大の手腕を示してゐる園藝的の國民であるメラネシア人の間では、『園藝に於ける男女夫々の分擔は地方的習慣によつて定められてゐる。』(二)然し此の完全な種類の性質が一般の慣例であつたとは減多に思はれない。女は共通に種々雑多の家事の職業及び産業を案出し實行した。彼等は彼等の仕事を専門化する事が出来なく、従つてそれを大いに發達させる事は出来なかつた。狩獵及び戰鬥の仕事から多少解放された男は、漸次女子の職業を取上げ、それ等を専門化し、異常に發達させた。何故勞働の區分が男性的特質であつて女性的のそれではなかるべきかは、それが肉體的及精神的組織の結果であるか將た又單に社會的諸因に基づくのであるか、全く明瞭といふわけには行かない、多分それは兩様の原因に基づくものであらう。母性はその廻りに群がる色々の職業の無差別状態に資する、戦争の諸性癖が専門的又從屬の仕事の便益感を生んだといふ事は有り得る事である。如何なる場合にあつても此の事實そのものは疑はれない、そして、それは文明に廣大なる諸結果を及ぼした。

(一)『ウールー』合衆國々立博物館報、千八百九十年、四百十四頁。

(二)コドリントン、「メラネシア人」、千八百九十一年、三百四頁。

野蠻及び未開の初期に於ける兩性の夫々の地位状態に就いて確實に述べる事は容易な業ではない。初期の汚染せざる未開時代には多くの種族が存してゐない、そのいふ諸種族の状態を了解し得るに充分な程和解力あり同感的である觀察者を見出す事は稀れである、そしてそのいふ種族の有様を典型的準規から離れさす様々の事情の攪亂的影響を査定する事は困難である。我々が中世紀の歐羅巴に於て見出すやうな非常に發達した未開状態にある種族に振り向く時、その困難は又別種のものとなるのである。判斷の基礎とすべき資料が豊富であるので、大膽な改修しない態度で概括するのは不可能である。我々は自分の前に年代記、ローマンス、詩體物語、小話、聖傳、法典、慣習、諺——全く莫大なる原始的記録——を持つてゐるが、總て多少偶然とも云ふべき光明を中世紀歐羅巴の發達せる未開の男女にとつて勤められた夫々の役割に投げ掛けてゐるのである。唯だ此の魅力ある多大の文學をちよいちよい摘讀する事が出来た許りの者は、如何なる定まつた確かな結果をも述べるやう伴る事が出来ない。然しそこには人に再三再四印象を刻ませる諸々の點があるのである。軍事的要素は中世紀歐羅巴を通じて支配した。そしてその事は男の優越を意味した。例へば若し我々がクラツプスのしたやうに(一)大佛蘭西敘事詩一括を驗するならば、そのいふ社會状態が偶然にして故意に非ざるが故により眞實に描寫されてゐるのを見るのである。男は就中戦士であつた。そして女さへ戦争を悦んだ、女は戦争卑怯者であつた男には全くの侮りを持つた、そして時々彼等自身、戦へば捕虜を守るなど戦争に於ける從位的役割を勤めた。戰鬥に男が全く心を奪はれる事は愛の熱情に著るしい効果を興へた。此等の敘事詩に於ける女は通常求婚者で

あり、男は一般に無頓着であるが、稀れには彼等が従ふ女に發動的に戀する事もある、彼等は單に應報する丈けであるが、屢々女が望む程熱烈にそうしはしない、女は自分達を引き付ける男を大びらに抱擁する、唯つた一度丈け我々は公然接吻するのを羞ぢた一人の女のある事を讀むのである、然るに男は女より明かにより肉感的でない者として表はされてゐる。然し此の發端の自由にも拘らず、女が妻になる時は彼女は全くその夫の權勢内にあり、その夫は彼女に最大の輕侮の言葉で話し掛けるかも知れない。

(一)テオドル・クラツプス、Die Frau im altromanischen Karlepp, 1884. (ステンゲルの Augen und Abhandlungen aus dem Gebiete der romanischen Philologie)

工業主義の濫觴は軍事的精神及びその優越にとつて破壊的のものではなかつた。都市にあつてさへ労働者が又戰鬪者であるべきであるといふ事が屢々必須であつた。初期の野蠻社會に於て我々は女によつて創められた諸工業を男が漸次浸蝕し専門化してゐるのを見るのである、歐羅巴の發達した未開時代には唯だ少數の簡単な家事的工業が大體に於て女に殘されてゐる許りであつた。男女が類似の狀況で住んでゐた諸々の修道院にあつてさへ、如何なる分野に於ける女の成功のそれ等に比較したと云ふ事が出来ない。女にとつては家庭があつた、又(是非附言しなければならぬ事だが)娼家があつた、而も外に如何なる出口もなかつた、女の廣大なる流れ——發狂者及びヒステリー患者を含んではゐるが、然し確かに多くは孰れでもなかつた所の一つの流れ——は魔法の疑ひを懸けられ、魔法使ひとして滅びた。此の女の行路と男の行路との相違は二つの相異なる種類の成果を持つた、即ち一方では野蠻人の社會に於て通常

見出されるよりも肉體的發達に於けるより著るしい性的相違が發達したらしく(我々は明確にそうであるとは云ふ事が出来ないが)、又他方では、女に對する男の態度及び男に對する女の態度が知らぬ間に情緒的強弱の度に對應して作られたのである。我々は此の驚くべき中世紀の文學を調べる時、男女が僚友及び働き仲間の態度状態にあるのを決して見出さない事は、丁度より初期の社會に於て殆ど總ゆる處に彼等を見出すと同じである。その代りに我々は男が基督教的禁慾主義の因襲、並びに又中世の生活の實際的事實から或る程度迄疑ひもなく影響を受けて、女を生活に於ける肉慾的要素の象徴と看做し、進歩と成長とを遲滞さす力と看做した事を發見する、又同時に——より異端的要素が恐らく神秘主義の色味と一緒に入つて来て——女が男に靈感を與ふる者、人生の精神的な美化的な要素と看做されてゐる事を見出す。一部分女は玩ぶによかつたらしく、一部分崇拜するによかつたらしく(一)。世界の實際の仕事の大部分は女の骨折であつた——尤も軍事的並びに僧的狀態の下では男女は比較的に相互より離れてゐたけれども——然し彼等の仕事は殆ど擧げる價值なきものと看做されたようである、仕事は中世紀の女の說に相應してゐなかつた。

(二)中世紀の滑稽文學——笑劇、詩體物語、小話等——は女に關する猜疑及び恐怖の情を以て充たされてゐる。女を捕えんとする反對の補足的な傾向は唯だにその時代の戀愛詩中のみならず、又散文文學の大きな然し今は忘れられた一群の中に見出され得よう。トーマスはその「女の性格、態度、及び精神に關する論文」(佛)に於て、此の文學の或る部分の記事を與へて居る。全く近代的な心理學的細

微を以て描寫された、中世紀の女の魅惑と表裏相反との同時代の繪畫は、ブライ・ジョアン・ド・サントレ中に具象されてゐる。

女が男に於て又彼等自身に於てさへ引起した不可思議の要素の重要な一起原は週期的な月經作用である。男に於ける如何なる通例の生理學的作用にも似ない此の作用は、總ての原始民族間の驚異と深甚なる嫌惡との打ち絶えぬ源泉であつた。彼等は此の點で格別一致してゐて、彼等の説明上或る程度の一致を示すように見えさへしたのである。プロツス及びマックス・バーテルスによつて示された如く、蛇（又は時折鱔魚又は蜥蜴のような或る近似した爬行動物）は此の作用又はその神話的起原と結び付けられた、ニューギネア、ギアナ、葡萄牙、獨逸に於て此の聯想の形跡が見出さる可く、往々蛇が愛からか將た又敵對的目的からか、女の性的器官を打ち従つて此の現象を引起したといふ事を指示するようである。エデンの園に關する猶太の物語に於て我々は女と蛇との間の類似した原始的聯想を認めるといふ事を私は附言したい。（尚ほ一層の詳細に涉つては、ハヴェロック・エリス著「性の心理研究」第一卷、補遺A、『女の地位に於ける月經の影響』を見よ。）如何なる處に於ても月經中女は多少不淨のものと看做されてゐる。此の對度がより明かに著るしい時彼女は總ての家事業務、殊に食物の用意を控えなければならぬ、そして彼女に近附く事は往々罪科である。その間彼女は中世紀の癩病患者と正しく同じ位地にあるのである。彼女は特殊な衣服を着るか（印度の或る地方に於ける如く）、又は彼女に近附く總ての者に彼女が穢れてゐるといふ事を注意するため高く呼ぶか（スーリナムに於ける如く）、或ひは獨り一軒の

小屋に離れて住むか將た又同じ状態にある女のための共通の栖家として取置かれた家に離れて住むかしなければならぬ（コーカサス、日本、カロリン諸島に於て、ホツテントット人、北亞米利加印度人、及び多くの其他の種族の間に於ける如く）。我々は舊約全書によつて猶太人の間に發達した野蠻な儀式の丹念な法典を熟知してゐる、又一方古代ヒンヅの神聖なる書物の或ものに依れば、月經中の女は自らパーリア（最下級の民、穢多非人）と看做すよう教へられた。西部教會の或る初期の會議によつて女はその時期中教會に入る事を禁ぜられた、そして近代希臘の基督教徒の間では彼女は教會で聖像に接吻したり、又は聖餐拜受に與かつたりするのを許されない。（此の問題の人種誌はプロツス及びマックス、バルテルスの「女」千九百一年第七版、第一卷、第十卷章中に詳しく取扱はれてゐる。）我々がパーバリズムのより高い階段に近づくに連れて此の時期に於ける女の取扱ひに著るしい社會的區別を作る習慣は漸次消失して行くが、然しかの感情そのものは決して消失しない。週期的間隔を置いて一續きの不淨の犠牲になる者と看做されないで、不淨の概念が女の概念と混交されるようになる。多數の初期の基督教の筆者が女を看做したのも斯うであつた、女はテルチユリアンの云ふ如く *Janua diaboli* である、そして此は尚ほ中世紀に存続した態度である、尤も數々の苦行者は公平に不淨の觀念を又男にも及ぼしたいといふ事を附言しなければならぬ。同時に女の週期的に再起する特殊な不淨に於ける所信は今日も尙決して消盡しなかつた。英國及び其他の國々に於ける中流下流の女の大部分の間では、月經中の女が觸れると食物を汚すといふ事が固く信じられてゐる、僅か數年前、大不烈顯醫學新報（千八百七十八年）に於ける

此の問題に關した一通信文中で、醫師達さへ個別的觀察から彼等が此の點に關し如何なる疑ひも持たないといふ事を述べてゐる事が發見された。例へば此の點に何等かの疑ひを投ずる事が出来たといふ事に驚きを表した一人の醫者は、彼自身の個別的觀察の下に現はれた、此の原因に基づくと推定された腐敗したハム等の諸々の場合を引用した後、斯う書いた、——『二千年の間伊太利人は月經中の女に關する此の觀念を懷いてゐた。我々英國人はそれに左祖してゐる、亞米利加人はそれを持つてゐる、オーストラリア人も亦そうである。何かさういふ觀察の證據が知られてゐないといふ國を知り度いと思ふのである。』總ゆる階級の女は此の所信を保持してゐる、そして今尙ほ此の週期的作用を——それは屢々彼等の個的及び社會的生活に於て第一に重要な一要素であるけれども——殆ど餘りに不面目で指して言ふ事の出來ないものと看做してゐる。

戰鬪的な中世紀の組織及びその相闘した諸狀態の女に對する影響は格別であつた、そして今尙ほ感ぜられ得るのである。表向きには彼等は男の天賦的理想を守り實行しようとして試みた、内々には彼等は男と戯れた、目立たないが彼等は彼等の家庭に於て正直に働き、將た又公務上には密謀を働かした。中世紀及び其他の時代中、歐羅巴人生活の諸々の大中心では、此等相矛盾する理想が極めて複雑な又牽引的な女性的特性を生んだ、それは彼等を形作つた諸影響が我々をして豫期せしめるより遙かに喜ばしく又健全でさへあつたが、然し通常矛盾する理想の避け難い表裏相反によつて多少深く色付けられてゐた。

此等の性的特徴の多くは疑ひもなく近代に至る迄持續されたが、然し其等を生んだ諸々の事情は大い

に變化して了つた。歐羅巴に於ける十八世紀は(中でも英國及び佛蘭西に於て殊に)、出來得る限り總ての偏見を捨て去つて事物の本質及び諸因に關し明瞭に推論せんとする廣く弘まつた決意によつて印し付けられた、そして女の地位狀態に關した諸問題に觸れずにはゐられなかつた、さういふ問題は最早無觀察な沈黙裡に解かれるものとは思はれなかつた。同時に女を彼等の家庭から又男を彼等の以前にはより獨立的で問題であつた勞働から引出すに役立つた經濟的革命が起りつゝあつた。仕事がよつて以つて大きな中心に組織化されるようになった新しい工業制度に現はれつゝあつた、そして機械の採用は男女をして同じ又は密接に關係した職業を相並んで働き得さしめた。此れは今日尙ほ繼行しつゝあるのである。兩性は學校に於て相並んで勉強すべきであり、又相並んで出來ない所は尙ほ酷似の方法でなすべきであるといふ事が又合理的と看做されんとしてゐる。同時に各々の性の諸々の娛樂は或る程度迄兩方に共通とならうとしてゐる。さういふ狀態は人爲的な性的相違を除くに役立つた、そして以前一方の性が他方の性に對して持つた優越のより下等なる標徴を大いに削除した。轉移の過程は尙ほ迅速に進んでゐる。それは勞働のより低いより機械的な分野に始まつた、それはより高いより専門化された諸形式に進みつゝある。女は様々の知識的職業に入つた、又は入らんとしてゐる、そして男と同じ市民權を得んとするものゝ如きである。

斯ういふ社會的變化が層一層人爲的な性的相違を廢除するに役立つた、斯くしてより低級な種族からより高級な種族に轉ずる時に認められた著るしい傾向に反對に働くので、我々は人爲的でない、又社會狀



態の平等化が全く轉移する事の出来ないかの諸々の相違、常に必然的に人間活動の性的分配に影響する自然的性格と豫向との思惟に而接させられるのである。女が第一位的性的特徴に於て又生産機能に於て異つてゐる限り彼等は最高の心的作用に於てさへ絶對的に同じであるといふ事は決してあり得ない。此等の根本的な第二次性的特徴の本質(我々が今日それを語らうと試み得る範囲内では)は何であらうか。

## 第二章

如何にして此問題に近附く可きか。

第二次的性的特徴の定義——第三次的性的特徴——比較の標準——小兒的と老衰的——幼猿の人間的特徴——下等なる人間種族の位置——不完全なる材料と偏執とに基づく迷誤——我々の知識の不完全。

「第二次的性的特徴」なる言葉ハンターによつて初めて用ゐられた。彼はそれを例へば雄鶏の鳥冠のよ  
うな構造に適用したが、然し私の見出し得た範囲では、彼は何處でも彼がその言葉によつて意味する所  
のものを精確に定義してゐない。重に此の問題に關する、その最も重要な諸著の「人類成來論、及  
び性に關する撰擇」を書いたダーウインも又「第二次的性的特徴」なる言葉の下に包含さるべきであるも  
のを極めて明確に定義する事をば控へて居り、單に彼等は第一次的器管に次第に變ずるといふ事や、又  
「實際我々が「第一次的」なる言葉を生殖的諸腺に限るのでなければ、孰れが第一次的と呼ばれ、又孰  
れが第二次的と呼ばれるべきかを定める事は殆ど不可能である」といふ事を言つて居るに過ぎない(一)。

(一)人類成來論、第八章。

我々が人間を取扱つてゐる時各々の性に於ける性的諸腺、及び此等の腺と直接關係ある放射及び容受のための器管を第一次的となすのは恐らく最も好都合であらう。即ち第一次的性的器管は生殖に肝要なるものと看做す事の出来るものである。生殖に必要ではないが、種類の繁殖上第一に重要な補助物である乳房は、第二次的性的特徴の重なるものとして、さもなくば(ダーウインと共に)第一次的及び第二次的特徴の間の境域を占めるものとして數へる事が出来よう。

第一次的及び第二次的特徴の間の範圍を定める事には、後者の特徴の區域を限る程の困難は存してゐない。恐らく最も著しい人間の第二次的性的特徴は毛髮の集生と配置との相違(即ち男のそれは多く顔面に集められるのに女のそれは重に頭に集まつてゐる)、及び喉頭と音聲とに於ける相違(それによつて尙ほ一層の程度の發達が發情期に於ける男性の進化の一部を作り、而して女にあつては比較的僅かの發達しかないのである)であらう。此等は典型的な第二次的性的特徴である、そして我々は恐らく人間の第二次的性的特徴を、更に性を差別する事によつて彼等を相互により牽引的にならしめ、従つて精蟲細胞と卵子細胞との結合を振起するに資するものとして定めてもよからう。其他のものは同等であるので、男はその毛髮が稀少であるものよりもその頭に豊かな毛髮を持つてゐる女により多く引き付けられるものである、其他のものは同等であるので、女は金切聲の女性的音聲を持つた男よりも深い響き渡る音聲を持つた男により多く引き付けられるものである。兩性は如何なる純粹に美的な性質によつても大

いに引き付けられるものではない、男にとつて牽引的であるのは女の女らしい諸性質であり、女にとつて牽引的であるのは男の男らしい諸性質である。第二次的性的特徴は、斯くして了解された如く、間接に生殖を助けるものであり、又其等が實際上そう發達されてゐてもゐなくても、ダーウインによつて了解された如く性的撰擇によつて發達されるかも知れないものである。

さり乍ら、そう容易くは此のグループに入れられない其他の性的相違がある。此等の相違はより明瞭でない、其等の多くは相關的であるか、又は我々が平均を考の中に入れる時僅かに認められるに過ぎないかするが、然し彼等は極めて數多である。例へば我々は女性の頭蓋の比較上遙かに淺い事を知つてゐる、我々は女に於ける甲狀腺のより大なる大きさ活動と、赤血球のより小なる平均配分とを持つてゐる、又我々は相互に對する腦の部分の相異なる平均關係を持つてゐる。此等の相違は恐らく間接に第一次的及び第二次的性的相違に關係してゐよう、彼等は動物學の見地から非常に重大なものではないが、然し人類學の見地から可也興味あり、極めて屢々病理學の見地から興味あり、又時折は社會的見地から非常に興味のあるものである。彼等は通常解された如く第二次的的特徴と同じグループへ容易に入れる事は出来ない、そして恐らく若し我々が彼等を第三次的特徴として分類する事に一致するならば便利であるであらう。

性的特徴を幾つかの類群に全く確然と區分する事は望ましい事であらう、が然しその類群の間には分明な自然的區分がなくて、お互ひに併合する傾きがある。チャールス・ステワート教授は第二次的性的

特徴を我々が依つて以て全く生殖の本質的器官に關係なく男性と女性と區別する事が出来、又營養にも將た又子の生殖にも關してゐないかの諸特徴を成すものと定義してゐる。此れは私には第一次的類群に不都合にも大きい區域を與へてゐるように思はれる、同時にそれは私が第三次的性的特徴と呼んだ物に何等の位置も許さない。結局、若し我々が充分廣く見渡すならば、總ての性的特徴は、ワイズマンの指摘する如く、實際上第二次的(私がさういふ特徴を定義した意味で)である。「男性及び女性の生殖的要素への細胞分別が第二次的であると丁度同じく」と彼は云つて居る、「男性及び女性の個々人のそれもそうである。高級なる動物間の性を特色づける形及び機能上の總ての數多の相違、人類の最高なる心的性質をすら動かす總ての所謂「第二次的性的特徴」は、二人の個々人の遺傳的傾向の結合を起さすべく順應に外ならない。」(エイ・ワイズマン、「當代の諸問題に關する論評」千八百九十年、「遺傳に關する諸論文」第二卷、九十一頁に於て。)

ホル (Sitzungsber. d. Yesellsch. naturforsch. Freunde, 1609, heft 6) は全く新しい命名法を思ひ立ち、性的特徴を二つの種類、即ち本質的(又は原子的)及び偶性的に分たうとした。本質的的特征は第一次的諸腺であるものゝ如く、その種類には恐らく、廣く生物學的見地から、我々は第一次的的特征なる言葉を當てはめるべきであらう。偶性的特徴は補助的生殖器と附加的生殖器とに分たうとした。補助的生殖器も附加的生殖器も共に更に進んで内的及び外的に再分されるのであつた。此の分類は尙ほ多くの疑ひを残してゐる、そして廣く容認されなかつた。

此處に提出されたような第三次的性的特徴の概念は、今や廣く容認されてゐる。有名な佛蘭西の人類學者パピローは恐らくそれを採用した第一人者であつたらう(千九百二年に於て)。尤も彼は誤つてさういふ特徴に關する自分の定義が私のは本質的に異るといふ印象の下にゐたが。更に近くは、ヘーツケルのような過ぎし時代の秀逸した代表者が此の概念を承認し此の言葉を採用した。「第三次的性的特徴」と彼は述べてゐる、「我々は兩性の相異なる生理學的活動、即ち外的に認知し得る形態學的標徴に於て、又殊に心的生活のより立派な特徴である心的又は知覺的活動に於て表はされるかの諸々の相違を名付けてもよからう。最も重要なものは特殊な「性的感覺」即ち Liebessinn である。」(イー・ヘーツケル、「Gono-chorismus und Hermaphroditismus, Jahrbuch für Sexuelle wissenschaften, April 1913,」ヘーツケルの定義は大體に於て満足的のものとして看做してもよからう、尤もそれは少々廣すぎる事は廣すぎるのであるといふのは「性的感覺」に於ける性的相違は全く第三次的的特征と看做してもよいけれども、性的感覺の存在は第一次的性的分別の避け難い結果と看做さなければならぬからである、とは云へ恐らくヘーツケルは彼自身此の制規を容認したであらう。又一方では、第三次的性的特徴が往々餘りに狭く定義されてゐる。例へばパークス・ウエバー博士(醫學時報、千九百十二年一月十三日)は此の言葉を容認する時こう言つて居る、「第三次的性的特徴によつて私は心(推理)の本能と諸性質との兩特徴を含んでゐる、神經組織に頼るそれ等を意味する。さういふ神經的特征は、第一次的性特徴に似ず、孰れの性の排他的性質でもない、彼等は單に一方又は他方の性に於て勝るが故に男性的及び女性的特徴と呼ばれるのである。」

此の敘述を健全ならしめるためには我々は「神經的」又は精神々經的すらよりも遙かに廣い適性を要する事は明瞭である。といふのは此等の第三次的區分はその有機體を通じて擴がるからである。尙ほウエバ博士は第三次的性的特徴の概念が病理學的狀態を明かにする事に役立つ事があるといふ事を指示する或る觀察を附言してゐる。「系統發育の見地から私はヒステリー又は今日ヒステリーとして共に集められてゐるものゝ多くが、或る第三次的(神經的)女性的性特徴の病理學的誇張(又は疾病)と看做してもよからうと信ずる。此の(系統發育的)概念に従へば男性に於ける所謂第三次的女性的性特徴の誇張(即ち疾病)は男性的ヒステリーの偶發の場合として發明されるであらう。」

我々が此處に取扱はなければならぬのは第二次的性的特徴、又は私が定義したような第二次的及び第三次的特徴、及び殊に後者である。各々の特徴の意義をそれが我々の前に現はれるに連れて評價するために我々は或る標準を持たなければならぬ。男又は女に於て性的特徴に對する比較の我々の標準は何であらうか。

讀者は直ぐに二つの標準がある事を認めるであらう。第一のものは幼兒及びその解剖學的及び生理學特徴によつて作られてゐる。第二のものは猿、野蠻人、及び老齡の人間によつて作られてゐる。男に於ける又は女に於ける各々の特徴が我々の前に考慮のため來る時我々は本能的にそれを彼等が幼兒性と又老耄性と聯合して現はれると同じ特徴の間にそれを置くであらう。それがそこに置かれる時我々は全體に於て一方の方が他の方か、幼兒性の方か老耄性の方か何ちらにそれが傾くかを觀察するであらう。男

に於ける又は女に於ける或る特徴が男又は女を幼兒又は猿に近寄らすといふ事を指摘しても、私は件の性を卑下する氣は持たないといふ事を最初に云つて置かう。それは唯だそれによつて我々が我々の前の特別な男性的又は女性的特徴の意味を了解するに助けられるかも知れないといふ事である。發達の過程に於ける幼兒性及び老耄性其物の意義のより大なる問題は恐らく我々の研究が進むに連れて段々明かになるであらう。

さり乍ら讀者は幼兒性及び老耄性でふ此等二つの標準が極めて不平等なる價值を有する事を直ちに認知するであらう。小兒によつて提供された標準は比較的簡單で複雑でない。その比較的巨大な頭、大きな脹れ出た下腹——誰れかゞ定義する如く、「總て腦と腹」——その小さい胸、短かい弱い足、比較的力量強い腕、滑かな殆ど毛のない皮膚、大きい肝臟、腎臟、胸線、及び腎上の囊、此等を持つた小兒は我々に判然たる解剖學的圖を示してゐる。そして小兒の生理的及び心理的生活の諸々の事實は又極めて明かである。然し又一方では眞猴類的、野蠻人的、及び老耄的特徴の複雑なる標準は遙かに明瞭に限定されてゐない。例へば我々は幼年の似人猿類が往々成熟せる形に於て顯すものと全く似ない特徴を示すといふ事實に會ふのである。幼年の似人猿は特徴上比較的人間的である、成熟せる猿は特徴上比較的獸である。幼猿は人間の持つような、滑かな球狀の頭と比較的小さい顔とを持つてゐる、横顔は一層人間の、僅少の突顎を持つてゐる、頭蓋の基底も又成熟せる猿に於けるよりもつと人間の風に作られてゐる。そして就中腦は成熟せるものに於けるより比較的極めて大きいのである。例へば若し我々がゴリラの

例をとるならば、我々は胎児が比較的につつともつと大きい頭、より長い頸、より細い胴、より短かい四肢、より長い拇指と拇趾とを持つてゐる事によつて成熟せるものと異つてゐ、同時に頭はより球状であり、顔はより突頸的でなく、又手はより多く人間のそれに似てゐるといふ事を見出すのである。殆ど總ての此等の特徴に於て胎児のゴリラは人間に近附いて居る。成熟せる猿はその初めの人間に似た状態から遙かに轉移した一状態へと迅速に發達した。脳は比較的極めて小さくなり、その退歩する頭蓋は大きい骨の鳥冠、鋭い角度、及びその非常に廣くなつた顔の部分に目立つ突出した眼上隆起線、突き出た顎、及び後へ引いてゐる頤を以つて嫌はしきものとなつた、而も黒い毛深い體は又特徴上更に獸的になつた。雌猿は幼兒及び成熟せる雄の状態の中途に止つてゐる。人間が猿に似てゐる限りでは、彼が類似するのは大體に於て幼兒の猿であつて成熟せるそれではない。人間も又その生活の行程に於てその幼年時の特に人間的な型から層一層退くものである、が然し猿はその短生涯の行程に於て退化と早老との徑路に沿ふて遙かにより遠く進むのである。猿は可也な人間的賦與を以て生を始めるが、然し生活の進むに連れてそれは遙かに退くのである、人間は尙ほ一層大なる人間的又は超人間的賦與を以て生を始め、成人生活に於てより少ない程度迄それから減退し、層一層猿に接近する出生迄又は其後間もなく迄、猿及び人間のような高級な哺乳動物にあつては、向上的動物學的進化の線に沿ふた迅速な力強い運動があるらしいが、然し或る時が來ると此の胎兒的又は小兒的發達が向上的のを止め、特殊な種の生活慾望に應ずるよう向けられるらしく、その結果其後又人生を通じてそこに重により低級なる

特徴の發達、變質と老耆とに對する緩漫な運動があるのである、尤もそれは個々人及びその種の保存と安定とを確かにするため絶對的に必須なる一運動であるにはあるが、我々は世界から匿れて起る胎兒的進化が一般に向上的な方向にあるといふ事や、然し出生後總てのそれ以上の發達は單に環境に對する實際的順應に過ぎないで、向上的動物學的運動に關係ないといふ事を云つてもよいのである。

其れ故に、我々は猿類及び人間の兩方共に於ける幼兒状態が幾分類似し又人間的状態に接近してゐ、兩方の成熟的状态も又幾分相等しく猿の如き状態に接近する傾きがあるといふ事を悟るのである。我々が低級な人間種族間に見出す現象は我々が猿類間に於て又一般に人間に於て見出すそれ等と一致して居る。尤も相違は非常に廣大で我々は確然と言ふ事が出来ないが、或る點では黒い人類の或るものは白色の歐羅巴人種よりも甚だしく進化して居ると云ふ事も出来る。例へば我々が通常黒人間に見出す短かい體と長い脚とは猿類の状態からは遙かに隔つてゐ、又幼兒的状态からも等しく遙かに隔つてゐる。大體に於て、黄色人種は小兒的状态に最も近いと云つてもよからう、黒人及びオーストラリア人は往々必ずしも猿の方向ではないけれども、小兒的状态を隔る事最も遠い、而るに白色人種は中間的位置を占めてゐる(一)。然し乍ら或る特徴では、成人せる歐羅巴人は小兒的状态からと同じく猿及び野蠻人の状態から最も遠く隔つてゐる、此れは殊に鼻に關してさうであつて、成人の白色人にあつて唯だ充分の發達に達するのみである。體上の毛髪の量に於ける如き、或る其他の諸點に於て、成人せる歐羅巴人は特に人間的な状態からも又小兒的な状態からも退き、遠く猿に接近してゐる。

(1) 獨逸人類學協會のボン集會(千八百八十八年)に於ける、ジエー・ランケ教授の "Ueber das Mongoloiden-antrop" を見よ。

諸々の變易及び不定は非常に重要であるので、我々は與へられた特徴が猿的又は野蠻人的又は老耄的であるが故に、それは總ての三類群に屬すると假定する事は決して出来ない。又我々は三類群の如何なるそいふ假定した一致にも論議の基礎を置く事が出来ない。然し乍ら實際上我々に此等の三類群が小兒から最も遠き極致迄隔つてゐる諸特徴を與へる様々の事項に於て一致する事を見出すのである。そいふ特徴は比較的小さい頭、大きく暴々しい顔、長い四肢、一般の多毛的傾向、黒ずんだ皺寄れる皮膚通常脂肪の比較的缺乏せる事及び筋と骨との組織の廓大、一般の骨化的傾向、及び神經と精神との側に於ける一般の硬直的常規的傾向、是等である。此のような特徴は全く一般的にとは云へないけれども通常猿類的、野蠻的、及び老耄的である。であるから我々は一方には未熟的特徴の群を持ち、又他方では過熟的特徴の群を持つのである、そして男性又は女性の成人せる個人の如何なる特性も此等の方向の孰れかに偏してゐる事であらう。

其故に二次的相違の諸事實が全く固定されてゐる時さへ、その諸事實の意義に到達する事には往々或る困難があるのである。更にそれ以上の難事として、その事實そのものが極めて多數の場合に於て決してよく固定されてゐないといふ事を附言しなければならぬ。少數の人々は性的相違を確める事を彼等の仕事となした、そいふ相違は最も通常にもつと一般的な諸研究の過程中偶發的に露顯した。又、

私が第三次的と呼ばんとした殆ど總ての性的相違は單に平均の問題である。信頼出来る諸結果を得るためには、唯だに研究が精確に統一的に遂行されなければならぬ許りでない、それは極めて多數の個人に及ばなければならぬ。少數の個人に我々の觀察を限る事によつて我々は期待した結果が將た又意外の結果か孰れかに達する。前者の場合では我々は疑ひもなく其等を容認する、後者の場合には我々は不正確を危惧し、其等を排斥する。例へば、クトレーは信頼出来る統計學者であるけれども、研究の新生面を開き又人間の知識を確かな基礎の上に置くに與つて力あつた天才であつたが、彼の結論を彼が典型的と看做した少數の撰擇せる場合から引き出すのが常であつた。此れは全く有害な方法で唯だ期待した結果に導く事が出来たのみである。例へば彼は總ての年齢に於ける男女の比較的高さと重さを示すべき一つの表を作つた、此の表は如何なる年齢に於ても女性より男性よりも高くもより重くもないといふ事を全く一律に示してゐる。もつと廣大な規模の、又多數の國々に於ける、其後の研究は、或る年齢の發達中少女が少年よりも明かに重く高いといふ事を示してゐる。此の事實はクトレーの時代にはありと疑はれなかつた。そして若し彼の十三歳に於ける少年少女の諸々の場合に於て彼がその少女達はその少年達よりも重く且つ高い事を發見したならば、彼は斯う自語したとらうといふ事は明かである。『此の結果は極めて信じ難く、又私の他の諸結果と異つてゐる、だから私は明かに此處に判斷の誤謬をしたのである。』それから彼は恐らく新しい一聯の繼場合を撰ぶであらう、そして若しその結果が偶々彼の前の疑はしい結果に反したならば彼は直ちに彼の誤謬を再保證し安心するであらう。又、全く近

代迄前額部は男に於て、顛頂部は女に於て比較的より大きいといふ事が脳解剖學者によつて再三再四力説された。此の結論は今や眞理の逆と見做され始めてゐるが、然し我々はその避け難かつた事を認容しなければならぬ。前額部は總ての最も高く最も抽象的な知的作用の座であるといふ事が固く信じられた。それで若し二打の腦を驗べて解剖學者が前額部は女に於て比較的より大であるといふ結論に達したならば、恐らく彼は自分が不合理な結論に達したと感ずるであらう。腦の前額部が女に於て比較的より廣大であるといふ事實を認める事が出来るようになったのは、その部が人間に於けるよりも猿に於てより大なる比較上の廣さを持つてゐ、又より高い知的作用と何等特殊の關係を持つてゐないといふ事が知られるようになったからに過ぎないと云ふ事が實に出来るのである。疑ふ事の出来ない諸結果が得られ得るのは、多數の主體に關し注意深く秩序正しく、又先入見なしに遂行される諸觀察の場合に於てのみである。

我々は唯だに餘りに少數過ぎる觀察から生ずる諸困難のみならず、又その研究者の心に於ける避け難い偏執てふより重大なる難事をも認めなければならぬ。此の偏執は類似の諸線に走るべき不幸な傾向を持つてゐる。従つて我々は一人の觀察家の諸結果をもう一人の觀察者の結果に對比させる事によつて何の得る所もないのである。若くは又、各々彼自身の偏執に従つて働いてゐる二人の觀察家の得た諸結果は、餘りに不同であつて何の比較も存しない。斯くして一人の良心に従へる研究者（マヌーヴリエの如き）は解剖學及び生理學の總ての事實が女の優越性を指示してゐる事を見出すかも知れない、もう一

人の、等しく良心に従へる者（ドロイネイの如き）は其等が總て男の優越性を指示してゐる事を見出すかも知れない（一）。

（一）ドロイネイの研究は彼の「比較生物學研究」（千八百七十八年）中に收められてゐる。此の分野に於けるマヌーヴリエの最も早い研究はドロイネイの研究が公けにされた年から始つてゐる、然し彼の最近の最も圓熟せる結論は人類學研究評論中に殊に千九百三年十二月、千九百六年八月、及び千九百九年二月のそれの中に見出されるであらう。マヌーヴリエは恐らく此の分野に於ける自然的事實が男女同權主義の要求と矛盾してゐないといふ事を信すべき諸々の理由を與へた注意すべき最も早い人類學者であつたらう。

私は夥多の能力ある研究者の手中の多數の觀察によつて充分確められたと看做してもよいかの性的相違の諸々の事實を最も明白に表はそうと努めた。出來得る限り、私は尙ほ定められてゐないかの諸々の事實を不同に附したり又は引込まして置いたりした。多くの場合に於て私は、決して必ずしも新しくはないけれども、以前にはそれ等の意義を明瞭に表した並置の状態で置かれなかつた諸事實を相並べて置く事が出來た。其他の場合にあつては私は多くの勞苦と研究との後、精確な知識が容易く到達し得られるように見えた事柄に關してさへ、是れ迄達せられた諸結果は非常に矛盾であるか不完全であるかしてゐて、其等を以てしては何物もなし得ないといふ事を發見したのである。時折私は單に件の問題が現在如何なる地位に在るかを示すため、そつといふ諸結果をも通りがけに記した。不完全な又は支持

されない結果は少く共より確定的な研究に對する刺戟として役立つ得よう。此の考へを以て私はわざわざ我々の第二次的性的特徴に關する知識に於ける痛ましくも無益な境域を曝したのである。

本書は私の氣附いてゐる限りでは、近代の見地から人間の第二次的性的特徴の問題を包含的に取扱はうとする最初の試みであるけれども、尙ほ此れに關係して擧げなければならぬより早い期日の書が數冊あるのである。私の熟知してゐる此の方面に於ける最初の純粹に科學的な努力は、アツケルマンの *Ueber die Körperliche Verschiedenheit des Mannes vom Weibe ausser den Geschlechtstheilen* (Kublenz, 1783) である。アツケルマンは有名な解剖學者ソエンメリングの弟子であつた、そして彼の書は、簡單で大膽(その當時の知識状態と相當れる)であるけれども、推薦の價値ある程科學的で、推量を免れてゐる。生理學に關する彼の大著 (*Die Physiologie als Erfahrungswissenschaft*, 1826-40) に於てその著名なる人は當時取扱ふ事の出來た總ての性的相違の方面を極めて充分に取扱つて居る。彼の叙述は往々餘りに大膽過ぎ又屢々幾分の修正を要するけれども、彼の此の問題の取扱ひ方は大體に於て驚くべき程精確である。ブルダツハは我々が今や價値ありと看做してゐる或る方面の科學的進歩を輕視し、又餘りに多く哲學的思考の影響を受けてゐたが、然し彼は此の問題に最も大膽な最も純粹に科學的な態度で面接し、又其後の研究の諸結果の極めて多くを見越してゐる。現今迄さへクニフスベルヒの此の靈感を受けた生理學者のそれよりも此の複雑せる問題に關するよりよい叙述はなかつたのである。ブルダツハの諸結果は屢々彼の事實より少し進んでゐた。靈感は科學的研究の承認された近代的方法ではない、そしてブルダツハ

の廣大な範圍の生理學者は誰れも彼の時代以來同じ大膽な目若たる態度で此の問題を取扱ふ事は出來なかつた。ダーウインは彼の「人類成來論」に於て人間の第二次的性的特徴に觸れたが、然し僅かに其等が彼の一般的性的擇擇説を例證した範圍内に於てあるに過ぎなかつた。プロツス及びマツクス・バルテルスの大著 *Das Weib in der Natur und Völkerkunde* (マツクス・バルテルス博士の死後はその息、パウエル・バルテルスの監修の下に、絶えず新しい、増補した、又改修した版となつて現はれてゐる) は第一に低級なる人間種族間の人類學的及び人種誌的相違を取扱つて居る、それは諸々の事實の價値ある寶庫であり、又豊富に例證されてゐる。オーテイス・メイゾンによる「原始的文化に於ける女の分擔」(千八百九十四年)は主に亞米利加人種誌の材料に基づいたもので、讀んで益する所があらう。ハーリー・キャンペル博士の「男女の神經組織に於ける生理學的及び、病理學的相違」、(ロンドン、千八百九十一年)は散漫であるけれども興味は深い。ロンプロゾーとフエローとの *La Femme Delinquente, la Prostituée et la Femme No male* (チューリッ及びローマ、千八百九十三年、佛譯) 及び獨譯も又是非擧げなければならぬといふのはその重なる主體は犯罪的婦人であるけれども、第一部は通例の女の特徴の研究に盡されて居るからである、それは多くの點に於て疑はしいけれども、獨創的で暗示的である。マンテガツツアの *Fiologia della Donna* (1893) は僅か一部分丈科學的であるけれども、常に女を人間の重なる研究と看做したらしい。人類學者、旅行者、及び世界人の間にも圓熟せる結論を具象したものとして興味深いのである。ローの *La pubertà* (千八百九十八年、佛譯) —— 實驗室の人であり、慎重な研究好きな學徒であ



る。極めて毛色の變つた型の一伊太利人の書は我々がこゝに關係してゐる此の問題に關する非常に獨創的な研究を含んで居る。

性的相違を取扱つてゐる更に最近の著書はハウル・ムーピアスの *Beitrag Zur Lehre von den Geschlechtsunterschieden* (彼は獨創的な往々暗示的な研究家で、通常女に反對に偏してゐたが、千九百七年に死んだ) 及びオスカル・シアルツによる解剖學的及び其他の第二次的性的相違の概括 *Das Weib in Anthropologischer Betrachtung* (千九百六年) である。維也納の婦人科醫、コンスタンチン・ビュキユラは「臨床的生理學的研究」(*Geschlechtsunterschiede beim Menschen*, 1918) を書いたが、それは緋く價値が充分あり、立派な圖書解題が入つてゐる。亞米利加に於ける婦人研究者の著、エーチ・ビー・トンブソンの「性的心的特性」は範圍上限られてゐるが、然し個別的經驗に基づいて居る。グロニンゲンのハイマンズ教授は「女の心理」なる一書(千九百十年、エツピングハウス及びムーマンによつて出版された *Die psychologische Einwirkungsdarstellung von* 叢書中に) を書いたが、それは量り得べき心的性的相違を研究するには而も科學的基礎に依つてなされた最も充分な試みであるのである。

第二次的性的特徴の生物學的基礎はタンドレル及びグロツツ (*Die Biologischen Grundlagen der Tektonik in Geschlechtscharaktere*, 1913) によつて研究されたが、教へられる所が多い、又一方性特徴の構成上根本的に重要である内的分泌物に關する我々の知識の賢明な摘要は、ノエール・ペー・ト博士(代謝機能の神經的及び化學的規則、千九百十三年) によつて示されてゐるといふ事を最後に擧げて置かう。

### 第三章

#### 身體の生長と均衡

男性及び女性の身體の一般の特徴——出生時の大きさ——發情期に於ける少女のより大なる發達——成人の大きさに於ける性的相異——比較的重要ならざる重さ——身體の成長と均衡とに於ける性的相違——腹部——胸部——乳房——腕——手——人差指——脚——足——小趾の未來——一般的結論。

我々は人間の形態——若くは、若し好むならば、希臘彫刻家の天才に負ふかの古典的なその表現——を注視する時、形及び輪廓に於ける或る明瞭な性的相違を認めるのである。男はより大きく、エネルギーの印象を與へる醜く、はなないけれども粗なる外線の或る傾向を持つてゐる、その骨の凸出は通常より顯著であり、その筋は總ゆる處により明瞭に劃されてゐる。女はより小さく、より繊細に作られて居る、骨の所はより明瞭に見られず、筋は假令力強くあらうとも、それ等をより少く分明ならしめる豊富

な結締織で柔かに包まれてゐる。男の形状は眞直で、密に接合してゐる、女のそれはもつと不齊で、大きい臀部を持ち、乳房と腹部と脇腹との隆起的曲線を畫いて居る。男の形状は本能的に動作を求めてゐるように見えるのに、女のそれは自づから比較的休息の状態に落ち、顛倒の姿勢中に満足を見出してゐるように見える。

此の單純な種類の性的對照は全く明瞭である、そしてそれ等はそれ等の意義を持つてゐるのである。人間の形状に於ける性的相違のより精確な知識は十九世紀中僅かに發達したに過ぎない。レオナルド及びデューレルのような昔の大家は重要な人間均衡の學を持つてゐたようであるが、然し彼等の學は諸々の事實の廣い歸納に基づいてゐたとは思へない、そして彼等は通常彼等の藝術にそれを従はしてゐた。近年中解剖學者や人類學者達は年齢及び性に依る人間形體の成長と均衡との詳細に涉つた知識を進める事に従事した。彼等は今尚ほ彼等の努力の目的に達するに遠いが、然し或る確然たる諸結論は明白になりつゝあるのである、そしてそんなに大きい仕事を生んだ一問題を充分に論ずる事は此處では不可能であるけれども、重なる諸結果の或るものを指示する事は可能であるであらう。

出生時男性の小兒は既に女性の小兒よりも何つちかと云ふと重い方である、そして幾分脊も高く(大不烈顛協會の人體測定委員)に従へば、英國及び蘇格蘭に於て約一吋〇五分の一)、又彼等の胸圍はより大きい(一)。幼年時中兩性の比較的生長は極めて綿密に研究されはしなかつた、少年も少女も共に生れて最初の二年間急速に成長し、三年目及び四年目の間は徐々に成長し、少年達が進み續けるらし

く、又彼等は英國に於ては五歳から九か十の年迄そうするのである(二)。約四十年前迄、男性の此の優越が發達の全期を通じて保持されると常に思はれてゐた、此の結論は此の問題に於ける先天的觀念と一致した、そしてクトレーによつて作られた少數の觀察によつて支持された。千八百七十二年にボウディッチはポストン及びその近くに居る殆ど一万四千人の少年と一万一千人の少女との高さとの統計を集めて公けにし始めた。此等の研究は人間發達に關する我々の知識上一時代を劃して居る、其れ等は千八百七十六年に多數の伊太利の小兒に關するバグリアニのそれ等によつて、千八百八十三年には大不列顛の小兒に關する「人體測定委員の報告」によつて、千八百九十年には瑞典に於ける一万五千の少年と三千の少女とに關するアクゼル・ケイの觀察によつて、又千八百九十一年にはライプツヒヒに於ける約五千の少年と五千の少女とのエミル・シュミツトの研究によつて續けられ確かめられた。

(一)シーランドのエーチ・ジェー・ハンセンは六千の小兒の間で男性の平均重量が三千六百九十六瓦、女性のそれが三千五百四十二瓦である事を發見した。(ランセット、千九百十三年七月十九日)。此れは田舎の一地方に於てであつた、そして都會の幼兒のそれよりも兩方の場合に於て八か九パーセントより高いのである。ワイツセンベルヒ (Wachstum des Menchen, p. 23) は男性の幼兒の丈が出れた時五十一センチメートル、女性のそれは五十センチメートルである事を發見した。彼は全く正規の關係に於て新しく生れた少年の總ての大きさが少女のそれよりも大きく、性的相違は出生後暫時經つ迄明瞭に目に見えるようにならないと言つて居る。

(二)大不列顛協會人體測定委員報告、千八百八十三年、二百八十八頁。

ボウディツチの創作した表はボストン醫學及び外科雜誌(千八百七十一年十二月)中に公けにされた、彼の完全なる研究、『小兒の成長に就て』は千八百七十七年、第八回マサチューセツト州立保健協議會年報中に現はれた、又ボウディツチの諸結果の摘及び大不列顛の諸結果のためには、シー・ロバーツの人體測定便覽(千八百七十八年)を見よ。ルユイギ・パグリアニの最初の論文、*Sopra alcuni Fattori della Sviluppo Umano*, は人類學記錄(千八百七十六年、第六卷)中に現はれた、彼の全研究は統計學記錄(第一年、第四卷、千八百七十七年)中に公けにされた。アケゼルケイ教授の論文『Die Pubertätsentwicklung und das Verhältniss derselben zu den Krankheitserscheinungen der Schuljugend』は伯林國際醫學會議の席上で讀まれたが、千八百九十年別に出版された。シュミットの諸結果は *Correspondenzblatt der Deutschen Gesellschaft für Anthropologie* (千八百九十二年四月)中に簡単に述べられてゐる。同じ紙上には小兒の發達に於ける或る外の諸研究に關する圖書解題的關説が見出されるであらう。獨逸の小兒の興味深い廣大な研究はファウンドレル及びシュロツスマン、『小兒醫療便覽』第一卷(千九百九年)中にダヴルユー・キヤメルによつて示されてゐる。中央露西亞の小兒に付いてはエリスマン (*Achin für Soz. Gezeigung und Statistik*, 1889)によつて、南露西亞の猶太人に付いてはワイツセンベルによつてその「人間の成長」(第四章、千九百十一年)中に示されてゐる。ロバーツの便覽中に收められたものより後の、英國の小兒に關する諸結果に就ては、例へばカー、「ロンドン全國教育會議委員への報告」、千九百六年—千九百七年

(大不列顛醫學新報、千九百七年一月十九日に概括さる)タツクスフォード及びグレッグ、大不列顛醫學新報、千九百十一年五月十七日、及び(リヴァプール)の小兒に關して)ミユツファン、「人類學」(千八百九十九年)を見よ。亞米利加の小兒に關しては、スクリブナー雜誌(千八百八十九年)紙上の、『女の肉體的發達』てふ一論文中にサーゼントによつて記された千六百人の學校兒童及び學生に關する彼の研究、セント・ルイスに於ける亞米利加の小兒に關するポーターの研究(セント・ルイス科學會報、千八百九十四年、人類學雜誌、千八百九十三年、一般亞米利加統計學協會、千八百九十四年)、ワシントンに於ける亞米利加の小兒に關するマクドナルドの觀察(教育報告、千八百九十七—九十八年)を見よ。ローサンヌに於ける瑞西の小兒に對しては、コンベ學校保健雜誌(千八百九十六)年を見よ。又ゾーリツヒに於ける獨逸人の瑞西小兒に對しては、ルシイ・ホーツシュエルンスト、學校兒童等(千九百六年)を見よ。巴里に於ける佛蘭西の小兒に對しては、ヴァリオット及びシオーメ、人類學會々報及び記錄(千九百六年)を見よ。夥多の研究は、圖書解題と一緒に、エフ・バークによる一論文、『高さ及び重さに於ける小兒の成長』(亞米利加心理學雜誌、千八百九十八年四月)中に見出されるであらう。その諸々の事實の廣き關係に於ける一般的諸結果はエーチ・エーチ・ドナルドソンによつて、彼の「腦の發達」(千八百九十五年)の前の方の章中に、又更に近くはシー・エス・ミノットによつて「年齢、成長及び死の問題」(千九百八年)中に論ぜられてゐる。

發情期の發達中數年の間、歐羅巴種族の少女が同年の少年よりも高くもあり又重くもあるといふ事は

今や疑ふ事が出来ない。その相違の總數、及び此の少女の優越が始つて終る正確な年齢は、相異なる種族に於て又相異なる状態の下で變化して居る。

大不列顛にあつては少女は十歳と十五歳との間で少年よりも迅速に成長する、そして十一歳半乃至十四歳半には彼等は同年の少年より、實際上高く、又十二歳半と十五歳半との間には實際上重いものである。此れは「大不列顛協會人體測定委員」によつて達せられた結果であつた、殆ど六十万の英國の小兒に關するタックスフォード及びグレッグの更に最近の諸結果は斯ういふ事を示してゐる、即ち十歳の時には、重さではそりでないけれども、高さでは少女が少年にやゝ勝れて居る（是れは都市でも田舎でも共に示されてゐる）、が然し十一歳にはそれは減退する、高さ及び重さ兩方共に關する少女の發情期の優越は十二歳の時に確實となり、重さに於ける優越はより早く、即ち十二歳の時に始まるものである。リヴァプールでは少女は十二歳の時を除いて九歳から十四歳迄の總ゆる年齢に於て少年よりも高い事が發見された。何千といふロンドン寄宿學校の兒童の間でカーはより貧乏な階級の少女が九歳から十一歳迄少年よりも高く、よりよい社會的階級の少女が十歳の時少年に凌駕される事を發見した。兩階級に於て少女は七歳（記録が始つた時）から十一歳に至る迄少年よりも重かつた。

少女の成長に於ける加速は少年の成長に於ける遲滯と一致してゐるように思はれる。十五歳の時には少年は又卒先し、最初迅速に成長し、そしてつと緩かになり、そして實際上二十三歳頃彼等の完全なる成長は達せられる。又一方では少女は十六歳以後極めて徐々に成長し、二十歳頃その充分な身長に達

する。歐羅巴に於ても合衆國に於ても共に最も活動的な成長の年は少年にあつては十六歳であり、少女にあつては十三歳又は（瑞典に於ける如く）十四歳であるようである。活動的成長の時期は、少年にあつては十一歳少女にあつては十歳頃に最高點に達する（とは云へ彼等にあつてはより規則的でなく又顯著でない）、成長に於ける著しい遲滯の時期に先立たれるのである、此れは亞米利加、英國、獨乙、瑞典、丁抹、及び伊太利に於て確立された。合衆國では生れて最初の十二年間少年は同年の少女より一吋から二吋高く、十二歳半頃に少女は少年よりも早く成長し始め、十四歳中同年の少年より一吋程高い、十六歳中は少年が又復びより高くなる。英國と亞米利加との少女は大體に於て英國及び亞米利加の少年よりも多く相互に相似してゐる、然し亞米利加の少女の發達上の優越の時期は短く又その度合は瑣々たるものである、而るに瑞典にあつてはそれから十二歳から十六歳の中途迄に及んで居る、獨乙にあつてはそれは十一歳中に始まり、十六歳迄延びて居る（一）。伊太利に於ては充分著しい、佛蘭西（巴里）では少女は少年よりも十一歳から十四歳迄脊が高く、八歳から十五歳迄より重いのである。亞米利加の少女の比較的僅かな優越は疑ひもなく、發情期の全時期の中の少年の非常な發達上の活動に基づいて居る、彼の十三歳の時から十八歳の時迄彼は平均上今日迄提出され度られた最も高く最も重い少年である、前後の總ての其他の年齢中では、瑞典の少年が頂點に來る。瑞典の少女は彼女の全發達を通じて歐羅巴及び亞米利加の少女に卒先し續けて居る、但し獨り重さに關しては彼女の亞米利加の姉妹に譲る時なる彼女の十四歳中を除く。瑞典では少年にとつても又少女にとつても發情期は亞米利加に於けるよりも將た

又伊太利に於けるよりも完成に達するには一年遅いのである。總て此等の不同は發情期の發達が少年に於けるよりも少女に於てより早熟的であつて、兩方共により早い年齢の時始まり完成されるといふ一般的法則の小變化に過ぎない。

(一)此れはサクソニーに於けるフライベルヒに屬する二万一千人の小兒のゲイスレル及びユーリツツエの調査によつて示されて居る。キヤメルルは獨乙の少女が十三から十五迄より高く、十四から十六迄より重い事を見出して居る。ジャーマン・スウイス人の間でリュシイ・ホーツシユエルンストは少女が十一歳の時より高く、十歳の時より、重くなる事を發見した。

ポーターはセント・ルイスの小兒間に於けるその研究から、最も高く最も重い小兒が最も伶俐であると云ふ事を結論した。然し乍ら彼の結果は批判された、そしてギルベルトはイオワの小兒間で、そこに少しでも何か相違がある限り、その小兒がより高く又より重くあればある程愈々愚鈍であるようであるといふ事を發見した。モーチはフロレンスに於て又伶俐でない少年に比して伶俐なものゝ間に極めて明確な身丈の劣等を發見した、又バスチヤンは大きな頭と智力との關係を容認すべき理由が多いけれども、高い身長と智力との間の何か關係を容認すべき理由は少しもないといふ事を示す様々の材料を提出した。然し乍ら證據の重味はポーターの結論に味方してゐるように思はれる、その結論は、サージエント(學者、語技者、及び通常の學生の體格)、通俗科學月刊、千九百八年十一月)によつて容認され、又オマーヘに於けるハステインクス、ネブラスカ、市俄古のクリストファー、維納のビュルゲルスティン、及び

様々の其他の研究者によつて確認された、又一方ロンドン寄宿學校に於てカーは愚物が同年の中春以下であり、惻口又は早熟の小兒がそれ以上である傾きがあり、同時に(少女間では)如何なる年齢の又一般的に尋常なる如何なる標準の小兒の群でもより高い標準の然し同じ又はより低くさへある年齢の者より高くないといふ事を見出してゐる。

アクゼン・ケイは瑞典に於て少年に於ける最も迅速な生長の時期が又疾病からの最も大なる自由の時期であるといふ事を指摘した、が然し此の生長と疾病に對する抵抗力との間の關係が少女に於てより著しくない事を發見し、その相違を生長しつゝある少女が置かれる比較的健全な状態に歸屬して居る、同じ關係は外の國々、殊に亞米利加に於て發見された。例へば市俄古ではクリストファー(亞米利加醫學會雜誌、千九百一年十一月十四日)は發情期中疾病に對する著しい傾向があるけれども、死亡率は低いといふ事を發見した、又ポストンに於ては、ハートウエルの示した如く(「體育指導者の報告」學校記録、第八號、ポストン、千八百九十四年、四十三頁其他)、高さ及び重さに於ける増加の最も急速である十歳から十五歳迄の時期の間最少の死亡が起るのである。ハートウエルは最低の死亡率の年齢が少年にとつては十三歳であり、少女にとつては十二歳であり、従つて疾病に對する發情期の抵抗力は成長と並行して走る(尤も少年にあつては最大成長は最小死亡率よりも、やゝ後に來るけれども)といふ事を見出した。ハートウエル(同書、八十二頁等)は吃音の優勢と發情期の發達との間の興味深い並行を指摘した。吃音の優勢は相異なる年齢に於ては變じ、又その不同は神經的平衡の指示と看做してもよからう。彼

は八歳、十三歳、及び十六歳の少年、及び七歳、十二歳、及び十六歳の少女が殊に吃り易い事を發見し吃音が一表徴である神経組織の感應性は死の如く迫る諸影響を拒むべきその有機體の力の最も著るしい上下の動搖と一致してゐるといふ事を結論した。

女性のより早熟な發達は唯だに人間許りでなく廣く擴つた動物學的現象であるようである。多くの動物間では雌が成長上確に先立つてゐるといふ事が發見された(アツシュ・ド・ヴァリニー、論文「成長生理學辭典」、例へば、成熟せる雄の麒麟は雌よりも高いけれども、發情期には雌が高い。猿にあつても又フリエデンタル(全生理學雜誌、千九百九年、四百八十七頁)は雌の發達が雄のそれよりも遙かに早い年齢に於て止ると述べて居る。兎及び豚鼠にあつてさへ雌に於ける發達は雄に於けるよりも不規律で能動的であるらしい。(マーシアルの「生殖生理學」六百六十四頁其他に轉載された、ミノアの「年齢の問題」等に於ける圖表を見よ)。

然し乍ら發情期の發達は營養及び衛生によつて——即ちその小兒が屬する社會階級によつて——著るしく影響されるものである。然し社會狀態の影響は嚴に制限されてゐるようには思はれる。バグリアニ及び阿克ゼン・ケイは此點に特殊の注意を拂つた。伊太利では育ちの善い小兒と育ちの悪い小兒との間の發達に於ける相違が極めて著るしいが、然しバクダリアニは育ちの悪い者の發達は遅いけれども、此れは多くのその延引によつて償はれて居り、又一方育ちのよい者の發達は迅速で早熟的であるが、その後期には小であるといふ事を示した。(此の點に於て少女が育ちの善い階級の發達の法則に従ふといふ事は

何物にも償せぬ事である。)營養は成長率上に大いに影響を及ぼすけれども、最後の結果には斯くして比較的小さな影響しか及ぼさないものであつて、その最後の結果は重に種族と性との影響を受けるのである。阿克ゼン・ケイは營養作用がバグリアニによつて認められたと全く同じ風にして起るとは思つてゐない、彼に従へば發情期はより貧乏な階級の小兒にあつては遲滯するが、其後極めて急速に起つて、富裕な階級に於けると同じ時期に完成されるといふ。彼は貧乏人の發達を、唯だ壓迫が除去される時急速に跳び返るため丈けにひどく屈せられ得るが、然しその壓迫が餘りに大き過ぎるか、又は長引き過ぎるかするならばその牽縮力が多く失はれるかも知れないかの羽毛に較べてゐる。クトレー、バグリアニボウデイツチ、ブローカ、ダリー、及び阿克ゼン・ケイは環境、營養、運動、氣候、高度、職業が成長率を變更し、その個人が最後の發達期から隔れば隔る程一層劇しくそうするといふ事を承認するようである。最後に達せられた高さは重に性と種族とに依つて居る。

女は二十歳にしてその充分な發達に及んだと云つてもよい、男は此年齢以後幾年かの間可也な程度の發達を示し續け、都合のよい狀況の下では殊にそうである。實際充分な成長は白色人種に於ても、將た又(黃金井氏の發見した如く)黄色人種に於ても、三十五歳迄は完全に到達されないようである。ヴェン及びガルトンはケンブリッジの學生に關する彼等の研究によつて、例へば學生の頭が十九歳後通常の頭以上に生長する事を示した(一)。大概の歐羅巴諸國に於ける上流階級が下流階級の者よりも脊が高いといふはよく知られて居る、そして此れは或る程度迄、ラプージュが考へて居る通り、種族の相違の問題であ

るかも知れないけれども、全然そうであるとは云ふ事が出来ないのである、ガルトンも又有識階級間では平均の高さが數年前よりも高いと考へて居る。私は如何なる程度迄女の肉體的發達が好都合の状況の下に長引かれる事があるかといふ事を示してゐる。女學生の丹念な研究をば何もよく知つてゐない。通常の状態の下では肉體的早熟が男に於けるよりも女に於てより大であり、種族が低級なれば低級なる程（一般的に言へば）、充分な身長が一層早く達せられるといふ事は一般的規則であるようである、例へばニコパレス人の間では、マンに依れば、男性は十八歳頃に充分な高さに達し、女性はやや早いのである（二）。一般に、より早い發情期はより短身の種族に始まり、性的生活の發達は一般的發達の總ゆる其れ以上の力強い繼續に終りを置くらしいといふ事が又發見されて居る。例へばロシアの女はロシア猶太人の女よりも何つちかと云ふと丈が高く、又寧ろより遅く經水が下るものである。短身である日本の女は、十五歳にめぐりとなり（山崎氏に依れば）、支那の女は十七歳にそうなる。歐羅巴に於て殆ど最も高い瑞典の女は十七歳に月經となるが、それは殆ど歐羅巴の總ゆる外の部分に於ける平均年齢よりも遅い。同時に、一種族の範囲内では、一般の肉體的發達と性的發達とは並行して居り、又ワイツセンベルヒの示すが如く、少女に於ける最も力強い肉體的成長の時期は、それを遮るらしい性的活動の開始によつて直ちに續かれる所のそれである。十三の月經ある少女は十五のめぐりのない少女よりも高い高さ、廣い臀部及びもつとよく發達した乳房を持ち、後者は總て此等の點に於て劣等者である事が正確な研究に基づいて發見されて居る（三）。

(一) 人類學會報、千八百十九年、百四十頁。

(二) イー・エーチ・マン、人類學會報、千八百十九年五月。

(三) ワイツセンベルヒ著、人間の成長、二百頁其他。

マチュエービのメラネシア人の間で、レッシュ（獨乙人類學協會通信書、千九百十年、第七號）は、主體の數は多くなかつたけれども、少年に於ける成長が十八歳の時完全され、少女にあつては月經の始まる時なる十七歳に完全される事を發見した。少女の平均の體の大きさの成長の全時期中（四歳の時さへ）、少年のそれに優つた。少女が少年に凌駕されるのは彼等が成長を止めるに至り始めて起るのである。マニラの諸學校に於ける、六歳と二十一歳との間のフィリッピン諸島の千五百人の小兒の間で、ロツピットは少女が十七歳の時身長に於ける完全な發育に達し、少年は三年遅いらしいといふ事を發見した。十四歳前の少女は總ての年齢に於て少年よりも高い。八歳から十五歳迄少女は少年よりも絶對的に重い。多くの外の點に於ても又、歐羅巴及び亞米利加の小兒に比べて、フィリッピンの少女は少年に大體より近く十三歳には何方かと言へば少年よりも強い（ポツピット、『フィリッピンの小兒の成長』、ペダゴギカル・セミナリー、千九百九年六月）。日本に於ても又（ベルツの測定に依れば）少女は十二歳前總ての年齢に於て少年より優れ、その後は少年が勝るのである、完全な發育は此處では兩性共早く達せられる（ベルツ著、日本人の身體特徵、第二部、三十六頁）。

若し更に此れ以上の觀察が此等の研究を確證するならば、我々は白人種に於て、若し實際一般に文明の狀態の下にない時には、少女の發達が都合悪い影響を受けるといふ事を思ひ易くなるかも知れない。英國に於ける成人した男性の平均身長は約一・七〇〇米突(即ち六七・四吋)、成人せる女性のそれは約一・六〇〇米突(即ち六二・七吋)であり、男及び女の身長之比は英國に於て一對〇・九三〇、又は一六對一四・八八である(一)。千八百八十九年に於けるニューカッスルの大不列顛協會の富裕な男性の會員の平均身長は一・七一五米突、女性の會員のそれは一・五八九米突であつた。それ故に英國に於ける身長上の性的相違は近隣の諸國に於て發見されたそれと極めて密接に符合してゐる。佛蘭西では、トビナールとローレ、及びドニケ(定式を一般的に適用出来ぬと考へて居る)に依れば(二)、それは十二センチメートルであり、白耳義では、クトレーによれば、十センチメートルであり、合衆國では、サージエントに依れば、それはやゝより大きく、殆ど十三センチメートルに及ぶ。亞米利加では、重さに於ける性的相違は英國に於けるよりやゝ小であるけれども、高さ及び又生活力に於ける性的相違は著るしい程度迄より大きく、そのより大なる性的相違は亞米利加の女より小なる發達に基づくよりも寧ろ男のより大なる發達に基づいて居るらしい。

(一)大不列顛協會人體測定委員報告、千八百八十三年。ガルトンによつて示されたものに依れば(自然的遺傳、千八百八十九年)、それは約十二對十三である、『従つて總ゆる呎に對し一時の割合で各々の實測された女性の身長に附加する事によつて、我々はそのように増加され變形された彼等の身長を

同等の期間に於ける男性の實測された身長と比較する事が出来るのである。』その種族がすつともつと短身である白耳義ではその比は、クトレーに依ると十六對十五のようである。

(二)今日の佛蘭西婦人の高さは、ア・マリー及びマツクオーリツツフ(アカデミー・ド・シアンヌ、千九百一十一年五月一日)に依ると一・五七米突である。若し我々が千八百三十年に於けるパラン・デュシアートの賣娼婦の高さ(一・五四米突)を一般の女性的住民に適用出来るものとして許す事が出来るならば、そこには斯く輕微の増加があつたのである。佛蘭西の男子も又高さに於て増加してゐる。エー・プロツホは千九百六年以前の佛蘭西徵兵の平均身長が一・六五米突であり千九百八年には一・六六米突であり、それは今尙ほ増進しつつあると述べて居る。

サージエント博士は市俄古世界定期市のために男及び女の二つの裸體の粘土像を備へたが、それはハーパート及び様々の少女の専門學校の幾千の學生の平均寸法に基づいてゐた。その二つの像の一般的特性は千八百九十三年七月のスクリブナース・マガジンに斯う記載されてゐる――

「人はその若い男が兩者の内より立派な像である事を承認する。眞直ぐに立ち、四肢釣合つて、強い頸を持つてゐるので、彼は漕手よりも寧ろ走者のよつに見える。然しそこには下卑たるものは何にもなく振けたるものは何にもなく、工場又は都市生活の餘りに多過ぎる車輪の墮落、發育不十分、又は病的な一方に偏した發達を指示すべきものは何にもない。姿勢は彫刻家のものであるに違ひないが然し斯ういふ寸法が示されてゐる、即ち高さ五呎八、重さ一百三十八(着衣せる時百四十九の體量)、胸



腔三十四・膨脹時三十七迄。高さに於ても重さに於ても等しく、此の像は如何なる外の國民英(さへ)の平均を遙かに凌駕してゐる事が再保證されつゝあるのである。

『我々は女の方に来る時、少々看過しなければならぬ所がある。一人の優れた美術家は彼女を専門的見地から調べて、その像を究極的典型として容認する事を拒んだ。勿論彼女の創造者は斯う言つた、そのために君は八九割方此れでない。彼等全部の五十パーセントに正しく相當り、最上の者から最悪の者迄の中途にある。即ちそれをもつと正確に言へば、唯だ最大多数の最大善である一つの像を正直に選ぶであらうと。彼はそれから單純にも少年に對する彼女の劣等の點を人が殆ど囁く事も敢てしない一根據——即ち専門學校に居る女學生は一般にその少年を送る階級と社會的又は智的に同等でない階級から出たといふ事——に基づいて説明した。(此れが真相であつてもなくてもそれは殆ど問題の事實を説明する事が出来なかつた、兎に角此の國に於ける低い社會階級の女は、よく發達した又美しい身體の得達が關つてゐる範圍内では好位置にあるのである)。此の像はより多くの脆性を持ち、それに一致する優美がなく、下半部は上半部よりもいゝ、その分명한證據を残したものは固い腰紐でなくて(腰は二十四以上である)、力と姿勢の直立とを缺いて居る、背部の内方への曲線、體の瘦削である。高さは五呎三、重さは百十四胸圍は三十に過ぎず、足は十吋の長さである。』

重さに於ける相違は、個々の状態に就ては教へる所があるけれども、我々の現在の觀察點から云つて成人には何等重大な意義あるものでなく、又或る點では當てにならぬものである。此れは女の非常に脂

肪の多い結締織を發達させる傾向に基づいてゐる。それはマヌーヴリエが胸部諸器官に比べた女に於ける腹部諸器官のより大なる相對的發達と結び付けてゐる傾向である。彼は斯う云つて居る、『女にあつては血液生成は出血よりも比較上一層發達してゐる』と。彼女は妊娠又は授乳のために備へる不完全に酸化された成分を彼女の組織内に蓄積する、又そうなくて利用されなかつたり完全されなかつたりした時にはそれは脂肪組織を作る。此の傾向は滑かに圓い女性的形體の魅力と柔軟とに對し重に責を負ふべきであると同時に、女が比較的に非生命的な組織を男よりも多く有するといふ事に終り、又彼等をして彼等が實際上あるよりも大きく見えさせるのである。ピシヨフは嘗て三十三の男、二十二の女、及び十六の少年(總て立派な肉體的状态で不慮に死亡した者)に於ける様々の組織の配分を研究するの勞を取つた。彼は筋と脂肪との間の次の如き關係を見出した——

男 女

筋肉…………… 四一・八…………… 三五・八……………  
脂肪…………… 一八・二…………… 二八・二……………

少年

…………… 四四・二……………  
…………… 一三・九……………

クトレーが發見した如く男は四十歳で彼の最大重量に達するのに、女は漸く五十歳で彼女のそれに達

するといふ事は此の脂肪を増す傾向に依るのである。此の同じ傾向は總ての權威者が女にあつてより普通なる事に一致してゐる病的肥滿に對する傾向を引起すのである。例へばブリーチアードの八十六人の場合の内、六十二は女にあり、僅か二十四が男にあつた、又一方ルジアンドルは病的肥滿が女性間では普通であると述べて居る(モスコイ國際醫學會報告、千八百九十七年、第三卷、四十九頁)。

女の體に脂肪のより多い事は古人にも熟知された事實であつて、彼等は火葬の時その有用なノートを取つたものである。例へばブリュタークは彼の「茶話」(第三、四題)中に斯う話して居る、「葬式に於ける經驗は女の體が男のそれよりも溫度の高い事を示して居る、といふのは體を焼くのがその仕事である者達は、女の肉が脂肪分が多くて炬火のやうに燃えるので、何時も男十人毎に女一人を加へて、彼等を焼くに都合よくするからである。』

全身長及び大きさに於ける成人した男の成人した女に對する優越は、全く明瞭でよく確證されてゐる、けれども身體の様々の部分の成長と均衡とに於けるより明瞭ならぬ性的相違はもつと興味あり、意義ある事である。概して言へば、全體の高さに比較して、女にあつては頭が男に於けるよりもより長く、頸はよく短かく、胸はより長く、脚及び腕はより短かいのである。

トビナールは全體の高さを百として數へて、歐羅巴種族の七十八人の男にあつて胸が三三・五に均しく、三十人の女にあつて三四・〇に均しい事を發見した。イー・ハルレスはミューニツヒに於て、九人の男と七人の女とに於て胸が前者にあつては三五・九、後者にあつては三七・八に均しい事を發見した。ク

トレーは白耳義に於て同様の結果を得た。リツカルデイ教授(De nenne Correlazioni di Sviluppo, Note n. 1891) は坐つた體の高さに關して總ての年齢と兩性ととの千二百人のボロニスとモデニスとの人々を驗べて、六歳以下の小兒にあつては性的相違がなく、その次に兩性間の搖動の時期が來り、最後に全身長に對する坐つた體の高さの比例が男にあつては五十二對百の如く、女にあつては五十三對百のようである事を發見した、斯くして女は坐つた時、若し我々が彼女を男性の標準によつて斷するならば、彼女が實際上あるよりも高いように思はれるのである。

ランクは胸の比較上短い事が、完全の發育に達した有機體を指示するが故に、優越の一特徴であるといふ事を無條件に述べてゐる(一)。若し我々が人間の成人を人間の小兒又は猿猴と比較するならば、此の敘述は完全に立證されるのである。クトレーの指摘した如く(二)、成人の頭が出生時の頭の高さの僅か倍に過ぎないのに、胸は長さに於て殆ど三倍あり、同時に腕は約四倍、又脚は出生した時の五倍程もあるのである。此れは女に於ける成長の早熟とより早い停止とに基づく大きさ及び身長に於ける全相違の結果であるかの性的相違の一である(三)。成人した男性の標準に達せぬ内にその生長が停止した全くよく均合のとれた男に於て、我々は女に於けると同じ均合を見出すのである。その大きな頭と小さい脚とを持つた通常の型の侏儒の内に、同じ小兒的型が廓大された程度で見られる。尙優病(英吉利病)の影響に基づく不完全な發達に於て、胸が平均通常よりも僅か約一寸短かいに過ぎず、腕は二吋半短かく、而るに脚は十吋半程も短かい事があり、斯くして小兒型を保持してゐるといふ事が發見された(四)。又

一方巨人にあつては、増加された身長は重に脚の不當な成長に基づくのである。

(1) *Beilage zur urgeschichtlichen Beyern, Bd. VIII, Fasc. 1 and 2, 1838.*

(11) *Anthr. pométrie, pp. 194, 195.*

(三)然し乍ら又ジュツフリダ・リネツゲリ (*Archivio per é Antropologia, 1911, Fasc. III*) と共に斯うも云へる、即ち總ゆる處に見出される女に於ける胸の比較的により大なる長さは、成熟の機能によつて惹起された、又骨盤のより大なる長さに基づく、一性的特徴に過ぎないと。

(四)ショウ・ウオルター・パイによつて確證された『身體の成長率に關する講義』(ランセット、千八百九十年七月二十六日及び八月十六日)。

とは云へ、胸の短かい事が若し我々が様々の人間種族の成人を共に比較する時も優越の標章であると云ふ事は眞實でない。例へばトビナールの示す通り(一)、黒人は比較上最も短かい體を有し、黄色人種は最も長く、而して白人種は中間的位置を占めてゐるのである。

(二)一般人類學、千六十五頁等。

均合に於ける此等の相違から、自然年齢と性に依る身體の中樞の位置に於ける相違が生ずる。均合の規矩に専心した昔の藝術家や著者は、ヴィトルユ・ヴィアスの指導に従つて、臍を體の中心と看做した。此れは正しく事實でない。人間の體は成熟してゐなければならぬ程一層臍が低く、一層體の中心が高いものである。出生時には體の中心點は臍とびつたり一致するか、若くは寧ろ二三センチメートル上

であるかするが、然し成長するに連れて體の中心は下つて行つて、終ひには男にあつては癒著恥骨のやゝ下であり、女にあつてはやゝ上に残る迄になるのである(一)。

(二)女及び新たに生れた小兒に於ける臍の關係は露西亞に於てカクシユキンに出版され又大不列顛醫學新報(千九百十三年五月三日)中に摘要された一論文に於て丹念に研究された。

女にあつては臍と恥部との間の距離は男に於けるよりも大である、即ち女にあつては腹部がより大きいのである。此れはマヌーヅリエによつて述べられた如く法則である。そしてカンニン・ハム教授は數多の主體の研究から様々の腹帯が女に於て男に於けると同じ平均の深さを持ち、男のより大なる大きさを勘定に入れると腹部の比較的大さは斯くして女に於て明白により大きくなるといふ事を見出した(一)。此の特徴は女の生殖機能と一致して居る、而して藝術家の手では脹れた固い腹部が男の比較的扁平な目立たない腹部に比べて女の形態の美の一つである、然し同時に大きい腹部は小兒的並びに原始的特徴である、例へばそれは數年前ロンドンにゐたフューギア人に於て極めて著るしかつたし、又その腹部を曝け出してゐた一人のフューギア人の少年は女に對する強い相似を持つてゐた。

(二)『腹の各部の立界』、解剖及び生理學雜誌、千八百九十三年一月。

尙ほ一層顯著な性的相違は乳房に存してゐる。少女の乳房は、南露西亞の猶太人間で綿密な觀察をなしたワイツセンベルヒに依ると、十歳前に發達し始める(一)。然し乍ら此處に述べる價值ある唯一の性的相違は乳首間の距離である。此れは屢々女に於けるよりも男に於てより大である、此れに對する理由

は、ブルークの描する如く、その發達上女に於ける乳房がその益々凸状な表面のために多くの皮膚を要し、又體の方にある皮膚が乳房の間のそれよりも早く應ずるので、乳首が近接す。傾きがあるといふ事である(二二)。一人の彫刻家は嘗てブルークに斯う云つた、「乳房は常に確執してゐるべきである、右のものは右に向き、左のものは左に向くべきである。』よく發達した個々人にあつては此れはそうである、そしてクトレーによつてその「アンソロポメトリ」の終りに記された藝術家のモデルの注意深い測量に於て、乳首間の格別な距離は注意に價ひすべく、殊にローマ及びカデイツに屬する女の場合に於てそうである。

(一)ワイツセンベルヒ、「人間の生長」、百四十三頁。少年にあつても亦乳房の輕微な膨脹と疼痛が往々發情期に起るものである。ワイツセンベルヒはそれが通常十四五歳頃に起ると記し(二百四頁)、此れを少女に比較した少年の遅い性的發達の例證と看做して居る。

(二)イー・ブルーク著、「人間の形態」、七十一頁、七十二頁。此の書の第三章は女性の乳房の藝術的解剖に關する興味深い論議である。人類學の見地から乳房はプロツス及びマツクス・バルテルの名著「女」(第一卷、第八章)中に充分研究された。此れ等の著者は四つの違つた乳房の形を認めて居る、即ち鉢形(半分のタンヂール橋の如き)、半球(林檎の半分又は四分の三の如き)、圓錐形、及び山羊の乳腺形是れである。

胸部其物に於ける性的相違に關しては、最も權威ある解剖學者等は現今格別に難多である。此れは一

部分多數の主體に關する多くの詳細に涉つた研究が未だなされなかつたといふ事實に基づき、又一部分今尚ほ文明婦人間に極めて普通である胸腔の人爲的不具を酌量する必要があるといふ事實に基づいてゐる。ゲゲンパウルの確言する如く女性の胸腔が男性よりも比較的短かく又廣いといふ事は最もありそうに思はれる。此れは又女に於ける脊梁の背部の短い事や胸骨の相對的に短い事(ドワイト並びにより早い頃の解剖學者等によつて示された如く)によつて暗示され、又女に於ける鎖骨のより大なる相對的長さ(ブローカ及び其他の者によつて示された如く)によつて暗示されて居る。胸腔の前後の深さが男に於けるよりも女に於てよりも少ないといふ事も亦事實らしく思はれる。男は大きい胸部と小さい腹部とを持ち、女は小さい胸部と大きい腹部とを持つといふ事が昔の解剖學者に確言された。女に於ける呼吸組織の著るしい劣等と合致してゐる此の結論は疑ひもなく眞實であるけれども、女に於ける胸部の下半部の人爲的緊縮を充分酌量したようには思へない。

シアルピイは解剖室で二百人の主體——男性及び女性、短身及び長身、白色及び黑色——の綿密な研究をし、胸腔の形に特殊な關説をなした。彼は十五歳迄目に立つ性的相違を見出さない、そして此の後も多くの人々が想像するより著るしくない。彼は女性の胸腔の三つの相異なる型を認めてゐる(けれどもそれは人類學者よりも藝術家にもつと明瞭なものである)、即ち(一)廣い型、男のそのように方形で脹れ、よく擴つた肩と大きい圓盤のような乳房とを持つてゐる、それは古代女神、タスカニー及びリギネリアの女、及びトランストヴェールの羅馬婦人の型である、(二)圓き型、より稀れであり、又より纖

細な非常に性化された性質のものである。それは第一の型よりも小さく且つより多く摺まれ、より少ない前後の直径を持ち、ヴェネチア婦人の胸部である、(三)長い型、長方形の肺臓を持つてゐる(尤もその容量は恐らく少しも不完全でなからう)、それは英國婦人の型であり、又その傾斜した肩と優美な風采とを持つた亞刺比亞婦人は屢々此の型を持つて居る。(アドリアン・シアルビー、"V. Angli Xiphoidie" *Revue d'Anthropologie*, 1884, p. 268)

女にあつては、概して言へば、腕は比較的長いけれども、四肢は比較的短い。その短かい腕によつて女はランクの指摘する如く男よりも小兒的狀態に接近してゐるが、然し同じ特徴によつて彼女は猿及び野蠻人(彼等の間では前膊が特に極めて長い)から男よりも遙かに隔つてゐるといふ事を附言しなければならぬ。

此の相違は通常一寸としたものであるが、然し大抵の重なる權威者達の間には此點に關する一致があるのである。それはノヴァラの航海中驗べられた様々の下等な種族間に事實である事が發見され、又ワイスバツハによつて獨逸婦人にも又事實である事が發見された、トビナルはそれを一般的法則となしてゐる(一般人類學、千九十六頁)、サージエントは亞米利加の少女の前膊が少年よりも確かに短かく、又腕が極めて僅かに短かい事を發見した、又ランクは女がより短かい腕と前膊、腿と脚を持ち、彼等の短かい上腕に比べて前膊は尙ほ一層短かく、又全四肢の上半に比べて下半が一層短かいといふ事を彼の諸觀察の結果として結論して居る。(ランク、"Beiträge zur physischen Anthropologie der Rassen," *Beiträge*

*zur Urgeschichte Bayerns*, B.IV.iii, Fasc. Band 2, 1889) 瑞西に於けるシュウエルツは又少女が少年よりも身に比してより短かい腕を持つといふ事や、少年に比較して少女は又總ての年齢に於て前膊に比べてより長い上腕を持つてゐるといふ事を發見した(Archiv f. Anth., 1911)。女の腕は脚よりも比較上より短くない。時優越を指示するが、然し腕の特別に長い、黑人やオーストラリア人のような、下等な種族に歐羅巴人を比べる時は劣等を示指する所の諸特徴の内にあるのである。

男性の腕は若年時により扁平であり、成年時により立派な形に作られ又より少なく圓筒状である點で女性と異つてゐる、女にあつては成年時の腕は脂肪の蓄積の結果圓形に發達し、そして成熟した女の重なる美の一つを成すのである、それは又屢々幾分側部上壓縮されるものであつて、(ブルークの言ふ如く)ルネツサンス時代の藝術家によつても廣く淺い前膊に比較してそういふ風に描寫されてゐる。藝術家達は少年の腕及び少女の腕に關する彼等の擇り好み上異つてゐた、例へばバルマ・ジオヴァーナ及び多くの其他の藝術家は彼等の天使に少女の腕を與へたけれども、アンドレア・デル・サルトーは少年の腕を選んだ。

ブルークは少女の腕に於ける運動の效果に關し或は實際的な諸觀察を持つて居る——「多くの母は彼等の娘が何か腕の運動をするとその腕が男性的の形になりはせぬかと恐れてゐる。然し乍ら此等の同じ娘達が毎日幾時間もピアノに向つてゐて、それを演奏するため劇しい排他的な風で前膊の或る諸筋肉を

働かしてゐても何の懸念も示されないといふ事は注意すべき事である。而もそこには一般に恐怖に對する根據は少しも存してゐない。身體の運動行使は唯だ二つの條件の下で身體の形に悪い影響を及ぼすに過ぎない。即ち彼等が年齢に於て餘りに早く始まる時か、又は彼等が瘦衰を引き起す程過度である時か孰れかである。劇しい運動は此の點では何の害する所もなく行はれる事がある。例へばレオナ・デアの名の下に世界の總ての大都會に於て彼女の腕の美を示した有名な體操師範によつて證明されてゐる。(イー・ブルーク著、「人間の形態」、四十八頁、四十九頁。)更に最近の例としては私は體操師範アルサイド・キヤピテインの美しく發達した腕に言及出来る。

手とその様々の部分の均合との研究は時々可也な注意を受けた、そしてストラツスベルヒに於けるプヒツツネルによつて非常に詳細に研究された。歐羅巴人は概して言へば、黒色人種よりも小さい手を持つてゐる、黄色人種は最も長い手を持つてゐる。例へば日本人は特に長い手を持ち、それは手が重なる役割を勤める特色ある日本の踊りに大變都合がよいらしい。手の相對的大さに關しては、クトレー及びトビノールは性的相違がないと考へた、然し乍らランクは最近手が女に於て比較上やゝ短かい事を發見した、そして此れはプフィツツネルの諸研究によつて確證されるように思はれるが、然し如何なる場合にもその相違は輕微である。

相異なる指の比較上の長さに於ける性的相違は或る注意を惹いた。エツケルは多年前、似人猿にあつては、從つて又殆ど總ての黒人にあつては、人差指が無名指よりも短かいけれど、女(女黒人もも包含す

る)にあつては人差指が男に於けるよりもより多く屢々無名指よりも長い傾向があり、斯くして手により多く優美な形を與へるといふ事を發見した(一)。マントガツツアは此の點に關し非常に多數なる人々を驗べて、五百人以上の者は無名指よりも短かい人差指を持ち、此れに對して百人以下の者がより長い人差指を持つてゐるけれども、前者の内では男が多數であり、後者の内では女が多數であつた、女の六十三パーセントに對し男の七十七パーセントがより長い無名指を示したが、女の二十一パーセントに對し僅か男の七パーセントがより長い人差指を示したといふ事を發見した。伊太利の様々な地方からの極めて美しい十二人の女を驗べて、彼は六人に於けるより長い人差指——可也平均以上なる割合——を見出した、彼はより長い人差指その物がより美しい事を見出すとは云はうとしてゐないといふ事を附言してゐる(二)。プフィツツネルは女に於ける人差指のより大なる長さの事實を確證した、そして又女の拇指が比較上男のよりも短かいといふ事を見出してゐる(三)。後の特徴は比較的に低い型の有機體と平行するが、然し長い人差指は女の保守的な形態學的傾向を心に思ひ浮べるとその興味を持つてゐるのである。といふのはそれはより勝れたる進化を指示するからである。

(一) Arch. für Anthropologie, Bp. vii, p. 65.

(二) P. Maniezza, "Della lunghezza relativa dell' indice," Arch. per l' Antropologia, 1877, p. 22

(三) ダヴルユー・プフィツツネル、「人間の四肢骨格の知識に關する寄稿」、及び「手及び足の尺の人類學的關係」(シユワルベの形態學的研究、第一——二卷、千八百九十一——九十二年)

ワイツセンベルヒは此等の結論を證據立てた、彼は猶太人に於て、殊に猶太の女に於て人差指の優越が異常に著るしいのを發見した、そして彼はアツシリアの浮彫及び埃及の彫像に於て無名指が一般に人差指よりも長く、兎に角前者の場合では美しい型のものである事に氣附いた(一)。フェレエは男女及び猿に於ける手と指との鈎合を研究したが(二)、若し別の指々の長さを中指に較べるならば、拇指は男に於けるよりも女に於ける方が短いけれども小指は比較上尚ほ一層短く、又一方猿にあつては拇指は短いけれども小指は長いといふ事を見出して居る。

(一)エス・ワイツセンベルヒ、「手と足との形」、人種學雜誌、千八百九十五年、第二號。女に於ける人差指のより大なる相對的長さに就ては、又セルヴィダリ及びベネツシの「Saggio antropologico sullo m-  
dit」(精神病學記録、千九百九年)を見よ。

(二)解剖學及び生理學雜誌(佛)千九百五年——六月。

成人した文明の男が小兒と均合上最も顯著に異つてゐるのは彼の比較的長い脚によつてである、(尤もその脚が往々極めて長い野蠻人とは必ずしも異つてゐない)、そして脚は最も急速に又最も様々な程度迄成長するかの身體の部分である、それは又發達の早い頃の停止によつて最も影響せられるかの身體の部分である、尤も此れには腕も又大いに與る所があるのであるが(一)。腿は最大の急速を以て成長し、又最も確然たる性的相違を示すものである。女にあつては腿は男に於けるよりも著るしく短かい、それはより大きく又違つた角度で置かれてゐる。男に於ける腿のより大なる絶對的及び相對的長さに就ては

何の問題もないように思はれる、尤も研究の諸結果は脚に對する如何なる相似の著るしい相違も示してゐない、又或る觀察者達によると脚は女に於て比較上極めて僅かにより長いといふ。女に於ける腿のより大なる周圍は極めて著るしく、又比較的早年に始まるものである。それは實に我々がそれは發情期の初期から此方歐羅巴及び亞米利加の女にあつて男に於けるよりも絶對的にも亦相對的にも常に確實に大きいといふ事を安全に云ひ得る唯一の量度であるのである、といふ譯けは臀部の直徑及び尚ほ一層周圍は比較上男に於けるよりも女に於て大きいけれども、我々が完全なる形態を取扱ふ時、その過剩は實際上よりも大きいように思はれ、又不變に存在しはしないか、又は兎に角そんなに早い年に存在はしないかするからである。白耳義人に關するクトレーの測定によれば、腿の附根の周圍は十四歳の少女にあつて絶對的により大きくなり、又十二歳後さへ少年に於けるよりも相對的により大きいといふ、又一方サージェント博士は亞米利加の十四歳の少女の腿が平均完全なる形態にあつて十四歳の亞米利加の少年のそれよりも二吋大きいといふ事を示してゐる。二十歳の平均年齢の四百人の男性及び女性の學生(彼等は亞米利加に於て尋常の住民をよく代表してゐる)を測定して、サージェントは女に於ける腿の周圍が男に於けるそれを一吋四分の一超過して居り、又女が絶對的に男を凌駕する唯一の量度である事を發見した。

女の大きい腿、及びそれと一致する臀部の發達は、明白な女性的特徴である、既に關説した脂肪のより大なる堆積の一例證と看做さなければならぬ。

我々は此處に於て脂肪の分配に於ける一特質に會ふのであるが、それは不變であるので眞の第二次的性的特徴と名付けてもよく、又往々そうであるのである。即ち女に於ける脂肪が堆積されるのは主に腿及び臀部に於てである。此れは屢々美しいものと看做され、亞弗利加の或る地方では、それがステアトピアと名付けられた非常に廓大された形で存し、大いに嘆美されてゐる。(ステアトピアの分與に就ては、例へばデニカールの「人間の諸種族」九十三頁、及びシャットツク、「王立醫學會報、病理學部」、千九百〇九年を見よ。)輕微な程度では發情期後の女の腿及び臀部に於ける脂肪の此の優越は通例と看做さるべきである(尤もその除外は健康及び充分なる一般的發達と矛盾しはしない)けれども、臀部及び其近接部の此の充分な發達を待ち乍ら、その身體の上半部が殆ど瘦せてゐる女を見出す事は決して稀れでないのである。著るしい程度では此の状態は *lipodystrophia progressiva* と名付けられた、殆ど又は全く女に限られた一疾病を成して居る、が尤もこれは必ずしも進行性のものではない。此の疾病にあつては皮下脂肪は顔、腕、及び胸から消失して居る、而るに脚及び臀部にはそれが影響されないので残つて居るか又は量の上で増加してさへゐる(エフ・パークス・ウエバー、「リポデイストロフィア・プログレッツヴァ」大不列顛醫學新報、千九百十三年五月三十一日)。平なる國(和蘭の如き)に住むのは臀部の大きさを増すといふ事が主張された(ゲイラール、人類學會報、千九百十二年、三百五十七頁)。此の傾向は重に女に於て著るしいであらう、といふのは女は此の部を發達さす諸影響をより多く受け勝ちであるからである。

サージェントは女の大きな腿が腰に於ける人爲的緊縮によつて惹起された血流に對する障害に基づいてゐると云つて居る、が然し此の意見は支持されぬものであり、又非常に信じ難いものである。女にあつては腿は短いけれども急速に尖細になつて居る、そして下半部ではそれは絶對的に殆ど假令少しでも男のそれよりも大きくない。その結果男性の腿は圓柱狀であり易いのに女性の腿は圓錐狀である傾きがある。此の特色は女性の形態に或る不安定の外見を與へ、又その結果は骨盤の廣さに起因してゐる女の腿の著るしい内方への傾向、それが極めて著るしい程度で存する時、外翻膝の觀を與へる一傾向によつて増される、そしてその腿の内的傾向は脚的傾向によつて補はれるのである。又上半四肢の類似した傾斜がある、前膊は腕と眞直ぐな線を畫いてゐない、そして此の傾斜は又女に於て強められてゐる。九十人の女にあつてポツターは上腕と前膊との傾斜の角度が一六七・三五度であり、九十五人の男にあつてその角度が一七三・一七度である事を發見した(一)。然し腕に於ける眞直の除外は目立たず又目の要求と何等矛盾する所がない(といふのは腕は通例體の重さを支へると思はれないからである)けれども、それは脚を以つてしてはそうでない。脚の此の傾斜は直立の姿勢に於ける女性の形の最も顯著な美的缺陷であり、又一方女性をエネルギーの態度に不適當にし、彼等を脚の交互の半圓的廻轉によつて走らなければならなくして居る。大きな臀部を持つてゐる文明婦人にあつては此の特色は小さい臀部を持つてゐる野蠻人に於けるよりも遙かに 瞭である。藝術家達はそれを隠すために様々な工夫を試みた。それは臀部を薄らげる事や又女に比較的男性的な輪廓を與へる事によつて、或ひは腿及び脚の延長によつ



て極小にされる、例へばタントレットがその女達に與へた長い、眞直ぐな、美しい脚は本質上女であつては滅多に見出されない神人の釣合の規矩に殆ど一致して居る。

(一) エーチ・パーシー・ポッター、『延長に於ける女性の腕の傾斜』解剖學及び生理學雜誌、千八百九十五年七月、シーランゲル著「外方形の解剖學」、二百六十九頁、イー・ブルーク著「人間の形態」、千八百九十一年、八十三頁。

腿のより大なる大さと一致して、脚の腓も又女にあつてはより大きいようである。ワイスバツハはノヴァラの航行中、女は一般に男よりも大きい腓を持つてゐる事を見出した、カナカ人は一つの例外であつた。低級な種族は一般に細つそりした腓を拜ち、大きい時にそれを嘆美しない。コンゴ及びスダンの黒人は著るしく細い腓を持つて居る、そして運動行使は低級なる種族の腓を發達させる點で殆ど影響を持つてゐない。日本人及びポリネシア人は大きい腓を持つて居るが、然し大體に於て大きい腓は白人種の特徴であつて、彼等にあつては行使によつて一層容易に發達させられる。細い腓がより高い種族の一に現はれる(例へば古代埃及人の間に於ける如き)時、それは隔世遺傳的特長で黒人系統の徴と見るべきものであるとプロツホに信ぜられて居る(一)。

(二) エイ・プロツホ、『腓の膨脹』Ball. Soc. d'Anth. 千九百九年、十七頁。股及び脛に於ける性的相違はベルロ・イグレッツク・ロドリゲーによつて「股及び脛」(Thèse de Paris, 1909)中に研究された。

足は手よりも多くの研究をさへ受けた、そして或る興味深い性的相違が顯はれて居る。プフィツツネル

は手と同じ注意を以て足を研究したが(二)、足には二つの型がある事を發見した、即ち長いよく發達した中趾骨を持つた延長的型、及び中趾骨が短かく劣つてゐる短縮的型これである。第一の型は男に於て又第二の型は女に於て最も普通である。孰ちらがより原始的の形であらうか。彼は斯う云つて居る、我々は女の形をより原始的と看做すに慣されてゐるが、然し此れにも拘らず自分は女に普通な短縮的型をその種族のより近時の取得物と看做す方に傾いて居ると。同時に彼は短縮的型を進歩的進化よりも寧ろ退歩的それと看做してゐる。「何人も短縮的型の中趾骨を見て、それが如何なる高級な哺乳動物にも價値ないものであり、又唯だ一つの *Pithecanthropus* と看做すべきものに過ぎないといふ事を認めない事は出来ない。』彼等の拇趾並びに彼等の拇指から言へば女は男よりも發達してゐない、長い拇趾と長い拇指とはその種族の近時の得たる所であり、彼等は比較して男に於いてより長い(二)。プフィツツネルは小趾に又僅か二關節を持ち、中趾骨及び末端趾骨が一處に接合する傾向があるといふ事を見出して居る。此の結果は人爲的に生ぜられたものでない、といふのは成人に於けると略ぼ同様胎兒及び小兒にあつて普通であるからである。其れ故に現在では小趾の進歩的又は、プフィツツネルの認めた如く、退歩的發達があるように思はれる、尤もそういふ事柄にあつては變質は唯だその特殊な部分に當嵌るのみで、その有機體に一般にはないといふ事を多分附言すべきであらう。より高い進化の道程は常に最早必要のない特殊な器官や部分の消失又は變質によつて伴はれた。女が此の移動に導かれるように思はれるといふを認めるのは興味ある事である。男及び女の百十一の足の内で女の四一・五パーセントは此の關節

の合同を示し、男は僅か三一・〇パーセントに過ぎない。然しプフィッツネル自身の言つた如く、此の性的區別を確證するために多数の主體に對する新しい諸研究が必要であるのである(三)。

(一) シュウワルベの「形體學研究」第一卷、九十四頁等。

(二) その原始的性質と一致して、長い第二趾も又胎兒的特長である事、プロローヌが示した通りである(ストラッツ著、「女性的形體の美」千九百三年、百九十六頁に引用されて居る)。

(三) ダヴルユー・プフィッツネル、『小趾』Archiv für Anat. u. Phys. 第一及び二號、千八百九十年。拇趾及び第二趾の相對的長さは指を研究する時ワイツセンベルヒの注意を占めた、(N. F. B. 千八百九十五年・第二號、九十五頁)。彼は觀察した諸々の場合の半分以上(希臘人、猶太人、等)にあつて拇趾がより長い、バシユキル人にあつては第二趾がより長い傾向のある事を見出した。希臘の女は男よりも屢々より長い拇趾を持った、然し猶太の女は猶太の男程屢々でない。英國ではパーク・ハリソン(人類學々會雜誌、第十三卷、千八百八十四頁)は第二趾が女に於て、又拇趾が男に於てより長い傾向のある事を見出した、様々のグループでは性的相違が著るしかつた。パピローは巴里に於てより長い第二趾を示してゐる個々人の間で女の極めて僅かな超過を見出した(十六パーセントの男に對する十八パーセント)、そして最もよく整合した足は長い拇趾を持つてゐると考へて居る。又一方ストラッツは最もよく發達した足は長い趾を示すと信じて居る、而してこれが最も美しい形であるといふ事は、國立美術展覽場又は總ての其他の場處に於ける繪畫を檢べて見れば分る通り、些の疑ひもあり得ないのである。長い人

差指の女に於けるより大なる優越に對する傾向は斯くして長い第二趾に對するより不斷でないけれども類似した傾向によつて伴はれるようである。ワイツセンベルヒは古代希臘の彫像が通常より長い第二趾を示してゐると記して居る、そしてそいふ選り好みには美學的理由が存してゐる事を認めて居る。埃及の彫刻に於て(埃及の小石像に於いては)はないけれども(ワイツセンベルヒも又第二趾が通常より長い事を見出した、アツシリアの浮彫では拇趾が常により長い。特別に長い第二趾を持つ傾向のあるパピュアン人は、斯くして近代歐羅巴人よりも遙かに古典的理想に近附いてゐるように思はれるであらう。ロンプロゾーはテューリンに於て嘗て此の點に關し、常態の者や病的の者や様々のグループの主體を驗し總ゆるグループに於て女が男よりも短い趾のより大なる割合を示す事を發見した(Arch. di Psich. 千九百一年、三百三十七頁)。さり乍ら此の不同の意義に關するロンプロゾーの一般的結論は缺點が多いといふのは彼は以前の諸觀察者によつて得られた結果を完全に知つてゐなかつたからである。

オットレンヒ及びカルラは多数の人々——男女、正氣の者や發狂者、犯罪者や賣淫婦——の足を驗べて、拇趾とその近接のものとの間に幾ら間隙があるを見出し、それからその個人の足が原始的捕捉的狀態に近附いて居る程度を見積らうとした。百人の常態の男と六十二人の常態の女とを綿密に驗べて、彼等は最初の二つの趾の間隔と彼等を離す力とが男に於けるよりも女に於て遙かに著しい事を發見した、著るしい場合の割合は女の間では二十八パーセント、男の間では僅か十一パーセントに過ぎなかつた。男性の犯罪者、賣淫婦、癩癩患者、及び白痴の間では屢々下等な種族間に存する捕捉的狀態に向

は一層接近してゐた。(Cottolenghi e Carrari, "Igiene Pensile negli climi e nei delinquenti" Arch. di Psichiatr., 1902, Fasc. IV, V.) 然し乍らハツセルウアンデン (Zeitschrift für Morphologie 千九百九年、第一號) に依ると、足の小さな骨の硬化と骨著癒とは少年に於けるよりも少女にあつてより早く始まるといふ事に注意しなければならぬ、是れは單に少女のより大なる早熟に關係して居るのであらう。私は女が通常の生活に於て男よりも多く彼等の趾を使ふといふ事は確からしいと云ふ事が出来る。此の點に關し私に書いて寄越した一人の婦人は、女に好まれる尖つた爪尖を持ちさへした女の靴が、實際上趾の横的運動に大いに干涉する、而も其等が男の深靴よりも薄く又柔軟であるといふ事實は又運動に都合がよいといふオットレンヒ及びカルララの叙述に異議を唱へて居る。彼女は自分自身に於て立つて居る時より大なる安定を得ようとする本能的努力で踝を少し上の方に轉じ爪先きを以て抓くようにする傾向を認めて居る。彼女は此れが歩いてゐる時も立つてゐる時も女の間に普通であり、又一方女は疑ひもなく舞踊に於て男よりも多く彼等の趾を用ゐるといふ事を信じ、又女の靴の踵が、殊に下等な階級の間では、屢々外側に於て磨滅してゐるが、勇のはそれ程屢々でないといふ事を認めた。女の趾のより大なる捕捉性と屈曲性とは斯くして恐らく、有用な原始的特色の保留を含むと同時に、手眞似話に於て女が指をより多く用ゐる事と類似した一現象であらう。

幾分鳥瞰圖的に我々は此の章で人類學的研究の極めて廣い分野を觀察し得た(一)。男女間の相違が唯だに成長の一般的釣合及び法則に及んで居る許りでなく、又別々に離された身體の各部に及んでゐると

いふ事や、又平均にして考へれば、男は單に彼の拇趾迄男であり、女は彼女の小趾迄女であるといふ事は充分に明かにされた。三つの一般的結論が明瞭に顯れて居る、即ち(一)女は男よりも早熟である(二)女にあつては發達のより早い停止がある、(三)此等の二つの事實の結果として、女の釣合は小さい男及び小兒のそれに接近する傾向がある。此の女に於ける肉體的型のより大なる幼年性は極めて根本的な特色であり、その影響は最も懸け離れた心的幽所迄震ひ響くのである。それは第二次的性的相違の組成上重要な一要素であるが、然し決して唯一の要素ではない。

(一)多くの更に進んだ委細は共に「人間の成長」と題されたグツフネル及びワイツセンベルヒの各々の書中に、又千八百九十六年 Real Encyclopädie der Gesamten Heilkunde 第三版に、載せられたビュツシヤンの論文「體重」(全體としての身體及びその各部を共に取扱つて居る)中に、又千八百九十六年 Morphologische Arbeiten 第七卷に掲げたフイツツネルの「人間に於ける第二次的性的區別の知識に關する寄稿」、及び千八百九十九年から千九百二年迄 Zeitschrift für Morphologie に公けにされた同著者苦心の「社會人類學研究」中に見出す事が出来る。

兩性の肉體的釣合及び發達に關する此の一般的概略に於てさへ、我々は斯く既に我々が極めて屢々關係するであらうと思はれる一特色に會つて居る、即ち女のより大なる幼少性は是れである。女の側に於ける小兒との接觸の此等の點の存在に關しては非常に多くの異論とはなく、その存在は本書の出版以來一層特にオスカル・シアルツエ(人類學的考察に於ける、千九百六年)によつて、又セルハイム(永遠の女

性の神秘、千九百十一年）によつて力説された。此れに關する異論は唯だ此の事實の意義に關して居るだけである。或る者にとつてはそれは何の意義もない偶然の暗合であり、他の者にとつてはそれは女の劣等の一證據であり、天の小兒の如き諸性質を呼び出す他の者にとつては又それだけ女の優越の一證據である。此れに對つた見地から言へば、そこには劣等とか優越とかの問題がある筈がなく、而も女の幼少的特色は、我々が今後再三見る通り、世界に於ける女の特殊な職務に關し非常に意義深いものである。各性は同時に(ワイツセンベルヒが主張する如く)それ自身の方向に沿ふて充分に發達して居る、そして男及び女の相互に對する類似は小兒に對する如何なる類似よりも比較出來ぬ程大きいのである。

## 第四章

### 骨盤

最も勝れたる第二次的性的相違——骨盤の構造——小兒時代に於ける骨盤——脊柱に關係せる骨盤——男及び女に於ける直立姿勢の影響——骨盤の傾向——鞍狀骨盤——人間の脊柱の進化——直立的姿勢の不便——骨盤に就ては女は進化に導く——性的情緒の發達に關係ある骨盤の進化。

前章に示した人間の成長と釣合とに於ける性的相違の簡単な叙述にあつては、兎に角現在の見地から我々が體の二つの最も重要な部分と看做しても宜いものには少しも注意が向けられなかつた。頭に付いても骨盤に付いても何の言ふ所もなかつた。頭は唯だに體の最も顯著な又一般的に興味深い部分として許りでなく、又それに盡された非常に多くの研究、今日我々が過度とさへ考へてもいゝ程の多量な研究のために、これのみを離して注意を向けるに相當してゐるのである。骨盤は總ての骨の人間の第二次的性的特徴の内最も否む事の出來ない、顯著な、又不變なものであるが故に、一章を與へるに相當して

ゐるのである。夥多の低級な種族間では實に此れは餘り著るしくなく、例へば中央亞弗利加の數民族の女は、後ろから見た時、殆ど男と區別する事が出來ないのである。骨盤が（コーチャー及び其他の人々の叙べた如く）廣く擴がつてゐる亞刺比亞婦人さへ、よく發達した歐羅巴婦人の球狀發達の如きものは少しも示してゐない。骨盤は人間進化の道程中發達した、黒人種の或るものにあつてはそれはその狭い點と小さい容積の點とで猿に似て居るけれども、最も高級な歐羅巴人種にあつてはそれは一つの性的區別となつてゐて、直ちに目を打ち殆ど抹殺される事が出來ない、又一方此等の種族の女は人爲的手段によつて尙ほ一層それを強めようと努めて居るのである。それは高い進化の證據であり同時に能力ある母性の期待である。昔の權威者等は總ての第二次的性的區別の内の此の最も勝れたるものを強調して、男女共にその軀幹は大いに一端と小さい一端とを持つた、一つの卵に比較さるべき、一個の橢圓體の形を表してゐて、男にあつてはその大きい端が上であり、女にあつてはそれが下であると言つた即ち男にあつては肩の直徑が腰のそれよりも大きく、女にあつては腰の直徑が肩のそれよりも大きいといふ事なのである。此の叙述は、マシアス・デュヴァル及び其他の人々が示した如く、誇張されてゐる。正しい定式は男女共に軀幹は第一に大きい端を持つた一卵圓體であつて、男にあつては上下兩端間の相違が著るしく、女にあつてはそれが輕微であると言ふ事によつて示されるであらう（一）。例へばワイツセンベルとは南露西亞の猶太人の男の間では臀幅が三百三十六ミリメートルの肩幅に對し二百七十七ミリメートルであるのに、女にあつては三百三十六ミリメートルの肩幅に對し二百八十一ミリメートルの臀幅であ

る事を發見した（二）然し女の臀部は男のそれよりも常に又何處でも廣いとは云へない。例へばサージエント博士の示す如く、十七歳及び二十歳の間の亞米利加人に對しては、女の臀は、相對的には四吋より大きいけれども、絕對的には男のよりも小さい、二十歳には臀の周圍は實際の測定上男に於けるより女に於て二分の一時小さい、が然し若し我々が同じ高さの男女を取扱ふならばその周圍は男に於けるよりも女にあつて六吋にも及ぶ程大きいのである。腿の周圍は男に於けるよりも女に於て絕對的に又殆ど永久的により大きい唯一の外的容積を持続して居る。尤もその大さは骨盤の相對的に大きい大きに多く依つてゐるのである。

（一）エム・デュヴァル著「美術的解剖學概論」、百二十五頁。

（二）そのみならずワイツセンベルヒは男に於て臀幅は二十歳と五十歳との間に僅か五ミリメートル丈け増加したに過ぎないけれども、女にあつては十四ミリメートル丈け増加したといふ事を發見したタストウオツツフは二十歳迄の六百人の若い人々の間で、九歳から以向臀幅が少女に於て著るしくより大きい事を發見した（それはワイツセンベルヒによつて確證されてゐる、前書、七十六頁）。

骨盤——體の下半部の骨帯——は人間にあつては四足獸に於て見出されるものと非常に違つた諸狀態の下に働いて居る。動物にあつてはそれは體の後半部を支持するアーチを作つてゐ、而もそのアーチはその體の重量を支へる軸線に直角をなしてゐて子孫がよつて以て世界に出る門を作る事が出来るよつてなつて居る。人間にあつてはそれは唯だに軀幹の全體の止みを又持する許りでなく、又その重みは體か

ら門口の軸線と殆ど同じ線に落ちてゐる。直立の姿勢に對する骨盤の順應はそれ故に體力の極めて微妙な調整となつてゐる、又此の調整は女にあつてその最高點に達せられなければならないので、女の骨盤はより多く動物に似た諸特徴を留めてゐる男のそれよりも多くの點で非常に發達して居る。

骨盤は上部は腸骨より成り、人間にあつては廣く擴がり又割られてゐる、背部は薦骨と呼ばれるかの脊柱の融合した部分から成り、その下部が尾骨と稱せられる廢退器管の薦椎に終つて居る、前部は相合して様々の度合の角度を作る二個の恥骨から成つてゐる、低部は二個の坐骨で、坐つた姿勢にある體の重みを支へて居る。骨盤を成す總て是等の四つの骨群は男にあつて又女にあつて相異なるように配置されてゐる、そしてその相違は數多く又著るしいのである(一)。然し乍ら其等は大部分男にあつては骨盤が長く狭く、又丈夫に造られ、女にあつてはそれが廣く、比較的淺く、又繊細に造られてゐると云ふ事によつて容易に表はす事が出来よう。人間の比較的原始的な猿に似た骨盤はまだ生れぬ子のために生命の門を擴げる目的で内部から下方へ働く力によつて外方へ壓迫されたかのである。通常産科の筆者に説明される如く、女のより大なる骨盤は女に於て骨盤内に含まれてゐる性的器管による。さういふ力に實際に基づいて居る。女に於ける骨盤の擴がり開いたための二次的な偶發的な結果は、腿の増加された大さと腿骨の起點間のより大なる間隔とに在り、それは女性的形態のあゝも顯著な特色を作るのである。

(一)其等は多數の解剖學者によつて詳細に研究された。アール・ヴェルノーの古典的著書、性と種族とに於ける骨盤(巴里、千八百七十五年)は尙ほ細く價值があらう。佛蘭西の解剖學者サツペイも又そ

の性的相違の明瞭な概論を示してゐる。又ガーソン、『骨盤測定』(解剖學及び生理學雜誌、千八百八十一年)を見よ。様々の種族の女に於ける骨盤と臀部とに於ける相違に關しては、プロッス及びマツクス・バルテルスの「女」第一卷中の例證ある章、『人類學的關係に於ける女の骨盤』及びイー・マルリ

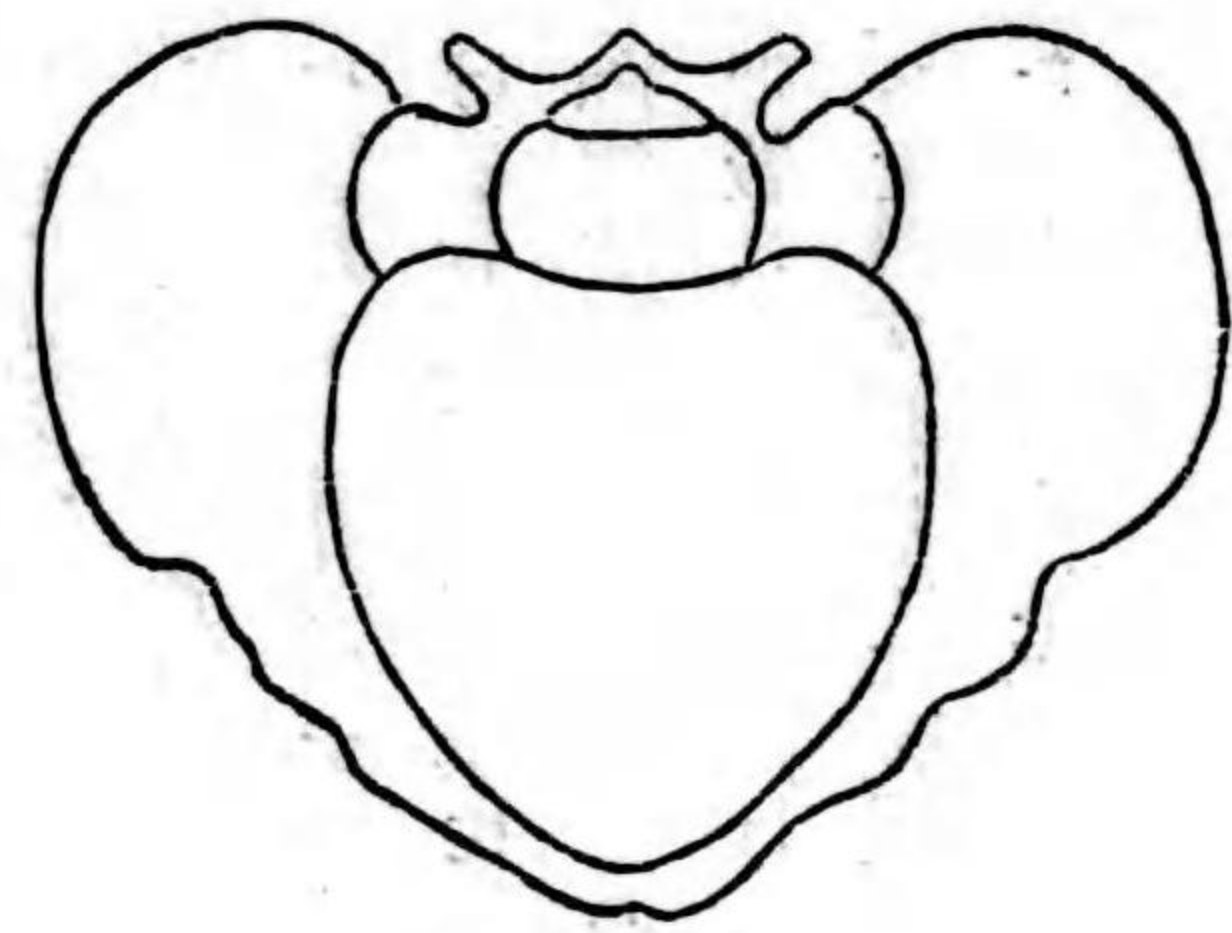
の "Sulla forma dei Bacini in Razze diverse" (Arch. per l'Anthrop., 1892, Fasc. 1.) を見よ。

女に於ける腰骨の腸骨櫛間の間隔は、見た眼には男に於けるよりも絶對的により大きいように思はれるけれども、我々の既に知つた如く通常は唯だ相對的により大きい許りで、絶對的にはより小さいのである、然し乍ら骨盤の上部の開きの廣さは女にあつて相對的にも絶對的にも共に、高等な人種に於ても下等な人種に於ても共により大きい。セルギは骨盤の邊の横徑に百を乗じ、腸骨櫛間の距離で割つて作つた腸骨骨盤率を案出するの機會を得た。是れはヴェルノーの材料に基づいて、歐羅巴の男に對しては四六・五の率、又女に對しては五〇・八の率を與へて居る。世界の總ての部分からの骨盤を度る事によつて、セルギは腸骨骨盤率が殆ど不易に男に於けるよりも女にあつてより大きく、種族に於ける相違は此の率に於て極めて僅かの變化しか生じないらしいといふ事を發見した(セルギ、『腸骨骨盤率』La Clinica Ostetrica, 第三部、千八百九十九年)。

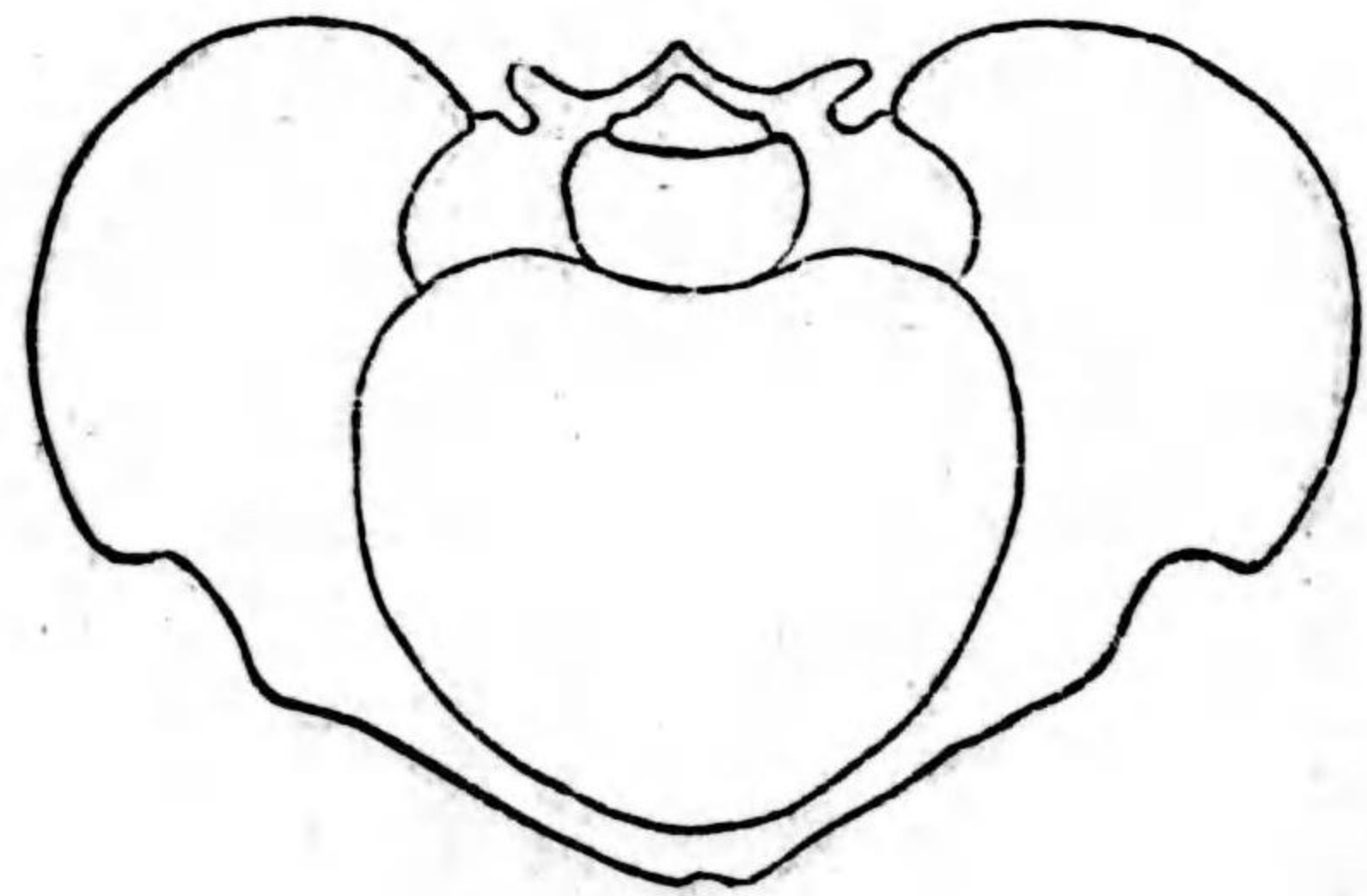
骨盤に於ける性的相違は、フェリングに依ると、骨が硬くなり始めるや否や、即ち第四月で著るしくなるものである(一)。フェリングの結論はオックスフォードのアーサー・トムソン教授に一致してゐたのであつて、後者はさういふ相違が第三月から認め得られる事を發見してゐる。此の問題に關する極め

て詳細に涉つた充分例證された一論文中に彼は恥骨の角度が第四月以降から女性を通じて認め得られる程度により大きいといふ事を示す寫眞圖を與へ、又斯う結論して居る、『胎兒生活中本質的に性的なる特徴は成人せる形體に於けると同様よく定められてゐる、そして成人と胎兒との形の間の成長中起る總ての相違は兩性に等しく及ぼす壓力又は筋牽縮の影響に基づくのであらう、又そつういふ影響は既に主張された如く、如何なる點に於ても男性と比較した時の女性の骨盤の特色ある形狀に責を負はない。』(二)ロミテイは出生時性的相違が分明であり、殊に女性に於ける耻骨下の門のより大なる廣さ、骨盤のより低き高さ、及びより眞直ならぬ腸骨に就ては一層そうである事を發見した(三)。五歳以下の二十五人の少年と二十五人の少女との骨盤を研究したユールゲンスは、少女のそれが殊に横徑に於て著るしくより大きい事を發見した(四)。ル・ダマニイは白人種にあつて前腸骨上棘に於ける中心の前後の厚さは『男性に於けるより女性の初生兒に於て著るしくより大きい事を發見した、此れは骨盤に於ける性的相違に依り又ル・ダマニイによつて出生時の唯一の著るしい性相違と看做されてゐる(五)。性的相違は斯く最も早い年齢に現はれるけれども、小兒の骨盤はその一般的形狀にあつては長く、狭く、又眞直ぐで、斯くして高級な猿類及びカツフィル人、オーストラリア人、及びアンダマン人のような低級な人間種族の骨盤に近似して居る。歐羅巴の小兒にあつても又、リツツマンの示した通り、骨盤の邊の横徑は低級なる種族の一特色なる前後の直徑に酷似して居る、而るに成人せる歐羅巴人にあつては横徑は前後のそれを非常に超え、又女に於て男に於けるよりも甚だしい。殆ど總ての點に於て成人した女の骨盤は成人した男

通常のアンダマン人の女の骨盤(ガルソンより引用す)



通常の歐羅巴婦人の骨盤(ガルソンより引用す)



のそれよりも小兒のそれにより著しい對照をなして居る。總ての下半部は壓縮される代りに開き擴がつて居り、坐骨棘は殊に廣く離れてゐる。若しトビナールが『骨盤率』を確めるため大仕掛にしたように、我々が骨盤の廣さをその長さと比較するならば、下等動物から歐羅巴人に至る迄の脊椎の進化と共に骨盤がその長さに對して絶えずより廣くなりつゝあつたといふ事や、女にあつては骨盤は男に於けるよりもその長さに對して常により廣いといふ事を發見するのである。トビナールは斯う結論した『我々が人間の族等を昇るに連れて、骨盤は大きく、従つて此の上もなく美しい骨盤は廣大な骨盤である希臘人は彼等の彫刻に於ける骨盤を狭める事によつて、唯だに女から彼女の最も値ある特色を奪ひ取つた許りでなく、又彼女を動物的にした』(六)。その薦骨の廣さによつても又女は男よりも高い程度の進化を示して居る。猿類及び低級な人間種族に於ける薦骨は骨盤のその他のものと一致して長く、眞直ぐで、狭い、薦骨の廣さの度合を表す薦骨率は歐羅巴婦人に於て頂點に達するホツテントット人から歐羅巴人に至る迄の漸進的昇高を示して居る(七)。

- (一)『胎兒及び初生兒に於ける骨盤の形』、Archiv. F. Gynäk. 第十卷、千八百九十九年。
- (二)アーサー・トムソン、『胎兒の骨盤の性的相違』、解剖學及び生理學雜誌、千八百九十九年四月。
- (三)シー・ロミテイ、Atti dell. Soc. Torcan di Sci. Nat. 第八卷、千八百九十二年。
- (四)『人間の骨盤の常態及び病理的解剖學に關する寄稿』、Hurtolf. Vichow. Festsch. 18. 千八百九十一年。

(五)ペー・ル・ダマニ『初生兒に於ける形體の或る均合』、Tour. de l'Anat. et de la Phys. 千九百十年。  
(六)トビナール著、一般人類學、千四十九頁—千五十頁。此處に記された諸點の或るものはテー・エフ・リツグスによる『白人及び黒人の骨盤の比較研究』(ジョン・ホプキン病院報告、第十二卷、千九百四年)中に例證され又更に一層進められてゐる、彼は又兩種族に於ける小兒の大きさ(白人種に於て一—二センチメートルより大きく又二百グラムより重い)及び勞働の性質を考へて居る。ピナールとではないが、ウイルクと一致して、リツグスは幼兒の大きさが母の骨盤の通例である時狹縮である時よりも平均大きいといふ事を見出して居る。

(七)女性の骨盤の漸次的進歩と男性的タイプのからのその分離とはガルソンの典型的なアニダマン人及び歐羅巴人の骨盤の注意深く作られた圖解によつてよく示されてゐる。(前掲の説明圖を見よ。)其等は十三人のアンダマン人及び十四人の歐羅巴人の女の骨盤の平均寸法から作られてゐる。

骨盤の大きさの外的指示は、ストラッツが指摘した如く、薦骨の表面にある菱形した場所に於て恐らく見出されよう。此の場所は測面は後腸骨上棘に當る二つの小窪によつて、上部は通常最後の腰部脊椎骨の棘状突起に位置したもう一つの小窪によつて、又下部は臀部裂溝が始る點によつて作られてゐる。男にあつては側部小窪は、若し少しでも見出されても、相互に幾センチメートルがより近いのである。

此の部を充分に研究したストラッツは、此等の薦骨小窪が重要な點では殆ど乳房に劣らぬ第二次性的特徴であると考へてゐる。然し此れは殆ど容認する事が出来ない、尤も又一方ブルーク及びワルディ



エルが是等の少しでも性的區別であるといふ事を否定してゐるのは餘り遙かに進み過ぎてゐたけれども、總ての若々しい育ちのよい女にあつては此等の小窪は大きく深く、又圍まれてゐる場所はよく定められ、水平線に對し傾斜して居る。様々の昔の著者は此等の小窪に特殊な賞讃を以て關説し、女性美の一特色となし、顔の鑿にそれ等を比較して居る。男にあつては是等は遙かに著るしくない。そしてストラツツに依れば僅か十八パーセントから二十五パーセント迄の場合に起るのみである（シー・エーチ・ストラツツ、Archiv. E. Anth. 二十七卷、千九百年、百二十二頁。ジー・フリツチエ、M. H. E. 千八百九十八年、第二號、百四十二頁。プロツス著、「女」千九百一年、百八十一頁——百八十八頁。是等には多數の例證が示されて居る）。

我々は若し骨盤を脊梁に對して、又一層殊に全く直立的な位置の採用に影響し又は變形する様々の力に對して考へるならばその骨盤の廻りに群つてゐる諸問題への幾分より深い洞察を得る事が出來よう。直立はドロイネイが指摘した通り（一）、進化と營養とに正比例してゐる。而るに水平をなす事は反比例してゐる。猿類は四足動物に對する傾向を持つた不完全な兩足動物に過ぎない、人間の小兒は猿と同様不完全な兩足動物である、野蠻人種は文明人種程真直ぐに立たない。田舎者は（ドロイネイに依ると農事的勞働を離れてさへ）前方に屈む傾きがあり、貴族は平民よりも真直ぐである。此の點では女は男よりも小兒状態に近いように思はれる。ドロイネイは斯う云つた「女は男よりも前方に曲つてゐるといふ事がセイロンの土人間に認められた。我々の歐羅巴社會に於て女が一般に全く真直ぐに身を保つては

ゐず、又體や頭を前方に屈めて歩くといふ事を見るのは容易である。」

（二）此の問題に關する彼の興味、深い觀察、比較生物學研究、第一部、千八百七十八年、四十七頁——五十二頁を見よ、又直立的位置への人間の上昇と彼の體が受けたその結果の變形とに關する亞米利加科學發達期成會の人類學部に對するフランク・ペーカー博士の著名な總裁演説（千八百九十年）を見よ。ペー・ル・ダマニー教授も又「直立的位置に對する人間の順應」(Jour. de l'ant. et de l. Phys. 千九百五年、第二號)てふ興味深い論文に於て、人間に於ける直立的位置の困難に打勝たんとする努力の結果として脊柱、骨盤及び股骨に起つた様々の變化を論じて居る。

マウヅリエは同時に眞に直立的な位置は股骨、脛骨、及び距骨の相互に對する極めて相異つた關係報償的影響として働く脊柱に於ける相異つた程度の彎曲を以つてさへ持續する事が出來よう」と指摘して居る。例へば直立は脚に於ける腿の完全な伸張なくして完成出來るのであり、そしてさういふ直立は減少した筋の努力を以て到達せられるといふ便を持つて居る。さり乍ら直立のさういふ調節の便には限りがある、そして直立の調節失當の相反した又等しく不満足な極致は文明婦人間に普通であるようである。デイツケンソンとトラスロウとは、多數の亞米利加婦人の検査から「女に於ける姿勢と軀幹發達」(亞米利加醫學雜誌、千九百十二年十月十四日)通常の文明婦人が傾き曲る、即ち彼女の乳房は牽き下げ、臀部は低く曳きづり、腹部は突き出さすといふ事を見出してゐる。彼等は二つの相反した型の缺點を包含してゐる、即ち（一）カンガル型、それにあつては軀幹上半部が重力の線の前に、軀幹の下半部がそ

の後ろに行つて居る、(二)ゴリラ型、それにあつては此の逆が事實である。而して兩姿勢共苦痛と緊張とに導くものである。

斯くて人間女性の態度は如何なる注意深い観察者にも(妊娠中を除き)魅力に充ちて居る彎曲の特長と前方への卷鬚に似た働きとを持ち、又男怪のより高慢なそして硬い、殆ど凸状な態度と對照をなして居る。頭は前方へ落ちる傾きがあり、そして此の傾向が訓練に基づくのではないといふ事は、クレランドによつて指摘された如く、それが解剖學的基礎を持つて居るといふ事實によつて示されるように思はれる小兒時代以降頭蓋はその重みを益々後ろに投げ遣るために愈々後方へ徐々として傾いて行く。クレランドは斯う云つて居る、『女性の頭蓋は男性よりもすつと後ろに傾いてゐない、そして此の點では、様々の外の點に於けると同じく、男性の頭蓋よりも小兒に似てゐる』(一)。頭は女にあつてより多く後ろに傾いて居るけれども、骨盤はより多く後ろに傾いて居る。此れは小兒の特長の部分的阻止に基づくのである。立つて居る時水平線と骨盤の上面とによつて作られた角度は小兒にあつて約七十度——八十度、男にあつて五十度——五十五度、女にあつて五十五度——六十度である。(パピローの測定法はより廣い角度を示して居るが、然し相似て大きい性的相違がある。)此の傾斜は——腿の間の女子陰阜を消し、又往々藝術家によつて用ゐられた腹部の曲線を與へる傾きがある——骨盤の内容をより善く支持するものである。動物にあつてはそこに又性的相違がある、例へば牡馬にあつてはその角度は百十度であり、牝馬にあつては百二十度であると云はれて居る。女に於ける其の角度が極めて少ししか傾いてゐない時(二)

十四度から四十五度迄)そこに子宮脱垂の傾向があるといふ事を想像するには或る理由があるのである。種族的相違は可也大きい、例へばその骨盤が多くの點で著るしいメキシコの女にあつては、平均傾度が六十一度から六十五度迄である(二)。

(一)クレランド、『人間頭蓋の不同』、*Physical Trans of Roy Soc.*, 1870.

(二)サツベイ。又エーチ・メイエル、『骨盤傾斜』*Archiv f. Anat.*, etc. 千八百六十一年、百三十七頁、フエルセンライツヒ、『骨盤傾斜』*Wien. Med. Wochenschrift*, 千八百九十三年、ド・イタ、『メキシコ人の骨盤』*Atti dell. Congresso Medico (羅馬、千八百九十四年)*、第五卷、百三十七頁、パピロー、『巴里に於ける通常人』*Bull. Soc. Sanit.*, 千九百二年。

此れと一致して肛門は女にあつて男に於けるよりも寧ろより遠く後ろであり尾骨により近いようである。猿にあつては(そして又或る程度迄小兒にあつては)尾骨の端と肛門との間に長い間隔がある。或る亞弗利加人種に於ては、(ドローレイに依ると)ムーア人の間にあつてさへ、膣は屢々非常に後方に向つてゐて、四足獸的性交法を必要ならしめる程である。昔の人類學者は女性に於ける尿流の方向によつて骨盤の傾斜を判断するのが常であつた。後方に向かつた流れは、下等人種にあつてさへ、稀れに見出される動物に似た特徴である、その流の前方への方向は特に人間的な直立的位置が高い程度の得達に到り及んだのだといふ事を指示する。

解剖學解釋が往々排尿中の女の原始的態度に對して(即ち日本婦人の場合に於てウエルニツヒによ

る如く與へられた。此の態度は言ふ必要があらうと思ふが、兩性にとつて文明人の反對である。即ち男はしやがみ、女は立つ。此れは(ヒロドタスに依ると)古代埃及に於てさへその慣習であつた、それは又(ギラルダス・キャンブレンスに依ると)古代愛蘭に於ける慣習でもあつた。それは今日、又は最近迄、オーストラリアの大部分に於いて(此處の *Mikro-pentia*——尿道切開——は坐る姿勢を男にとつてより便利ならしめるものであるが、然し此の手術が常に一般的であつたと假定する事は冒險であるだらう)、ニュー・ジラランドに於て、北亞米利加を通じて——アパツチ人の間に於て、コロラドに於て、ニカラガに於て——又アングラ及び亞弗利加の或る其他の部分に於て習慣であつた。(或る證驗は千八百九十一年に書かれた、ジェー・ジー・ボーアク大佐の「全民族のスカタロジの儀式」百四十八頁——百五十三頁中に示されて居る。)踵で坐る事は男性にとつてモハメット正教の習慣である。

解剖學的思考が何か著しい程度迄此處に入つてゐると想ふべき理由は少しもない、それは一部分心理學である。一部分儀式的事柄であり、一部分衣服の問題である。日本婦人の場合にあつては、ダヴルユー・アンダーソン教授が私に書き送つた如く、何を解剖學的特質を想ふべき合理的な根據は少しも存してゐないのである、そして彼は女のびつたりした女袴がそれを揚げるのを面倒にさせると指摘してゐる。トレジャー氏はマオリ人に關する重なる權威者の一人であり、又ポリネシア協會の秘書であるが私に現今マオリ人の間の兩性にとつては蹲むのが常にお規りであるが、昔時は女が立つたといふ事を書いて寄越した、そして彼は大抵の原始的民族の帯又はマツトが露出せず立つたる位置で放尿する事を(器

官の位置に於ける性的相違を心に置けば)女には容易ならしめ、男には困難ならしめるといふ重要な觀察をなして居る。

最も非文明的な種族間にあつては性的器官の露出を避ける事は宗教的儀式の問題である、マオリ人及び其他の種族間の男が彼等の蹲む慣習を説明するため提出する衛生の考へは單に後智慧に過ぎない、最初の考へは儀式的性質のものである。同じ考へは男が(彼等の衣服の發達のために、又は何んな理由のためでも)蹲む位置を放擲した時も尙ほ勢ひを占めてゐた、例へばヘジオットは人々に彼等の前に立ちふさがつてゐる物の前に放尿するよう勧めて居る、そうすれば如何なる神も彼等の裸體によつて怒らせられないであらう。(Work and Days, 1.729 et seq. 及びピタゴラスの *Laertes* VIII. i. 19) 此の習慣は現今迄文明人中に滲み込むようになつた、が尤も彼等は何うして神々が此の事柄を見るかを考へる事は久しい前に止めた。

奇妙な事には男が此の習慣を發達させ始めた時殆ど總ゆる女は男によつて捨てられた習慣を採用したようである。恐らくそれは何處でも男をして女の方法態度を探るのを嫌がらせ、女をして男のそれを探るのを嫌がらせる男女の一般的相反に養はれたのであらう、何故ならば女の衣服の發達が原始的習慣に多くの障害を與へたのは比較的近代の内の事であるに過ぎないからである。如何なる場合にあつても今日の習慣が兩性にとつて同じである國は極めて少數に過ぎない、そして此等の國々は過渡状態にあるようである。大抵の國では此の事に於ける兩性の習慣は反對して居る、そして一般的法則としても又より

文明なる國々の習慣は原始的慣習の逆である。さり乍ら、兩性を接近させんとする近代文明の一般的傾向は此の問題にあつても又明かである。一人の醫師の妻は、殊に共同便所に關して、『我々は皆立つ』と書いて居る(大不列顛醫學新報、千九百十年一月二十九日、二百九十四頁)。

骨盤の傾斜は鞍狀即ち腰椎薦骨の曲線(その大廓のなる病理的形では脊椎前骨を呼ばれる)と一致しないけれども、關係して居る。此れは猿にあつては唯だ僅かに著るしく、人間の胎兒にあつては存在しない。それは亞弗利加人種の優れたる性質の一であり、眞直ぐになつて漕いだり臀に子供を乗せて歩いたりする時に於けるような、背部の筋肉運動によつて増加されるらしい。それはデュシエーヌが初めて示した如く(一)、男に於けるよりも女に於て著るしい、そして特に西班牙及びクレオルの女にあつて目立ち彼等の風采の美に對する重なる解的學的基礎を成して居る(二)。

(一)運動の生理、千八百六十七年、七百二十六頁——七百三十四頁。

(二)論文、『鞍狀形』 *Dieu, ce oi. Anth.*。

カンニンハムの腰椎椎率は彎曲の傾向を示して居る、高い率は——不易にはないけれども——低い曲線を指示し、低い率は高い程度の彎曲を指示する。黒猩猩にあつては此の率は百十七、オーストラリア人にあつては百〇八、男性のアンダマン人にあつては百〇六女性のアンダマン人にあつては百〇五、ネグロにあつては百〇五、歐羅巴人にあつては九十六、(二十一人)愛蘭の男性にあつては九十六、(二十二)人の愛蘭の女性にあては九十三、五である。(百以下の率は腰椎椎の前部の量度が後部のそれを

超えて居る事を意味する)であるから彎曲は大體 於て我々が等級を昇るに連れて増加し、又女に於てより大きい傾きがある。中程の腰率を持つてゐる北亞米利加の印度人間で、ドアセイは性的相違が著るしく又打絶えの事を發見した(一)。ルシュユカ、バランダン、シアルビイ、ラヴネル等は皆腰彎が女に於て最も著るしいと考へて居る。シアルビイはその彎曲の度合が薦骨の傾斜に比例して居るといふ事を指摘して居る、そして此れはバビローによつて確證されたが、彼れバビローは此の薦骨傾斜と關係ある臀部の突出が機能効用の一指針であると指摘して居る。薦骨傾斜は鋭角な薦骨椎骨角度にか又は明白な腰彎にか孰れかに基づくので、バビローはそこに二つの相異つた型があり、それは恐らく種族的意義を有するであらうと云つて居る(二)。

(一)ジー・エイ・ドアセイ、『或る亞米利加種族に於ける腰彎』、*Bull. Errex Jurt.*、二十七卷、千八百九十五年、マサチニューセツトサレム。

(二)因みにペー・ル・ダマニーの『薦骨骨盤の角度』(*Journ. de Il Antret de ca Phys.*、千九百六年及び千九百九年)てふ研究に關説すべきであらう。此の薦骨々盤の角度(骨盤輪を持つた薦骨の前面によつてその體の中央平面に作られた)は下等人種に於けるよりも高等人種に於て、又男に於けるよりも女に於てより大きいのである。彼は女のより大きな腰彎が實際よりも寧ろ外見薦であり、より著るしい薦骨椎骨角度に基づいてゐるといふ見解を容認して居る。同時にル・ダマニーは薦骨々盤角度を變更する點では職業が性よりも多く影響を及ぼすといふ事を發見した。その角度の増加は薦骨の昇進に基

づき、こしを彼は腰筋の活動によつて影響されたなのと看做して居る。それは劇しい労働及び重い物體の運搬に於て起る。女が劇しく働けば働く程薦骨々盤角度は愈々大きくなる、そして文明にあつては男は女よりも劇しく働くので、薦骨々盤角度には女に於けるよりも男に於てより大きい傾向がある。ル・ダマニーは妊娠が薦骨を揚げ腰彎を増すといふシアルペイには同意する事が出来ない。

此のより大なる彎曲と關聯して我々は、若し男の骨脊柱を女のそれと較べるならば、重なる相違が女に於ける腰部の相對的により大きな長さであるといふ事を見出す。女にあつては又その曲線がより高く始まり、より高い點でその頂上に達するらしい。此れは腹部のより大きな相對的大さと關聯してその母的機能に女を適合さす一特長である。女にあつては腰部は全脊柱の三十・二八パーセントを成すけれども、男にあつてはそれは僅か三十一・七パーセントを成すに過ぎない(一)。そして一方では脊柱の脊部は女に於ける四十五八に對し男にあつては四十六・五である。脊柱の腰部は斯くして唯だに男に於けるより女にあつてより長い許りでなく、それは相異なる程度に形作られ、より多く弓状をなし、そして脊椎骨は此の弓形により判然と順應して形作られてゐる。カンニンハムは斯う信じてゐる、『總て此等の區別は兩性によつて求められた相異なる習慣によつて説明出來よう。脊骨が遂行しなければならぬ機能によつてより容易に形作られる脊柱の部分は何にもない、何故ならば最も大なる程度の上に在る壓力の下に働くのは脊柱のかの部分であるからである。』

(一)此等はデー・ジェー・カンニンハム教授によつて與へられた卒である、彼は王立愛蘭學會の「カン

ニリンハム研究報告」(二號、千八百八十六年)に於て、又「脊柱の腰部」解剖學及び生理學雜誌、千八百八十八年十月)に於て脊柱の關係を極めて綿密に研究した。ジー・エイ・ドアセイは亞米利加印度人に於ける腰率を研究したが(Bull. Essex Inst., Salem, Mass., Vol. 27)、それが重要な性的區分であり、並びに又人種的優越の試験標準である事を發見した。

スウラリユーは各々の脊椎骨の前面を別々に測定する方法によつて、腰部脊骨の同じ相對的により大なる長さを發見し、それは又、より低い脊部脊骨にも適用する事を確めた。その相違は歐羅巴人、蒙古人、亞米利加印度人、及び黑人に於て殆ど等しく大であつた。スウラリユーは薦骨が男にあつては極めて僅かしかより大きくなく、又より多く曲つてゐる事を發見した。然し乍ら蒙古人及び亞米利加印度人の女にあつてはそれは女に於て相對的により大きかつた。(スウラリユー、「男及び女に於ける脊柱の割合の研究」, Bull. et Mem. Soc. d'An. H. 巴里、千九百年)パピローは女に於ける腰部脊椎骨の相對的により大きい大きさを容認すると同時に、それは脊髓骨間軟骨のより小なる發達によつて補償される事を發見して居る。

ローゼンベルヒ(Morphologisches Jahrbuch, 1876)は脊柱の發達に關する彼の研究からそれが人間に於て短縮しつゝあるといふ結論に達した。彼の考へる所に據ると、祖先の形は薦骨の前に二十五の可動的脊髓骨を持つた、今やそこには二十四あり、將來には二十三に過ぎないであらう。此れに關聯して彼は斯う指摘して居る。即ち胎兒の第一腰部脊髓骨の横突起には後にその横突起と合して消失する一つの助

骨の軟骨的痕跡が発見せられるが、それは祖先の型が今や手長猿に於て最も屢々見出される一状態で、十三の肋骨と二十五の可動的脊椎骨とを持つてゐたといふ事を暗示して居ると。此の祖先型は往々現今人間に於ても見出される。アンブローズ・パーミンハム教授はローゼンベルヒの見解を辯護して居る(解剖學及び生理學雜誌、千八百九十一年七月)。ウイデルシアムも又ローゼンベルヒの見解に賛してゐるらしく(人間の構造、千八百八十七年)、最も減少された数の脊椎骨を持つた脊柱は常に女に生ずる、であるから女は此の點で進化的移動を指導してゐるのであらうと言つて居るが、それは女に於ける骨盤のより高い形態學的發達と一致してゐる假想である。さり乍らローゼンベルヒの見解は一般的に容認されてはゐない、例へばバターソン教授(人間の薦骨)、王立協會々報、千八百九十二年)は薦骨以上の部分には短縮よりもより屢々伸長があるといふ根據に基づいて、それを容認しない、然し王立協會によつて公けにされた摘要中に收められたような、彼の諸事實と論議とは、ローゼンベルヒの見解に對する彼の反對を明瞭に辯護してゐない、そして彼は融合の作用が脊柱の尾端に續行されてゐるといふ事を承認して居る。

此問題は其後デー・ジェー・カンニンハム教授によつて論ぜられた、彼はバターソンの見解を排し、ローゼンベルヒのそれに傾いて居る(解剖學的變化の意義)大不列顛醫學新報、千八百九十八年十一月十日)。彼は極めて不安定な均衡の位置にある脊椎骨の腰薦骨部は溯及的並びに先見的變化を共に顯はす事が出来ると信じ、又統計のみではその移動方向を示すに充分でない、先見的又は豫言的變化は先づ第一

に通例の隔世遺傳的傾向の強い反流に對して進む事が殆んど出来ない、であるからそれが統計表上の高い位置に進み得る迄には長い期間が経過しなければならぬ(バターソンに反對して)指摘して居る。若し我々が人間及び類人猿は少く共二十六の薦骨の前部にある脊椎骨を持つた手長猿に似た祖先から移り込んだものであるといふ事を想像しても(とカンニンハムは論じて居る)、我々は人間が二十五、ゴリラ及び黒猩猩が二十四、及び猩猩が二十三を持つてゐる事を發見する。して見れば猩猩は此の方面では最も遠く進み、又その目的地に達したものである、といふのはそれは比較的僅かな變化を示してゐるからである。人間及び手長猿は同じ道徑に沿ふて可也の進歩をなしたけれども、尙ほ後方にあつて愚圖々々して居るのである。カンニンハムは、議論としては何等解剖的價値を持つてゐないけれども、斯ういふ事を附言して居る、即ち人間の美的趣味は短かい脚を持つて長い胸を甚だしく否難して居ると。

若し女の體が男よりも四足獸的姿勢を幾分多く思ひ出さしめるようであるにしても、彼女はそれに對する優れた理由を持つて居るのである。ペーカー博士の示す如く、兩性に於て總ての種類の病理的を不健全な現象が直立的姿勢の採取によつて助成されたり又は惹起されたりした事は殆ど疑ふ事が出来ない。脱腸、結石、腸の蠕形突起の疾病、靜脈囊腫、大動脈の傷害に對する曝露、膽囊の無感覺、肺の上のより大なる收縮及び従つて延引せる又急速なる筋作用を保持する事の不能、上行大靜脈幹によつて血液を昇進さす事の困難から起る肝臓の疾病、及び人事不省の傾向等を挙げれば充分である。女は此等の不能を男と共にしてゐるが、然し此の上に彼等は外の特種な不便を受けるのである。直立的位置は陰囊靜脈

踵及び傷害に對する多くの曝露の傾向を生ずる以外には、男の性的器官に比較的輕微な影響しか及ぼさないが、女の性的器官には極めて重大の影響を及ぼす傾きがあり、又母的機能に非常に干渉するものでありベーカー博士の言ふ如く、『四足獸にあつては分娩作用は比較的容易であり、骨盤は少しも重大な妨礙を與へない。女性の骨盤の形は其れ故に二つの形——一つは支持のため、他は分娩に於ける容易のため——の間の折衷の結果である。我々が直立的姿勢の得達に沿ふて幼兒の頭の大さが漸次増大し、斯くて分娩に對する又さもなくなれば生じたかも知れない順應に對する尙ほもう一つの障壁を作つたといふ事を回想する時、その骨折が如何に重大であつたかを悟る事が出来、最早小兒出生に於ける死が高等人種にあつてすつともつと普通である事や、女が彼女の全組織に於て向上的努力上男よりも多く苦んだといふ事の徴しを示してゐるといふ事を疑はない。如何なる外の動物にあつても男性の骨盤と女性のそれとの間のさういふ區別——我々が等級を昇るに従つて増加する區別——が示されてゐない。……四足獸にあつては殆ど知られてゐない子宮轉位の頻繁な事が又注意された、そしてその病める器官を治療し恢復させるために最も有効な姿勢は本質上明かに四足獸的な所謂「膝、肘をついた體勢」である(一)』。

(一)女の疾病の治療に於ける此の姿勢の便益はバツファロのポツター博士によつて概括されたが、彼はマリオン・シムスによるその發見が『婦人病學の歴史に於ける分岐點』であつたと考へて居る。(『産科及び婦人科に於ける體勢』、亞米利加産科及び婦人科學會々報、第五卷、千八百九十三年、九十九頁—二百二頁)アーバスノット・レーン卿『腹部内臓に關係せる文明』ランセット、千九百九年十一月

十三日)も又殊に女に對する直立的姿勢の弊害を力説して居る。彼は此等の弊害が或る程度迄、癩れた英吉利型でないが、佛蘭西の眞直なバスクの型の、下腹部を支持し上腹部を自由のまゝにして置く善いコルセットによつて補償されるかも知れないと考へて居る。

我々は實に眞立的兩足的姿勢の採用が——手近な目的論的表現法を用ひれば——自然を困つたデレンマに置いたと云つてもよからう。一方では、身體の安定及び諸器官の適當な支持のためには骨盤が強靱でなければならぬといふ事や、骨帯が強く硬くなければならぬといふ事や、又内溝が小さくなければならぬといふ事が必要である。又他方では、種族のより高い進化のために、骨帯にとつて大きい頭の小兒の出生を許すような出口の増加された大さによつて幾分より堅固でなくさせられる事が必要である。此等の正しく相反してゐる必要が相互に衝突せぬように妨げるためには最も微妙な調整を要するのである(二)。若し我々が臍から生れたならば(我々の或者が小兒の頃想像したように)、此のデレンマは存しないであらう、然しさういふ分娩方法は兩足的姿勢に全く調和してゐるだらうけれども、四足的姿勢にあつては實行出来ぬものであつたらう。大體に於て、我々の知る如く、調整は絶對的に完全といふわけには行かず、我々は兩足的姿勢の不便に苦しむけれども、種族のより高い進化の要求は骨盤の増加せる擴大と發達、女が自然的指導者である一運動を惹き起したし、又疑ひもなく惹き起し續けるであらう。然し小兒は彼等が此の世に出る門にとつて常に幾分發達して過ぎてゐる傾きがある、此の巧妙に工夫された骨帯は中等に組する力であつて、非常に發達したものを生命の機會から遮斷する、が尤もこれは段々

弱くなる傾向のある力である。何故ならば頭の大きさは両親に依り、又小さい骨盤を持った女は死産兒は存生しそらもない弱い兒を生む傾きがあり、而も彼等の小さい骨盤を遺傳する事は彼等にとつて容易でないからである。種族のより高い進化状態では頭の増進せる發達は常に骨盤の増進せる發達によつて伴はれるに違ひない。

(一)此の調整の困難な事は屢々起る恥骨癒著の先天的離開の場合によつて示されてゐる。そういう場合には増進せる骨盤弾力性があり、骨盤輪は耻骨に於て廣く開く傾きがある。その結果は(千八百九十九年八月、*Centralbe, f. Gynäk.* 紙上にシヤウタによつて記された場合に於ける如く)分娩が容易く早く、殆ど無痛であり、又結果がないといふ事である。然し又一方には妊娠中添加的注意と人爲的的支持とが必要である。或る動物にあつては此の骨盤輪の弛緩は妊娠中通例である。例へばスターリングによつて(大不列顛醫學新報、千九百二年十一月十三日)、大きい頭を持った相對的に發育十分な状態で生れる豚鼠にあつては、骨盤の骨が妊娠中異常に可能的になり、靱帯は弛緩し、癒著部には間隙が出来るといふ事が發見された。

通常輕視された此の問題と關係を持つてゐる點に關し此處に一言述べても多分宜いであらう。多くの筆者は——私は殊にストラウツス(古今の信仰)及びルナン(*Le Canticque des Cantiques* の翻譯の序言)の事を思ふ——センジュアリティ(それによつて彼等は性的情緒を意味する)が殆ど消失して了つて、純粹な合理性に場所を譲るような人間の未來の事を熱烈な言葉で云つた。然し總てそういう假想には何んな

る根據もないのである。我々は下等人種間の(性的慣習から區別されたような)性的情緒に付いて非常に多くは知らない、が然し彼等の性的行爲が屢々極めて自由であるのに、彼等の性的本能は極めて強くはないといふ事を示す重大な證據があるのである。(ハヴロツク・エリス著、性の心理に於ける研究、第三卷、補遺を見よ、その中には此の點に關する報告が集められて居る。)高等人種(即ちより大きい骨盤を持つたる者は殆ど常に最も強い性的衝動を持つといふことが恐らく見出されるであらう。文明が進むに連れて異常はより普通になり、性的衝動が弱いか又は存在しないかさへする個々人が増加する。然し此等の者は、假令健全な又は非常に知的な個々人があつても、種族を繁殖させるに役立つ個々人ではない。最もよく種族を繁殖させるに適した人々は大きい骨盤を持つた者であり、骨盤は性的情緒の大中心の座であるからして骨盤とその神經及び筋分布との發達は性的情緒のより大なる強まりを包含するのである。同時に腦中樞のより大なる活動は其等腦中樞をしてその益々活動的な性的情緒を其等自身の目的に従屬させ利用する事を得せしめる、従つて生殖作用は阻止され、又平衡は或る程度迄取戻されるのである。



## 第五章

### 頭

頭蓋——小兒に於ける頭蓋——頭蓋に於ける性的相違の重なる原因——早き頃の諸意見——頭蓋に於ける三つの重なる性的相違——より小なる相違——頭の率——顔——顔面發達に於ける性的相違——眼——顔面角度——下顎——齒——頭蓋容積——頭蓋の前額部、顛頂部、及び後頭部に於ける性的相違——男の頭蓋は老人型に近似し、女の頭蓋は小兒型に近似す。

腦——腦重量に於ける相違——發狂者間に於ける腦——腦重量の標準——高さと重さ——諸々の迷誤——女の腦は男の腦よりも比例してより大なり——大なる腦の利益と不利——腦の進化に於ける性的相違——腦の前額部、顛頂部及び後頭部に於ける性的相違——頭の血液分布——腦に於ける性的相違の研究の確然たる結果は現在では小なり

骨盤の研究はそれと非常に親密な關係を持つてゐる頭の研究に自づから我々を導くのである。頭を研究する時我々先づ第一に頭蓋を考へる。これは或る程度迄それが形作り、又具さにはないけれども非

常な程度に迄それ自身が形作られる腦の比較的自動力のない外被であるに過ぎないのでそれ自身にあつては重要なものである。此の底蓋を考へると同時に我々は顔の興味深い但未が大いに發達されてはゐない研究を瞥見しよう。それから腦に向はう。これは恐らくその有機體に於て進む總ゆる作用に多少共關係ある重なる神經中樞の聚合所であるので疑ひもなく第一に重要な器官であるが、不幸にも容易く研究に役立たない一器官である。

### 頭蓋

若し我々が小兒の頭蓋を取上げるならば、それが極めて軽く又極めて滑かであり、血管によつて繊細に蔽はれた薄い、半透明な壁を持つてゐる事を見出す眼窩は大きく見え、下顎は小さく淺く、その角は極めて廣い、顔は總てを纏めて考へれば相對的に小さい。顛頂部の骨は非常に大きく、頭蓋の根のより大なる部分、及び壁の大部分を成して居る、そして各々の顛頂部の骨は雑多の壓縮力の合成物なる著るしい凸出を示してゐるが、それは頭蓋が未だ充分に擴大してゐないといふ印象を與へる。其他の骨は大抵非常に發達してゐない状態にある、そして其等の構成的部分は尙ほ不完全に接合されて居る。骨の突起及び皺縮は——後に強い筋に頭を支持するか又は廻轉するかする足掛りを與へるが、殆ど少しも跡付ける事が出来ない。更に進んで我々は脊髓がよつて以つて脊柱に入るべく現はれる穴が非常に離れて後ろに置かれてあり、従つて頭と身體との間の此の接合點で支へられた時頭は前方に落ちる傾きがあつと

いふ事に気が附く。

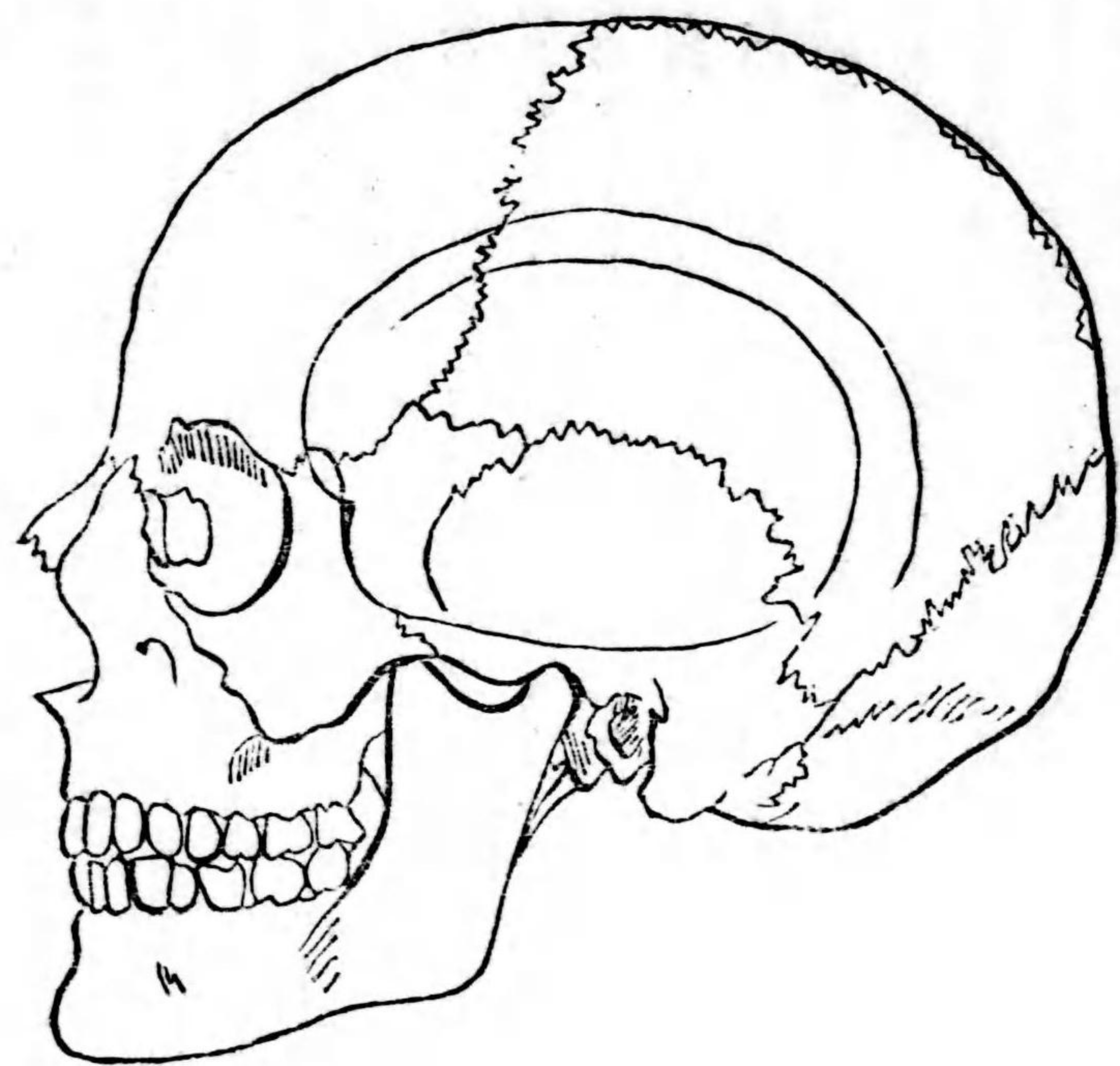
小兒の頭蓋は假令それが成人の大きさに迄擴大されてゐてもそれと認識する事には如何なる困難もないであらう。然し我々が年齢の區別から成人の頭蓋に於ける性的特徴を考へようとする時は又別問題である。極く最近ではないけれども、或る研究者達(エービーの如き)は、頭蓋には大きさを除いて性的相違がないと斷言する迄に進んだ。そして大抵の能力ある頭蓋學者(最も著名なる者の一人、ヴィルンショウの如き)は、非歐羅巴種族間に於て、一種族によつて與へられた鑑別目徴が他の諸種族にも適用しはしない如く、頭蓋から性を定める事は非常に困難であると主張して居る。性も或る野蠻人種間にあつては(ニュー・ブリテンに於ける如く)頭蓋に於ける性的相違が『素晴らしい』事もあるにはある。獨り審査のみによつて素性の知れた頭蓋の性を定めようと試みた時、経験深い人類學者マントガツツアは、自分の誤謬が三パーセントから五パーセントである事を發見した、より若く、より経験の少ない觀察者レベンティツシュは自分の錯誤が九パーセントである事を見出した。

頭蓋は此の見地から言へば骨盤よりも比較ならぬ程重要でない。そして男と女との頭蓋間の相違は唯だ大きさのそれに過ぎないけれども、マヌウヅリエの論ずる如く、見出され得る其様な性的特徴は主として一般肉體的釣合に於ける相違に基づく、即ち其等は重に女より大なる早成と、彼女のより早い成長停止とに依つて居るといふ事は極めて確からしく思はれる。頭蓋に於ける性的相違が多く一般肉體的相違の結果であると云ふ事は其等が意義ないものであると云ふ事でないといふ事を附言する必要は殆どな

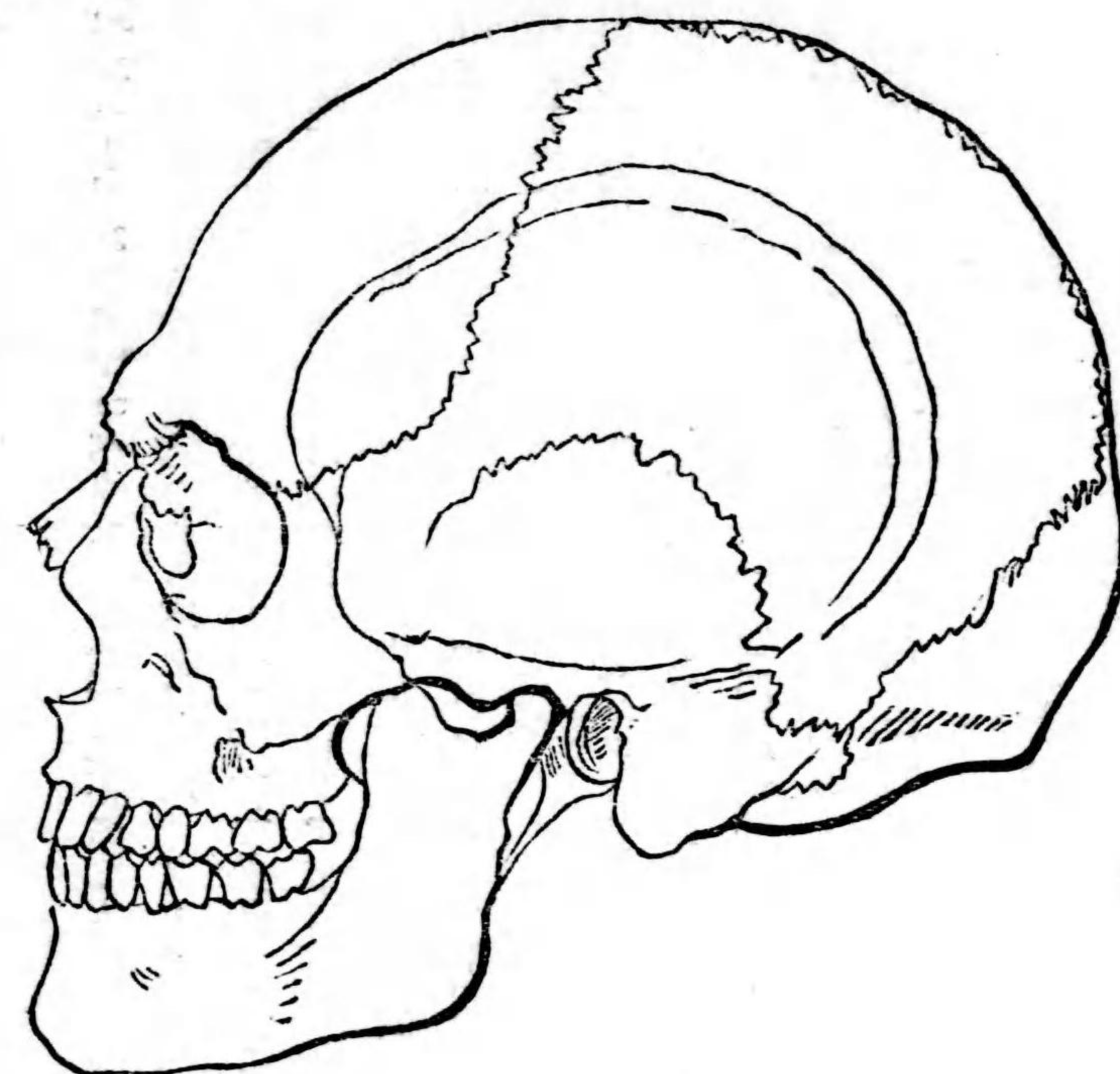
So

ロベンハーゲンのジャコベウスは千七百九九年に *De distingendis Cadaveribus Per Crania* なる一書を著したが、頭蓋に或る性的相違のある事を示した。ソーマリング(*De corporis humani fabrica*, 1791)は頭は女に於て相對的に寧ろより大きいと考へた。彼の弟子アツケルマンは若干の精確な相違を見出したが、それは其後の解剖學者等に信じられた。ピシア(*Antonio descriptive*, 1801)は殆ど性的相違がないと思つた。ガル(腦の機能、千八百二十二年)は前後直徑が女に於てより長く、他の直徑はより短いと述べた。此等の叙述は其時代の最も顯著な權威者の見解として引用する價值のものであるが、然し是等は大きな又精確な材料に基づいてはゐなかつた。バルナール・ダウイス及びテウルナム(*Crania Britannica*, 1856-65)は頭蓋測定表に於いて兩性を常に別々にする必要を認めた最初の人であつたようである。デューロー(『人間頭蓋の性的特徴』 *Revue d'Anthropologie* 千八百七十三年、第二卷、四百七十五頁—四百八十七頁)は其時代迄の此の問題の歴史及び材料の優れた摘要を示して居る。そしてマンテガツツア(*Dei crantieri Sasuali del cranio umano*, *Arch. per l'Anthropologia*, 1892, Vol. II, pp. II et seq)は此の問題の簡單な批評的摘要を與へて居る。二つの就任論文中に重要な研究が具象されて居る、即ちイー・リベントイツシュ(ストラツスベルヒ)の『女の頭蓋』(*Morphologische Arbeiten*, II, 1873)及びバンウル・バルテルス(ベルリン)の『頭蓋に於ける性的區別に就て』(千八百九十七年)並びに又 *Diometrika* の數卷に於て。頭部測定

の歴史のよゝ一般的記事としてはマラーシユ、『頭蓋測定に關する研究の歴史』(*L'Année Psychologique* 第



蓋頭型女的型典  
(エリアボ)



蓋頭型男的型典  
(エリアボ)

五年、千八百九十年、二百四十五——二百九十八頁)を見よ。又方法の論議としては、マヌーヅリエの前掲の畫の五百五十八頁——五百九十一頁を見よ。

パニチはフロレンスに於ける小兒の頭蓋に關する觀察によつて性的相違が六歳の時見る事が出来始めるといふ事や、又大抵の重なる性的相違は十二歳前に全く著るしくなるといふ事を示した(一)。最も不變な性的相違は、包含的に考へて、何であるかに就ては、二入で權威者が全く一致するとは云ふ事が出来ない、といふのは各頭蓋學者が彼自身の擇り好みを持つて居るからである、そして我々は往々頭蓋がその特徴の或るものにあつては男性的であり、他のものにあつては女性的であり得、而も男の頭蓋は性質上女のそれに近附く事も出来、又は(更に屢々、マンテガツツアの經驗に於て)女の頭蓋は男のそれに類似する事も出来るといふ事を記憶して置かなければならない。頭蓋には一つの不變な性的特徴もないが、然し纏めて考へる時は誤りなくその性を指摘する少數の特長があるのである。私は相異なる國々に屬する四人の人類學者——佛蘭西ではブローカ、獨逸ではシアアツフハウゼン、伊太利ではマンテガツツア大不列顛ではターナー——の見解を出来る丈け次に簡單に述べよう(二)。

(I)恐らく男性の人間頭蓋の總ての特徴の内最も顯著な分明なものは頭鞍(即ち鼻の上の骨突出)及び睫毛上の隆起の優起である、即ち男は女にあつては殆ど著るしからず、而も小兒には存在しない張り出てゐる肩を持つて居る、それは發情期に發達し年と共に増進する、そして多くの下等人種に於て、又極端な程度迄人を猿人類に於て廓大されるので、明かに退歩的性質を成して居る。男に於ける此等の骨突

起と關聯して大きな前額氣孔があるが、それは女にあつてはずつと小さいのである(三)。(II)女にあつては小兒に於て突起して居る或る凸出が通常男に於けるよりも著るしい程度迄持續して居る、此等は頭の後ろの外部及び上部にある顛頂骨突出及び眼の上の出額部に半ばある前頭突出である、男にあつては此等は頭蓋の擴大によつて多く抹消されたといふ外見を呈して居る。(III)總て筋突起は男に於てよりよく印し付けられて居る、そして頭蓋の骨は一般により厚く又より強い、例へばイニオン(頭の後ろにある小さい後頭骨突起)は殆ど常に男に於てより大きく、又小兒にあつては極めて小さい耳の下の乳房狀突起もそうである。此等の三點に關しては諸々の解剖學者間に極めて一般的な一致があると確信して言ふ事が出来よう。外にも全く著るしく思はれる然しより明瞭ではない性的區別はあるのである、例へば女にあつては頭の頂がより扁平であり、又眞直ぐな前額とより著るしい角度をなしてゐるらしいが、男にあつては前から後ろの方への曲線がより滑かで平坦である——これはエツケル及びマンテガツツアによつて主張され、又希臘彫刻によつて認められた一區別である、又女の頭蓋は大抵の種族に於て男のそれよりも相對的により淺く、それは頭のより大なる扁平に依つて居る、女にあつては又頭蓋の基底は通常男に於けるよりも小さいけれども、鼻の基底から後頭孔迄の寸法を有する頭蓋の弓形は屢々男に於けると同じ程大きいものである。

(I)アール・パニチ、"Ricerche di omniologia Sessuale," Arch. per l'Antrop., 1892, Fasc. I.

(II)ブローカ著、頭蓋學及び頭蓋測定教授、シヤアツフハウゼン、『最近頭蓋骨學に付して』Correspo-

ndenzblatt Deutsch. Gesell. Anthropol. 千八百八十九年、百六十四頁、マンテガツツア "Del Crant. Sess. del erinio," Arch. per l'antrop., vol. II, p. 14. ダヴルユー・ターナー卿、『人間頭蓋に關する報告』Chalenger Reports, Geology, vol. X.

(三)前頭孔はシエナのヒス・ピアンチ教授によつて研究された。"Iseni frontali e le arcate sopraccigliari," Arch. per l'antrop., 1892, Fasc. 2.

此等の特徴は初めに擧げられた三つの特徴と同じ明確又は不變を持つてゐない。女性の頭蓋の低い事は——ウエルケル、ワイズバツハ、エツケル、クレランド、及びベネディクトによつて容認されて居るが、上蓋の扁平でふ小兒的特徴の女に於ける持續に基づくように思はれる、出生時男性及び女性の頭蓋は平等の高さであるが、然し女性の頭蓋はその成人の形にあつては男性によつて得られた高さの最後の加量を缺いて居る。然し乍ら頭蓋が男に於けるよりも女に於てより低くない種族も多い、即ちオームモルト・キヤヴェルンの石器時代民族(ブロカ)、オーヴェルナツト族(ブロカ)、ニュー・カレドニア人(ブロカ)、ネグロ人(ダヴィスとブロカ)、クラニア・ヘルヴェイカ(フォン・フルデン)、コルシカ人(ブロカ)、古代ローマ人(ダヴィス及びターナム)、愛蘭人(ダヴィス)、アングロサクソン人(ダヴィス及びターナム)は皆そうである。頭蓋の弓形のその基底に對する關係(その弓形の兩端間の直線)はクレランドによつてその興味深い論文、『人間頭蓋の變化』(王位協會哲學會報、千八百七十年)中に様々の種族に對し研究された。嬰兒及び幼兒時代には此の基底は此の弓形に比べて非常に小さい、女にあつては此の

基底は殆ど常に短かく、而も弓形の廣さは或る場合には男性に於けると同じ程大きいのである。諸民族を比較すると、愛蘭人は基底に對する弓形の最も大なる割合を持ち、支那人が此れに次ぐ。女の短い基線はそれ故に小兒的特長であるが、然し又一方には男のより長い基線は野蠻人的特徴である。最も著しい又全く注意すべきである事實は、『クレランドの指摘する如く、『非文明の民族に於て、弓形の長さが極めて不定であるのに、基線の長さは常に大きいといふ事である。』此處に於て、あゝも屢々見出される如く、小兒的狀態は進化の方向を指示するのである。

頭率——極めて多くの研究は殊に種族及び性に關する頭率に就て費された。種族に關しては、此の率の大なる價値は疑はれない(一)、性に關しては、頭蓋學者の確言する所は等しく反對の方向に重きを置いてゐたけれども、その價値は決してそんなに明瞭ではない、此の率は——多年前レットジマスによつて案出されブロカによつて完成されたが、頭蓋の廣さのその長さに對する關係を示すものである、それは最大横直徑に百を乗じ、その結果を最大前後直徑にて除する事によつて確められるが、その測定をなす時には或る用心が必要である。頭率が七十から七十四迄である頭又は頭蓋は(一般に英國で容認された、フランクフォルトの國際的協約に依ると)長頭的と呼ばれ、七十五から七十九迄は中等頭額と呼ばれ、八十から八十四迄は短頭額と呼ばれ七十以下は超長頭的であり、又八十四以上は超短頭的である。であるから、個人が相對的に廣い頭であればある程、彼の頭率は愈々高くなる、そして長い頭の人は低い頭率を持つて居る。或る人類學者(その「人間の諸種族」に於けるデニカーの如き)は此の相違が如何

なる場合にも輕微であるといふ事を悟つて、此の點では重要な性的相違がないといふ結論に満足してゐるけれども、多數の其他の顯著な人類學者——ド・カトル、フアー、ジュ・ウエルケル、プロカ、カローリ——は歐羅巴では女は男よりも多く長頭的である、即ち女の頭は寧ろより長いか又はそんなに廣くないか、する傾きがあると確言して居る。又一方では、他の勝れた人類學者——ワイズバツハ、マンテガツツア、ハミ、トビナール——は女が男よりも短頭的である事を見出して居る。クロツチレイ、クラツフアムはウエークフィールド教育院で約二千人の發狂せる男と殆ど同數の發狂せる女との測定をなした(二)、彼は又すつともつと少數の常態の男女を驗べた、クラツフアムによつて與へられた數から頭率を計算して、私は發狂せる男ではそれが八〇・三であり、發狂せる女では八〇・一、正氣の男性では八一・二、正氣の女性では八〇・五である事を發した、即ち正氣の者は發狂せる者よりも僅かに短頭的であり、又男は女よりも極めて僅かに短頭であるのである。

(一)セルギ (Specie e Varieta Umare, 1900, and Mediterranean Race, 1901) は形態に基づいた動物學的方法によつて頭蓋を研究する事の重要を示した、が然し頭率は、思慮して用ひられた時、尙ほ多くの價値を留めるものである。尙ほ附言しなければならぬ事には、近年に至つて頭率によつて指示されたような頭形の絶對的種族的安定に可也の疑ひが投ぜられた。フイツシュベルグ (「猶太人」、現代科學叢書) は歐羅巴に於ける猶太人の頭率がその中に彼等の住んで居る種族のそれに接近する傾向があるといふ事を示した、そして彼は此れを周圍の民族との或程度の混合に歸して居る。然しボアスは「移住

者の子孫の體形に於ける諸變化」、合衆國移住委員會報告、千九百十一年)、猶太人の移住した短頭的兩親の合衆國に於て生れた子供等は繼續的出生で益々より長い頭になる傾きがあるのに、長頭的シリア人の子供等は益々より廣い頭になる傾向のあるといふ事を發見した。此れは是れ迄考へもしなかつた環境の力を示して居る。

(二)論文、「頭、及びその大さと形」、心理學的醫學辭典。  
若し我々が一般に人間種族間の頭率を考へようとするならば、此の不同は等しく依然として大きいのである。次に示すもの、間では男が女よりも短頭的である——十九世紀前のパルシア人(トビナール)、オーヴェルナツト人(プロカ)、ロゼールのトログロデイト人(プロカ)、ニューギネアのバビュアン人(マンテガツツア)、アドミラルテイ島人(ターナー)、ボローナの伊太利人(カローリ)、フランダース人(ウーゼ)、安南人(モンデイエール)、ポリネシア人(クラヴェル)、レツト人(ウオーバー)、諾威及び露西亞兩方共のラツプ人(マンデガツツア、カールジン、デニケル)、古代ブリトン人(ダヴィス)、バ・ブルトン人(プロカ)、アルサス人(シュワルベ、フイツツネル)、ヒンヅ人(ダヴィス)、古代羅馬人(ダヴィス)、バスク人(プロカ)、英吉利人(ダヴィス)、近代亞細亞希臘人(ネオフィットス)、グリーランド人(ダヴィス)。又一方次の者の間では女がより多く短頭的である——プリスタラのバーバー人(トビナール)、マルヌのネオリテイツク人(プロカ)、サンタ・バルバラのカリフォルニア人(カール)、アングマン人(フロウエル)、ネグロ(プロカ、フツツシユク、及びダヴィス)、タヒテイ人(デニケル及びラロイ)、オース

トラリア人(フロウエル、クラウズ、ダツクワース)、ローヤルテイ諸島のバビュアン人(クラニア・エス  
ニカ)、露西亞モルドウイン人(デニケル)、バルカンのタルタル人(ビツタード)、テイロール人(タツペ  
イネル)、ローマナの伊太利人(ヴィタリ)、北方伊太利人(マンテガツツア及びマルロー)、西班牙人(ア  
ランザデイ)、葡萄牙人(マセドー)、フアロー島人(アルポー)、オマハ人(マヌウヅリエ)、ニュー・カレ  
ドニア人(クラニア・エスニカ)、露西亞人(エルキンド)、アイヌ人(小金井、コベルニツキ、タレンツキー)  
ヴエツダー人(トムソン)、フィン人(レットジラス)、イエメンの猶太人(ワイツセンベルヒ)、サルデイ  
ニア人(デルクール)、瑞西人(ヒス)、愛蘭人(ダヴィス)、佛蘭西人(サツペイ)、丁抹人(ダヴィス)、獨  
乙人(クラウズ、ダツフネル)、ガンチ人(プロカ)、支那人(ダヴィス)、チエツク人(極めて僅かに、マ  
テイエカ)(一)。然し乍ら此等の様々なそして必ずしも信頼出来ない材料から、我々が第一の表は極め  
て大きな割合の白人種を包含するけれども、第二の表は極めて大きな割合の黒人種を包含するといふ事  
に氣附くといふ事を除いては、何等確然たる結論を引出す事が出来ないといふ事は明瞭である。野蠻人  
及び黒人種間に一般に長頭が勢力を占めて居る、歐羅巴の歴史前の種族間では、今日の歐羅巴種族に於  
けるよりも大なる程度迄長頭が優勢であつた、而も短頭の優越は尙ほ増加しつつあるのである(三)。長  
頭の種族のより高い時代は(ヴィルショウの言ふ如く)その偉大なる時代を我々が認めなければならぬ  
長頭的種族の長い大陸の兩端に於ける存在によつて暗示されて居る(三)、短頭の人々の腦は長頭の人々  
のそれよりもより大きな傾きがある(四)、一般に犯罪者、發狂者及び變質者の間では、著るしい短頭が

往々見出されるけれども、長頭はより大なる範圍迄又より大なる程度で勢を占めて居る(五)、最後にあ  
る観察者達(ブルユネル・ベイ及びデュラン・ド・グロス)は短頭が女に於ける大きな骨盤と關聯する傾き  
ある事を發見した(六)。

(一)トビナル、一般人類學、三百七十六頁、三百七十七頁、モルセルリ、人類學記錄(伊太利)第五  
卷、及び様々の其他の據所。

(二)トビナル著、自然に於ける人間、千八百九十一年、百六十一頁。

(三)アール、ヴィルシオウ、亞米利加クラニア・エスニカ、千八百九十二年。

(四)トビナル著、一般人類學、五百六十八頁。タツペイネル(St. H. H. P.) 千八百九十九年、五號、二  
百三頁)はテイロール人の如き極めて短頭的な人種の間にあつてさへより短頭の頭蓋がより大なる頭  
蓋容積を持つ傾きのある事を見出した、然し極端な(過渡の)短頭的群に付いては彼は此れが最早有効  
でない事を發見した。マテイエカは同じ高さの個々人間で中頭者が最も大なる腦を特ち、長頭者と短  
頭者とは此の點に於て殆ど相等しい事を發見した。和蘭に於てボルクは中頭的頭蓋が最も大なる事を  
發見したが、然し短頭なる者は長頭なる者よりも勝つてゐた。又アムモン(Int. etoll. Anth. 千九百一  
年、一號、八頁)は自分の結果が實際上ボルクのものとは矛盾しないと述べて居る。ギユツフリダ・ル  
ツゲリも又伊太利に於て中頭的の者が最も大なる頭蓋容積を持つてゐる事を發見した(Cat. soc. Rom.  
di Antrop. 1004)。

(五)例へば、エム・ベネダイクト著、測頭器と頭測定(ウィーンナ、千八百八十八年)二十三頁、及びクラファム、論文「頭、その大さと形」(心理學的醫學辭典)を見よ。

(六)ドローネイ、人類學會報、已里、千八百八十五年三月五日。

此の相違は屢々極めて小さいが、然し其等の場合にあつてさへ其等の相違は往々永続的であるか又は調和的であるかなので、其等を排除する事には躊躇しなくてはならない、調和的配置を持つた輕微な相違はプイツツネルによつてアルサス人間に事實である事が見出された、又西班牙ではサン及びアランザデイが二十三州に於て女は男よりも短頭的であり、僅か七州に於てより短頭的でない事を發見した。

尙ほ附言しなければならぬ事にはその結果が簡單に與へられた頭の測定の様々な連続は極めて不平等な價値を有するのである、其等は雜多の個々人によつて作られ又往々極めて小數の組の主體に基づいて作られた。黒色人種間では女が男よりも短頭的であるといふのは佛蘭西人類學者中の最大者、プロカの見解——廣大な經驗に基づいた一見解——であつた、尤も彼は西方佛蘭西の現存する種族間では彼等がより少なくさうである事を發見したにはした(一)。獨乙人類學者中の最も偉大なる者ヴィルショウは、亞米利加西海岸に於ける土人の頭蓋を研究して、女が男よりもすつと短頭的である事を發見した、彼は男の間に長頭及び超長頭を重に、又後者を殆ど排他的に見出した(二)。

(一)人類學評論、第二卷、二十八頁。

(二)アール・ヴィルショウ、「亞米利加西海岸の土人の頭蓋骨學に關する寄稿」、人類學雜誌、千八百八

### 十九年、第五號

我々が全體に於て進化の道程は長頭的のものから短頭的のものへであると云ひ得るか何うかは疑はしいビスショッフの研究が示した如く、我々は最も當然に似人猿類を著しく短頭的なるものと看做してもよい、それ許りでなく、彼等は幼時に於て最もさうである、そして猩々は——恐らく最もよく發達した脳を持つた似人猿と看做してもよからうが、最も短頭的のものである。人種によつては初生兒は幾分長頭的である傾きがあるが、速かに最大短頭に達する。

小兒は殆ど何處でも成人より短頭的である、此れは短頭的種族同様長頭的種族に於て起り、又(ダニエル)がスマトラのニアス人の間で發見した如く)母が父よりも長頭的である時に起る。例へばスコツフは露西亞人にとつて頭率は幼年時にその最大數を示し、年と共に減小する、従つて頭蓋成長は殊に前後の方面に於て一層であるといふ事を發見した、成人せる露西亞人の頭蓋に於てポポウは頭率上殆ど相違を見出さなかつた。幼年時代には大體に於て、兎に角歐羅巴人間にあつては、少女が少年よりも明確に短頭的であるといふ事は何物にも價ひせぬ事である。例へばマンテガツツアはポローナに於ける貧民階級に屬する、四歳と十四歳との間の百人に近い少年と百人以上の少女とを測定して、少年に於ける平均頭率は僅か七九・一〇であつたけれども、少女にあつてはそれは八三・三五に及ぶ程高い事を發見した(一)。尙ほ少女の率は成人せるポローナの男のそれと殆ど同じであり(カロリ)によつて確證された如く)女は寧ろより低いといふ事を附言して置かう。クラファムは彼の發狂者の平均頭率が女のそれよりもほ



んの些細な程度迄より大きい事を発見したと同時に、二十歳以下では女の率は著るしく高く(七十八・六に對する八十二・九)、此の相違は重に少女に於ける不完全な前後的發達に基づいたといふ事は注意に價ひする。グラルド・ウエストは——合衆國のウオアセスターの諸學校に於ける四歳と二十一歳との間の三千人以上の小兒を測定したが、頭の最大の廣さは少年に於けるよりも少女にあつてより早く達せられる事や、成長期中の少女の率は大體に於て少年のそれよりも高いといふ事や、又少女に對する最後の率は五歳の時に達せられたそれと殆ど同じであるけれども、少年に對する最後の率は五歳の時に達せられたそれより一・五パーセント下であるといふ事を見出して居る(二)。此等の研究の方面では我々は恐らくグレンネルの研究を舉げてよからう、彼は出生時の百人の嬰兒の検査によつて此時期に於ける小兒の頭率が父のそれよりも母のそれにより近い傾向あり、嬰兒の頭の二十五パーセントが母の頭と同じ率の群に入るのに、僅か十八パーセントが父の頭と同じ率の群に入る、従つて母の頭は父の頭より二分より多く小兒的であるといふ事を発見した(三)。英國の小兒に就ては、マカリスターが短頭性から中頭性への變化は最初の生齒の完成後間もなく起るといふ事を見出して居る。

(一)マンテガツツア、『性的頭蓋學研究』Arch. Per. Anthrop. 第五卷。英國でも又マツフアングはりバプールに於て少女が少年よりも短頭的である事を発見した。

(二)ジー・ウエスト、『身體、頭、及び顔の成長』科學、千八百九十三年一月六日。

(三)グレンネル、『頭蓋の形と大さとの遺傳に就て』Zi. F. Gebu ts. n. Gynak. 千八百九十五年。胎

兒の頭蓋の特殊な特徴はセルギ (Rivista di Scienze Biologiche 第二卷・千九百年)によつて研究された、彼は胎兒の頭蓋の特色ある形が五角形であり、此れは成骨中心の凸出に基づくといふ事や、成人により普通な楕圓形又は卵體形の代りに此の形の現はれる事は胎兒的特長の持續を指示するといふ事を発見して居る。

斯くして女のみより大なる短頭は、ハンセンの指摘する如く、小兒の頭が始めに廣く、又成長は優れて長さにあるので、成長の一般的現象に基づく小兒の特長であるといふ事は明瞭である(一)。女の幼少的短頭が頭蓋の不完全な長さのためよりもより少く過渡な廣さのためであるといふは認められるであらう。此の遅い前後の成長は腦發達に基づく事は基づくが、幼年時代には殆ど存在せぬ前頭骨に於ける氣孔の擴大に基づく程ではない。我々は既に女が男よりも短頭的である種族は女が男よりも長頭的である種族に數に於て勝つて居るといふ事を知つた。而して若し何か此れ以上の性的相違が終ひに見出されるならば、それは大體に於てより黒く又より原始的な種族間の女の幾分より大なる短頭、及び白色の又文明なる歐羅巴種族間の長頭に對する恐らくより大なる傾向に味方するものであらうといふ意見が敢て試みられてもよからう(二)。

(一)ストラツツ(博物學、二百十二頁)は更に進んで女の短頭を女に於ける頭蓋のより大なる柔軟に關聯させてゐる。

(二)此の結論は更に最近カール・ペアソン(死の運命、第一卷、三百四十九頁等)により散在せる據所

から蒐集された材料によつて確證されて居る、若し我々がペアソンによつて提出されたその連續を二つの群に、即ち女が男よりも長頭的である一方と女がより短頭的である他方とに分つならば、我々は第一の群は殆ど排他的に文明種族からなり、總て極めて原始的な種族は、又様々の文明人をも含んで居る第二の群中に包含されるといふ事を見出すのである。

何故これがどうであるべきかを理解する事は、我々が幼兒は短頭的であり、又女は男よりも密接に小兒型に近似すると同時に、文明の解剖學的傾向は又普通野蠻人間に勢を占めるよりも小兒型に對するより近い接近に向つて居るといふ事を思ふ時少しも難事ではないのである。プロツホは而も多數の長頭を包含して居る古代墳墓に短頭の在る事（獨乙に於けるリツサウエル及びヴィルショウによつて、又ボヘミアに於けるマテイエカによつて注目された面倒な現象）に關説して、そこに短頭への長頭の進化があつたといふ事や、又女は此の進化の先立ちしたといふ事を主張して居る（一）。尙ほ附言しなければならぬ事は、近代都會人には圍繞する地方人よりも多く長頭的である傾向があるといふ事である。都會人は地方人を棄て、増加しつつあるので、我々は此處に於て反對の方向に於ける開發的一傾向を持つように思はれる（120）。

(1) H. H. Protopopov, Bull. Soc. d. Anth. Paris, 1911, nos. 1 and 2.

(2) ビツタール(頭率に於ける身長の影響)人類學會報、巴里、千九百五年、三號)は長頭が高い身長と關聯してゐると結論し、又都市は高い身長を助けると信じて居る。

顔面——此處で顔の一般的構造を簡單に考へるのは好都合であらう。顔の事を一般的に云ふならばその進化的傾向は頭蓋がより大きくなるのにそれがより小さくなる事であると言ふ事を述べなければならぬ。猿類は、特にゴリラに於て明瞭である如く、彼等の小さい頭蓋に比して巨大な顔を持つて居る、人間の顔は、比較的、小さい、そして女の顔は彼女の相對的に大きい頭に比較して男のそれよりも小さいと通常云はれて居る、であるから、ソーマリングが一世紀前に指摘した如く、男女此の點で猿よりも高いけれども、女は男よりも高いのである。

幼年時代から成人時代迄の顔の發達は、興味に満ちて居る事であるけれども、現在の所では格別に僅かの注意しか惹かれてゐない。私の熟知して居る、充分に多數な主體に基づいた唯一の研究は合衆國、ウオアセスターに於て、マサチューセツツ州のケンブリツチのウエスト教授によつて五歳と二十一歳との間の三千二百五十人の個人に關し遂行されたそれである（一）。顔成長及び身長成長間には、成長の停止の時期に對する傾向にも、發情期に於ける少女の一時的相對的優越、及び男に於けるより、永續せる成長にも共に、或る程度の並行があるように思はれる。證據は成長の三時期の存在を指して居る。その第一期は七歳頃に終り、第三期は十五歳頃に始まる。十一歳と十三歳間では少女は頭の直径の點で少年に接近する、而るに顔の直径では十二歳になつて少女が少年に全く達するようである。ウエストは斯う云つて居る、「頭の長さに比較して少女の頭の廣さと顔の廣さは一般に少年のそれよりも大きく又頭の廣さに比較しては顔の廣さは又少年に於けるよりも少女にあつてより大きい」又少女に於ける顔

は十七歳に成長を止めるのに、少年にあつてはそれは十八歳の時尙ほ成長しつゝあり、恐らく其後も成長し続けるであらうといふ事が發見された。此等の結果は女の顔が男のそれよりも相對的により廣いかも知れない、尤も同時に、又觀察によつて得られた印象及び實際コルマンの顔率によつて到達された結果と一致して、女の顔は小兒に於ける如く相對的に短いものであるといふ事を示すように思はれる。此等の結果はストラツスベルヒの解剖學協會に於ける極めて多數の成人せる主體に關するプフィツツネルの觀察に依つて確證されて居る、彼は女に於ける顔が相對的により廣く且つより短かく、此等の特徴は小兒型のより大なる保存に導くものである事を見出した。プフィツツネルは顔の長廣率に於ける性的相違が、頭の長廣率に於ける性的相違に比較した時、極めて不變で、規則的で、著るしい事を發見した(一)。下顎を持つた顔の下半部は男に於けるよりも女に於てより少く發達して居るので、眼窠を有する上半部は顔の相對的により大なる部分を作り(ハツシュケの言つた如く)、又それが實際上あるよりもより大きく見える傾きがある、而もその外見は恐らく女に於ける眼窠の屢々より圓い又はより卵形な形によつて又恐らく眼窠の實際上相對的により大きい高さによつて尙ほ一層強められる事であらう。實際の相違は外見よりも少ないのである。パウエル・バルテルスはマライ人及びシンガル人を除いてはそれが女に於て絶對的により大きくはないといふ事を發見し、又ウエルケル・ワイスバツハ、エツケル、及びレベンテイツシュと一致して、それが相對的にはより大きいといふ事を見出して居る。又一方ではゼイレルは(三)、眼窠の容積が相對的並びに絶對的に、猿類及び一種兩方共の女性にあつてより少ないといふ事を

發見して居る。相對的には(彼は斯う結論して居る)それは人間に於けるよりも猿類に於て遙かに大きいとして年齢と共に増加して行くが、それは猿類の場合に於て殊に著るしいのである。

(一)「顔の發達」、科學、千八百九十一年七月三日、「體、頭、及び顔の發達」、科學、千八百九十三年一月六日。

(二)ダヴルユー・プフィツツネル、「人間に於ける第二次的性的區別の知識に關する寄稿」*M. anthropologis-*  
*che Arbeiten*, Bd. vii, heft 2, 1896; 同く、*Zt. F. Morph.*, Bd. iii, heft 3, 1901, pp. 524, 593.

(三)シヒー・セイレル、*Beitrag zur Anth. der Augenhöhle*, Inaug. Diss. 1899. 私は未だ此の小冊子を見る事が出来なかつた。

尙ほ附言しなければならぬ事には、トビナルの額顛骨率は額顛に於ける廣さに比して顔の相對的により大なる廣さを示して居る、此の率が高ければ高い程額顛は一層廣くなり、顔は一層狭くなる、従つて最も高い率は腦水腫的頭に於て見出される、此の率は成人に於けるよりも小兒に於てより高く、又男に於けるよりも女に於て常により高し(一)。

(一)トビナル著、一般人類學、九百三十六頁。

不注意な検査では女の眼は男のそれよりも一般により大きく又より凸出してゐるように思はれる。然し此の結果は大部分唯だ外見丈であつて、男に於ける眼上の骨隆起の弓形をなし過ぎて居る事に多く基つて居る。此の分明に男性的な特長が不完全である稱族は小兒的又は女性的外見を持つて居る。眼

其物は、ブリーストレイ・スミスに依ると、總ての年齢に於て女よりも男にあつて水平直徑上極めて僅かに大きいものである、然しその相違は非常に小さく、僅か。一ミリメートル程に過ぎない。

顔角——此の角度は大さつばに言へば上顎の突出の程度を指示するものであるが——腦と接觸して居るかの頭蓋の部分のために顔は一般に輕視されてゐて——如何なる性的區別の一般的認識にも導かなかつた。此れは大部分頭蓋骨學者がそれを決定するに用ゐた極めて雑多の方法に基づいて居る。左り乍ら或る研究者達によつて定められた如く、顔率は或る重要さを持ち、又全く明瞭な諸結果に導いた。ウエルケルは(多數の頭蓋骨學者によつて續かれたが)鼻根に比較したその基底に於ける鼻梁の突出の度合によつて顔面角度を測定した。大抵の觀察者の掌中にある此の率は女が男よりも突顎的である事を示して居る。例へばベネディクトは此の角度を研究して、突顎が成人に於けるよりも小兒に於て一層著しい事を發見した。又突顎は(下等動物間に於ける如く、年齢と共に増加しないで)年齢と共に減少すると同時に、女は男よりもやゝ多く依然として突顎的であり、それは通常半度位であるといふ事を見出した(一)。トビナールは形態學的順位を指示するための總ての顔率の内最も重要な物は齒槽鼻下率であつて、それは幾分違つた風にして又上顎の突出の度合をも指示すると考へて居る。此の率の研究は突顎が高等人種間に於けるよりも下等人種間に於て遙かに多いといふ事を示して居る。例へばホツテントツトの間ではそれは五十に近く、英國人、佛蘭西人、及び獨乙人の間ではそれは二十の廻りを擺動し、蒙古人及びポリネシア人は中程に來る。凡ての多大な印度歐羅巴族では女は男よりも突顎的である。例へば

十二世紀から十九世紀迄の巴里人間に於て、ブルトン人、オーヴェルナツト人、バスク人、コルシカ人間に於て、並びに又古代埃及人及び日本人に於て、女は男よりも著るしく、又極めて重大な程度迄より突顎的である。然し此れがより低い文明程度にあるより黒い種族間にあつてそうでなく、將た又支那人の間ではそうであるように思へないといふ事は奇妙な事實である、亞弗利加黑人、ニューピア人及びブツシュ人の間では女は男よりも著るしくより突顎的でない(二)。女は斯くして大體に於て、兎に角も歐羅巴種族間では齒槽的突顎の傾向を持つて居る。此れは、野蠻人の特長であるけれども、缺點である所ではない、それは屢々、ヴィルショウの言ふ如く、女の顔に或る峻刻を與へる。恐らく女に於ける輕微な突顎の單純な方への動きは顔が接吻するため仰向けになつた事を暗示するであらう、然し如何なる場合にあつても、高い進化の一特徴でないけれども、明かに魅美であるといふ事は疑はれない。

(一)ベネディクト著、頭蓋測定と頭測定、千八百八十八年、三十一頁。

(二)トビナール、『突顎』, *Revue S. A. n. l.*, 千八百七十一年、六百二十八頁、及び千八百七十三年、七十一頁、二百五十一頁、ヌーヴリ、*Y. Année Perdue*, 第五年、千八百九十九年、五百八十二頁。

我々が顔面角度の外の諸形式、一層殊に前額に關係ある顎の上部の突出を示すそれ等を研究する時、女が何方かと言へば男よりも突顎的でない事を通常見出すのである。然し乍ら此等は顔面角度のより特色的でなく重要でない變化である。下顎をも含めて横顔を全體として考へる事によつて顔の全突顎を見

積り、齒の會ふ角の突出を測定する事が出来る。此れはキャンパーの顎角度（キャンパーの顔面角度とは全く相異なる）によつて測定されるが、それはその頂點として齒の接合點をとり、基底は前額に又頤の尖端にある。トビナールは此の角度を非常に重要なものとしてゐる、實に腦の質量又は二足的姿勢に與へると殆ど同じ重要を與へて居る、何故ならばそれを我々をして一種族内の個々のものを類別し得さしめると同様に、又多くの動物學的種族を其等の形態學的進化の次序に於て排列し得さしめるからである。顎角度が大きければ大きい程一層進化の度合が高くなる。女にあつては、高等人種間にあつても下等人種間にあつても共に、男よりも顎角度が常に著るしく小さいといふ事が發見されて居る。其れ故に顔全體で作られた此の角度は、女が男よりも幾分より多く突顎的であるといふ、上顎の齒槽部の研究によつて達せられた結論を支持するのである。

上顎のより低い部分の突顎はより原始的時代の暗示點と見做さなければならぬけれども、下顎のより低い部分の突出は最も高い歐羅巴人種に於て最も著るしい特に人間的な特徴である。引込んで居る頤は退化と動物性との特徴である。女にあつては頤は通常より突起してゐない。女にあつては又小兒に於ける如く顎の角度が明かに大きい。

又一方では、女はベルテイロン、モルセリ、オルシアンスキー、及び其他の人々に依つて示された如く、彼等の顎の相對的により小なる重さによつて、男よりも高い程度の進化を示し、又同時に小兒型に近寄つて居る。下等人種、並びに猿類は、相對的により大きい下顎を持つて居る、そして同傾向は犯罪

者間にも屢々發見された、然し女の頭蓋は男の頭蓋に對し八十五對百であるのに、女の顎は男の顎に對し僅か七十九對百である（一）。然し乍ら若し頭蓋重量よりも寧ろ蓋頭容積が顎の重量に比較されるならば、如何なる性的相違も見出されないといふ事が主張される。ザノリの定式

頭蓋容積  
頭蓋容積

は兩性に於ける同じ率を齎らし、従つて神經組織に對する營養組織の關係が男に於ても女に於ても共に同じであるといふ事を示すに傾いて居る。モーチの顎動力計が顎の力に於ける性的相違は、其他の筋的諸點に於ける女の劣等に比して、比較的輕微である事を示すといふ事は又注意に價ひする事である（二）  
（一）イー・モルセリ "Sul Peso del Cranio e della Mandibola in Egipto col Saso" 人類學記錄・千八百七十六年。レベンティツシュ（前掲の書・三十三—三十九年）は此れを性的區別の内最も重要なものと看做して居る、パウル・バルテルス（前掲の書・二十二頁—四十三頁）を参照せよ。  
（二）モーチ、『顎動力計に就て』Arch. per L'Anthrop. 千九百七年四百六十三頁。

齒——有望な分野であり研究が比較的容易な分野であり乍ら、歐羅巴種族間の齒の人類學的研究に極めて僅かの留意しか與へられなかつたといふ事は寧ろ驚く許りである。例へばシャアフハウゼン及びフロウエルのような少數の人類學者は興味深い結果に到達したが、然し齒醫者は、私がその職業の重なる者の或るもの、審査によつて引出す事が出來た範圍では、性的相違に關する我々の知識に殆ど加へる所

がなかつた。ゴアハムは幾千の歯を考量したが、性による相違に就ては何事も云つてゐない(一)。高等人種に比較した下等人種の間では、歯がより大きく又より規則的に排列されて居るといふ事や、智齒は其他の臼齒に類似し又より少なく妨げられ又そんな屢々排除しないといふ事や、齒弓はより方形であつてより文明なる種族に於ける程圓くはないといふ事が一般に承認されて居る(二)。原始民族間では、より早い時代のもので將た又我々自身の時代の者でも、上顎及び口蓋がより少ない不規則を畸形とを顯し、通常極めてよく形作られ發達して居るといふ事も又疑ひない、又より高い。そして中流の階級間では勞働階級間に於けるよりも様々の不規則がより多く屢々起るらしい。強い顎、そして恐らく又さういふ顎の相關した様々の精神的性質は、野蠻人及び未開人の生活状態よりも文明人の生活状態の下により少ない第一義的重要を持つて居る。文明の傾向は齒の數と大さとを減する事であり、又口の大さを減じ又屢々口の骨窩を變形する事である(三)。

(一)醫學時報、千八百七十五年一月九日。

(二)シー・エス・トームス著、齒的解剖學便覽、千八百八十九年、四百五十九頁。

(三)例へば、オークレイ・コールス著、口の諸變形、三十四頁を見よ。

下顎は男に於けるよりも女に於て著るしくより小さく、而も齒はそれに一致する減少を少しも示さない。我々は女に於いて發達の故障が特に屢々起る事を豫期すべきであらう。此れは真相であるらしい。女の顎が大きに於て不完全でありその結果齒を妨げるといふ著るしい傾向を持つてゐるといふ事を

示す證據は澤山にある。王立協會會員、シー・エス・トームス氏は私信中に斯う書いて居る、「貴方も知られる通り、さういふ問題では殆ど價値のない、一般的印象から言ふならば、私は間隙のため齒の拔除を餘儀なくさせる狹縮した齒弓が男性の小兒に於けるよりも女性の小兒に於てより普通であると云ふべきであらう。』タルボアの極めて興味深い又教へる所の多い著書、「齒の不規則」の第四版(千九百一年に添附した様々の表を驗べると、大體に於て顎の異常は、殊にV形の齒弓に對する傾向は、女に殊に頻繁であるといふ事を示して居るよう思はれる。

スパントンはマンチエスターに於ける勞働階級と二百人の健康な乳で育てられた嬰兒の間で、最初の生齒が少年に於けるよりも少女に於てより早く初り、此の點に於ける性の間の平均相違は三十一日であるといふ事を發見した。永久齒に關しても相似た相違があるように思はれる(一)。マジトーは二百四十一人の男と二百五十九人の女とに於ける智齒の検査によつて其等が佛蘭西では男に於けるよりも女に於てより早生的であり、最大數は二十二歳に現はれ、男では二十三歳である——尤も二十五歳には十人の女に對する六人の男であるに至るが——といふ事を發見した(二)。

(一)エイ・ワイ・スパントン、大不列顛醫學新報、千九百零七年六月八日。

(二)巴里人類學會報、千八百七十九年二月二十日。

ガリツプは齒の密度が女に於けるよりも男に於てやゝ大きい事を發見した、然し若し我々が齶齒の範圍に關し三年中に蒐積された材料を驗するならば、そこに何等著るしい性的相違はないのである。或る

國々では一方の性が他の性よりも多く齶齒に罹り易いが、然し大體に於てその範圍は平等である(一)  
(一)様々の觀察の概要はリプスチツツ、『學童の骨瘍頻繁』Comptes Rendus XII Int Cong. Med. (モスク  
ウ、千八百九十七年)第五卷、六頁中に見出されるであらう。大不列顛齒科醫協會委員會報告として  
は、千九百年七月二十一日の大不列顛醫學新報を見よ。又英國寄宿學校兒童に就ては、千五百七二年二  
月二日及び二十三日の大不列顛醫學新報を見よ。

我々は齒率に付てフロウエル教授に負ふ所が多い、それは齒長に百を乗じ、基底鼻の長さ(即ち鼻前  
額の縫合から大後頭孔の端迄の長さ)で割つて得られる。彼は白人種が小齒的であり(即ち小さい齒と  
小さい齒率とを持つて居り)、黄色人種は中齒的であり、黒色人種は大齒的であつて、大きい齒率とを持  
つて居り、又一方似人猿類間では齒率が尙ほ一層大きいといふ事を發見した。猿類間では女性間の齒率  
が常に男性間に於けるよりも大きい。これに類似の性的相違は人間種族に於ても見られ、女に於ける齒  
はより近くその大きさを留め、而も頭蓋骨は殊と共に一般により小さい。然し乍ら此の相違は歐羅巴種族  
間では輕微である。

シヤアツフハウゼンは二つの上の中前齒即ち門齒が女及び少女に於て同年の男及び少年に於けるより  
も唯だに相對的許りでなく又絶對的にもより大きい事を示した。十二内至十五歳の五十人の少女を五十  
人の少年に比較して、彼は件の齒の平均幅が少年に於ける一に對する少女に於ける一・三三程であつた。  
和蘭に於けるザンドヴールトに屬する十二人の男の間で彼は八・三の平均幅を見出したが、十二人の女

は八・八の幅を示した。或る女にあつては件の齒は目立つて大きい(一)。其故に我々は女の顎は文明種  
族では甚だしく小さい傾きがあるけれども、彼等の齒が男のそれよりも依然として相對的に又絶對的に  
さへより大きいといふ事を信すべき立派な理由があるといふ事を知るのである。シヤアツフハウゼンの  
結論はパルレイトによつて批判された、彼はライプツビに於て百人の男と百人の女との門齒を測定し  
大抵の十年間に於て男の中央門齒が女のそれよりも絶對的に大きい事を發見したが、然し彼は終ひに其  
等は相對的にはより小さいといふ事を承認した。パウエル・バルテルスも又六十以上の頭蓋を驗測して、パ  
ルレイトと同一の結果に到達した(二)。尙ほマックス・バルテルスは此の性的區別が世界的であるといふ  
結論に達し、又は證據として多くの寫眞圖を示して居る。ストラツツは大きい門齒を女に於ける相對的  
により顔に結び付け、又其等を女性美の一標徴と看做して居る。然し乍ら恐らく最も低級な人間種族に  
於ては性的相違がより少なく、男も女も共に大きな中央門齒を持つてゐる事であらう、此れがオースト  
ラリア人の間で事實であるはクラアツチ教授によつて記された(三)。

(一)プロツ及びマックス・バルテルス著、女、第七版、千九百一年、第一卷、十五頁。

(二)パウエル・バルテルス著、頭蓋に於ける性的區別、三十六頁—四十一頁。彼は全論争の立派な記  
事を示して居る。

(三)Zt. F. Ethn., 1901, heft 3, p. 137.

兩性に於ける顔面の下半島を考へる時、我々は斯くして、そこに顯著な相違があり、恐らく第一位の

第二次的性的區別をなしてゐるといふ事を悟るのである。男にあつては顎はずつともつと大なる程度迄發達し、より力強い筋を以て與へられ、そして勝れた毛的附屬物の座となつて居る。女にあつては、門齒が兎に角も依然として大きいけれども、此の部は一般により柔かく、よく圓く、より小さく、全く著るしく發達しない儘であつて、此の相違は外耳から喉頭迄に及んで居る。此部は女によつてはより小兒的でもあり、より原始的でもあり、而も同時により少ない動物性と個的進化でないけれどもより高い種族的進化を示して居る。此等の區別は、第二次的性的特徴として重要であると同時に、又全く外の階級の意義を持つて居るといつてもよい、ウツヅ・ハツチンソンは率直に其等は癌の相異なる性的範圍を説明するに直すると提議した。癌によつて最もよく冒される二つの器官は乳房と子宮とであるといふ事はよく知られて居る。我々が此等の二つの女性的性殖腺を勘定に入れない時、癌は男に於て幾分より多く勢を占め、又それが男に於て最も著るしく優勢である兩性に共通な部分は確かに口の廻りの區域であるといふ事が發見される。耳、喉頭、耳下腺、口咽頭、氣管、食道、頸、及び顎の癌は殆ど凡ゆる場合に於て男にあつては女に於ける倍頻繁であり、又大體に於て女に於ける三倍頻繁である(例へば、千九百三年十一月二十一日の大不列顛醫學新報所載、J・P・ビー・ロングスタツフの『癌の病原學』を見よ)。今や總て是れ等の器官は口と密接に關係して居る。そして男に於て此處に癌のより多く頻繁なのは喫煙に基づくといふ考へが通常述べられて居る。此の説明は、普通ではあるけれども何つちかと言へばこじつけである。ウツヅ・ハツチンソン(人間比較病理學に於ける研究、千九百一年、二百六十七頁)は癌が機能の廢

類しつゝあるかの諸々の器官に現はれる傾きあり、同時に身體の残余の器官の活動力はよく支持されてゐるものであると指示して居る。此れは乳房と子宮とに就ては明かにその真相を得た事である。然しそれは又、ウツヅ・ハツチンソンの認める如く、非常に發達した男性の口部に就ても事實である。五十歳以後此の點の老衰退歩的變化は小兒的狀態の方へと起り始める。そして相對的に此等の變化は男に於て遙かに大きい、といふのは女にあつては此の部は既に小兒型に接近して居るからである。男に於て此の部が癌に罹り易いのは斯くして性的意義の非常に發達した部に於ける衰頹の一現象であつて、子宮及び乳房が癌に罹り易いといふ事に正しく比較すべきものである。

頭蓋容積——頭蓋容積に於ける性的相違の問題には可也な注意が與へられたが、然しその結果は小さなものであつた。古代又は近代の、野蠻人又は文明人の、殆ど總ゆる大きな頭蓋系統に於て、頭蓋容積は女に於けるよりも男に於て著るしく大きい事が發見されて居る。然し我々が體重も又男に於て著るしくより大なる事を考へる時は此の結果もさして驚く程のものでない、そして或る人類學者等は男の頭蓋容積が女のそれよりも相對的に幾分大きいと確言したけれども、他の人々は女の頭蓋容積が男のそれよりも相對的により大いと定めた點で少く共同等に正しかつたのである。一番良いとしても、頭蓋容積は頭の大さの確かな指示ではない。そして頭蓋の外的大さによつて腦の大さを量る事は尙ほ一層粗雑な一層似而非な近似を與へるのである、といふのは男性の頭蓋は女性の頭蓋よりも一層大きく重いからである(1)。



(一)女の頭蓋が男のそれよりも全骨格のより大なる部分を成して居るといふ事は何者にも價ひせぬ事である。例へばマヌーヴリエの頭蓋股骨率は大腿骨の重さの頭蓋のそれに對す。關係(後者を百と看做す)を與へて居る。大低の女(八十三パーセント)は大腿骨よりも重い。頭蓋を有し、大低の男(八十一パーセント)にあつては大腿骨がより重い。此の見地から言へば、頭蓋の相對的大さは次のよう順序で減少する。即ち小兒、女、短身の男、高い男、猿、すつと前にレトジヴスによつて注目され(一)、又其後屢々揚言された或る興味のある點は、より高い種族に於ける又より低い種族に於ける相對的性的相違である。それは高等人種に下等人種に於けるよりも大なる性的相違がないか何うかの問題である。私は此點に關する次の表を作つたが、それはワイスパツハによつて得られた數字の多くを使用し、又トビナールによつて與へられた比例、トビナールによつて調和されたフロウエルの比例を計り、又様々の據所からの他のものを附加して居る(二)此の數字は男のそれが百に等しいと看做される時の女の頭蓋の平均頭蓋容積を示して居る。

ニグロ(ダヴィス)、九百八十四。

ブツシュ人(フロウエル)、九百五十一。

ホツテントット及びブツシュ人(プロカ)、九百五十一。

ヒンヅ人(ダヴィス)、九百四十四。

ニグロ(テイエドマン)、九百三十二。

エスキモー(プロカ)、九百三十一。  
オーストラリア人(プロカ)、九百二十六。  
マライ人(テイエドマン)、九百二十三。  
和蘭人(テイエドマン)、九百十九。  
普魯西人(キュツプエル)、九百十八。  
愛蘭人(ダヴィス)、九百十二。  
アングマン人(フロウエル)、九百十一。  
ニュー・カレドニア人(プロカ)、九百十一。  
和蘭人(プロカ)、九百九。  
タスマニア人(プロカ)、九百七。  
カナダ人、(ダヴィス)、九百六。  
ヴェツダ人(ダヴィス、フロウエル、ヴィルシヨウ、トムソン)、九百三。  
マルキサ人(ダヴィス)、九百二。  
獨乙人(ウエルケル)、八百九十七。  
オーヴェルナ人(プロカ)、八百九十七。  
アイヌ人(小金井)、八百九十四。

テイロール人(タツペイネル)、八百九十二。  
バヴァリア人、都會に住む者(ランケ)、八百九十三。  
アイヌ人(コベルニキ)、八百九十。  
オーストラリア人(フロウエル)、八百八十九。  
バヴァリア人、田舎に住む者(ランケ)、八百八十八。  
蘇格蘭人(ターナー)、八百八十七。  
露西亞人(ポボウ)、八百八十四。  
獨乙人(ダヴィス)、八百八十三。  
アルサス人(シュワルベ)、八百八十。  
獨乙人(ワイスバツハ)、八百七十八。  
古代不列顛人(ダヴィス)、八百七十七。  
日本人(テイエドマン)、八百七十四。  
オーストラリア人(ターナー)、八百七十一。  
支那人(ダヴィス)、八百七十。  
獨乙人(テイエドマン)、八百六十四。  
アングロ・サクソン人(ダヴィス)、八百六十二。

十二世記の巴里人(プロカ)、八百六十二。  
英吉利人(プロカ)、八百五十五。  
日本人(プロカ)、八百五十五。  
エスキモー(フロウエル)、八百五十五。  
獨逸人(フェウツシュケ)、八百三十八。  
(1) ミューレルの *A. olin Für Anat.* 千八百四十五年。尙ほ又ロールストンの *Presidential Address to Anthropol. Soc. in Brit. Association* (千八百七十五年) 及びル・ボン、*Revue d'Anth.* (千八百七十九年五十六頁) を見よ。フェウツシュケは千八百五十四年に、ヴォーフト及びウエルゲルは數年前に、各々文明人間の頭蓋のより大なる性的相違に對する傾向を指摘した。  
(2) ワイスバツハ、『獨逸婦人の頭蓋』 *Archiv für Anth.* 第三卷、千八百六十八年。トビナール、人間等、千八百九十一年、二百十八頁。

此の表は大體に於て進化と文明との影響の下の頭蓋容積に於ける漸次的性的分岐を示してゐるやうに思はれる。そこには自づから、包含されて系列の或るものが余りに小さいか、又は病的であるかに基づく、或ひは側定の方法に於ける相違に基づく、多くの不同がある。例へば若しヴェツダ人の頭蓋の系列から二つ——病的に大きい男性的の頭蓋及び病的に小さい女性的の頭蓋——が省かれるならば、極めて原始的種族なるヴェツダ人は彼等が多分屬する表の最高位に来るであらう。勿論我々は此の相違が、若し

實際でも、全く文明に基づくと性急に假定することは出来ないといふ事を記憶しなければならぬ。それはワルデイエルの信する如く種族の問題であるかも知れない。然し乍ら増加せる頭蓋容積に對しては二つの大要素——大きな體容積と心的活動——が働き、それは共に文明に於て効果を生ずるものである。南印度の小さいマラヴェル人の間では女の頭蓋容積が、絶對的にすら、男のそれよりも寧ろ大きく、大きな體の獨逸人の間では女の頭蓋容積が相對的に極めて小さい。都會人は地方人よりも大きい頭蓋容積を持つが、然し地方人によつて堪へられる筋肉労働は彼等の頭蓋容積を全く高いリヴェルに保つて居るランケは百人の大きな頭を持つた男性都會人の最少限が千二百十八程の低さであるのに、百人のより小さい頭を持つた男性地方人の最少限は千二百六十である事を發見した(一)。手工の仕事も精神的工作も持たない都會人は極めて低い位置に立つて居る、そして文的にあつては最も劇しい手工的工作も最も劇しい精神的工作も共に男の手に落ちて居る。シアコプス及びスピールマンが西部猶太の女は頭蓋測定上西部猶太の男よりも明かに劣つて居るけれども、東部猶太の男と女との間には比較的僅かの相違しかないといふことを發見したのは恐らく何物にも價ひせぬ事であらう。然し乍ら頭蓋的特徴の平等化には社會的狀態の平等化による極めて分明な制限がある事を悟らなければならぬ。猩々及びビコリの間では性的頭蓋的相違が非常なものである。オーストリア人は殆ど人間種族の内最も低級な者であり、又最も單純な狀態の下に住んで居るが、然しターナーの言ふ如く、Challengerの頭蓋を驗すると、『性的特徴はオーストリアの頭蓋に於て非常に著るしかつた。女性の頭蓋の遙かにより小さい大さと容積、その比較的

軽い事、その端及び突起、一層殊に頭鞍の脆弱、その低い基底顛頂の高さ及び高い眠窩率、總て是等は女性及び男性の頭蓋の間の相違の重要な特色を成した。』然し乍ら一般に野蠻人種間に於けるよりも文明人種間に於ける頭蓋容積上の相對的により大なる相違は、依然として或る興味のある事實なのである。

(一)ジエー・ランケ、『都會人と地方人』、*Zeitschr. für Biologie*, 千八百八十二年。

『より高尚な』部と看做された頭蓋の前額部が女に於けるよりも男に於てより多く發達して居るといふ事は屢々確言された、殊により早い頭蓋學時代にあつて一層そうであつた。然し乍ら前額部が如何なる外の頭蓋部よりもより高い又はより特別に人間的であると相像する事には何の理由もない、そして前額部が男に於てより非常に發達して居ると相像する事にも丁度同じく些の理由もない。クレランドは男及び女に於ける頭蓋の三部——前額部、顛頂部及び後頭部——を比較して、何等注意に價ひする相違を見出す事が出来なかつた。マヌーヅリエは——此の點に關する最も廣大な信頼出来る研究をなした人だがプロカの記録簿の研究によつて、前額曲線が十七組の頭蓋の内十四のそれに於て男に於けるよりも女にあつて相對的により大きい事や、顛頂部曲線が十七組の内六組に於て女に於て相對的により大きい事を發見した。彼はそこで女が頭蓋の前額型的を顯し、男は顛頂型的を示すといふ結論に達した(一)。後頭部も又女に於て相對的により大きいといふ事はマヌーヅリエによつて、併びに又ワイスマツハによつて發見された、後者は獨逸人の頭蓋を綿密に研究して、同等の廣さを持つた女に於ける後頭蓋にはより

大なる高さとなることがあるといふ結論に達した。巴里の男女に於ける頭の様々の部の相對的幅員に關するトビナールの數字は女に於ける前額部の廣さの優越を殆ど又は全く示してゐないが、然し後頭葉及び小腦の大なる容積を指示する頭の後部の極めて著しくより大なる廣さを示して居る。トビナールの指摘する如く、一般に此の廣さは高級な種族に於て最も大きい。露西亞人及び日本人の頭率は殆ど同じであるが、然しより高い人種なる前者は、より大なる後頭小腦幅員を持つて居る、バスク人はタスマニア人の頭率を有して居るが、然し彼等はより大なる後頭幅員を持つて居る、巴里の男は巴里の女よりも誰だ二單位の頭率をより多く持つて居るが、然し後者は八單位多くの後頭幅員を有して居る。(11)

(1) マヌーヅリエ、「男女に於ける頭蓋の前額部及び主要部の大きさに就て」。 *Ann. de l'Ass. Fran. pour l'avancement des sci.* 千八百八十二年、六百二十三—六百三十九頁。及び論文「性」。 *Dict. des sci. Antrop.* ダツフネル(人間の發育)は前額の廣さが事實上兩性に於て同じである事を發見した、尤も周圍は男性あつて遙かにより大きかつたが。

此の點では、高い前額が決して普通考へられるような高い心的能力の必然的隨伴物ではないといふ事を記して置かう。女にあつては、ベネドイクト (Kern, u. Keph., p. 125) はそれを座學的退化の指示と見做すに慣されてゐる、そして彼は彼は髮毛の配置によつて高い額が女により本能的に隠される事に關説してゐる。

(2) トビナール著、一般人類學六百九十四頁。ウイルクス (Lectures on Dis Nervous System) の言によ

は、「我々には唯だその才能のよく發達して人の頭をば觀察して後ろの重大な突出を見なければならぬ、低い發達の人にあつては頸と頭とが一線にあるのである。」「低い發達といふよりも不完全な發達と云ふ方が恐らくもつとよいであらうと、といふのは此の少しの後頭的發達は往々著しく知的才能ある人々に見出されるからである。」「クラファムは四千の頭の測定の結果として、全周圍に對する前部の比例に關し、前部が正氣の者から發狂者に、又發狂から白痴に移る時減少するよりも寧ろ増加するといふ事を發見した(精神科學雜誌、千八百九十八年四月、二百九十三頁)。

プロツツオ (Arch. de Psych., 千八百九十五年、第六部五百六十四頁) はマセドニーによつて蒐集された材料を利用して、殆ど平等に兩性間に分たれた葡萄牙種の千の頭蓋に於ける頭蓋骨縫合を驗べた。彼は女に於けるその縫合がより單純な特徴のものである事や、女にあつては熔融がより遅い年に起る事や、又女にあつては亦頭蓋の前部の縫合の凝固が男に於けるよりも相對的により早いといふ事を發見した。同著せざる縫合の延引せる保留は、プロツツオの指摘する通り、明かに幼兒的な特長である。彼は又女に於ける前部縫合の相對的により早い熔融は劣等の一標徴であると信じて居る。然し乍ら前部縫合は女にあつて後部縫合よりもより早く閉合する、それは前額上が女にあつては早成的に發達してゐるからであるといふ事を言へば充分である。フレデリック (Zi. F. Morph. 千九百九年、二號) は顔、口蓋、等の骨著癒が又男に於ける(三十一歳頃)よりも女に於て(四十歳頃)より遅く起るといふ事を發見して居る。大體に於て、我々は一方の性が他方の性よりも形態學上優れて居るといふ事を頭蓋の驗査から結論す

る有効な根據を何も見出さなかつた。唯一の著るしい又一般に承認せられる性的頭蓋の相違は、我々の現在の知識の及ぶ範圍内では、最初に指摘されたそれ等である、即ち、男にあつては氣孔及び筋突出がより著るしく、女にあつては凸出がより目立つて居る。總て此等の三つの點に於て男は野蠻的、老人的及び猿類的型(此等に就て言へば、我々の既に見た如く、又ヴィルショウの指摘した如く、相互に近似して居る)に接近し、又一方は總て此等の點に於て又女は小兒型に接近して居る(一)。その蓋頭型が小兒的型を遠く距つてゐる事を神に謝すのはバリサイ派的(形式的)心情にある男には氣儘である。その蓋型が老人型に接近してゐない事を感謝するのはさういふ心情にある女にとつて等しく氣儘である。

(一)小兒的及び男性的型の間に介在するものとしての女性頭蓋の特殊な形態學的特徴はリツサウエルによつて示された(Arch. F. Anth. 千八百八十五年)、そして此の點はヴィルショウによつて屢々力説された。パウル・バルテルス(頭蓋に於ける性的區別、千八百九十七年、九十七頁)は男性の頭蓋に動物的特徴の缺けて居る事は彼の研究の重なる結果の一つであると考へて居る。解剖學的諸點に於ける女の『より大なる動物性』に味方する、奇矯な動物學者、アルブレヒトの議論(Correspondenz Blatt Deutsch. Gesell. Anth., 1884)は眞面目に論ずる必要がなす。

腦

腦の性的相違に關する見解の歴史は科學的年鑑中の痛ましい頁を成して居る。それは偏見、假想、

迷誤、餘りに性急な推論等に満ちて居る。非科學的なる者は此の問題に對し或る好尚を持つた、而して科學者はその位置の研究に近附いた時科學的精神を失つたように思はれる。多くの聲價は此等の柔かい蜿蜒たる回旋狀の褶に徒消された。腦の比較的に落付いた冷やかな研究が何等の程度で普遍的になつたのは最近の事に過ぎない、今日になつて漸く腦の性的相違に關する全く充分に確證され、事實が容易く概括され得るのである。

歐羅巴種族にあつて(外の種族に關する我々の知識は足りないので其等は姑らく措き)男に於ける絶對的重量が女に於けるよりも可也大きいといふ事には何の疑ひもない。次に掲げたのは多數の腦に付いて研究してゐる様々の國の重なる研究者の或る者によつて達せられた平均數である――

ワグネル……………	男	一四一〇	瓦	相違
	女	一二六二		
ヒウシユケ……………	男	一四二四		
	女	一二七二		
ブ	男	一三六五		
カ……………	女	一二二一		
	男	一五四		

トピナル	男	一三六〇	
	女	一二五〇	一一〇
ビショツフ	男	一三六二	
	女	一二一九	一四三
ボイド	男	一三五四	
	女	一二二一	一三三
マヌーヴリエ	男	一三五三	
	女	一二二五	一二八

(一)此等の數字はロンドンのマライルボン病院に於けるボイドの有名な研究から得た。ジエームス、クリツチトン、ブラウン卿は發狂者の腦を以てして極めて類似した結果を得た。殆ど千六百に近い腦の検査から彼は男性に於ける平均が千三百五十一グラムであり女性にあつては千二百二十三グラムである事を發見した。又男性の平均は、男に於ける頭痛の重大なる性質のために、正氣の者に於けるよりやゝ低く、従つて發狂にあつては兩性は正氣に於けるよりも多く腦重量上相互に接近して居る。クリツチトン、ブラウン『狂者に於ける腦重量に就て』腦、第一——第二卷、クラファム、論文『腦、發狂者に於けるその重量』心理的醫學辭典、ティツグス『腦の重量と發狂者に於ける其の部分』全精

神病學雜誌(獨)四十五卷、千八百八十八年、一及二號を見よ。

歐羅巴にあつては男が女よりも絶對的により大なる腦を持つてゐる事は明かである。此の點には少しも疑ひがない。たゞ次の點が難物であるのだ。即ち男は女よりも相對的により大きい腦を持つてゐるか？我々は最初相對的に我々が何に腦を比較しようとして居るかを決定しなければならぬ。高さは通常比較の最も便宜なものとして提出された。脚を無視して唯だ體の高さ丈けを考へる事は、トピナルの云ふ如く、よりよい事であらう、が然し私の氣付いて居る限りでは、此れは決してなされない。一住民の平均高さを全く精密に確める事は困難でない、又我々は腦を身長との關係に導き入れた時立派な査定に幾分接近したのだといふ事も明かである。身長に比較すると、男は尙ほ女よりもやゝ重い腦を持つてゐるといふ事が殆ど常に發見される。例へば、ボイド並びにビショツフの平均數に依ると、男の腦重量は女のそれに對し百對九十であり、英國に於ける男女の平均身長は百對九十三である、であるから、身長を勘定に入れると、男は女よりも(大體に言へば、一オンス以上位に達する)僅かだが明瞭な腦の超過量を持つて居る。正しく同じ比例上の相違は佛蘭西に於ても發見された(一)。此のオンスの多少に關し一人の有名な腦解剖學者は『それ故に腦の大きさ及び重さに於ける相違は明かに根本的性的相違である』と斷言した、そして同じ確言は屢々他の者によつて繰返された。

(二)此の點に關する論議はトピナルの一般人類學、五百五十七頁中に發見されるであらう。然し乍ら考慮を重ねる時、身長に於ける性的相違に比較して腦質量に於ける性的相違を査定する事は

極めて便宜でもあり、又殆んど正しいと云つてもよい位であるけれども、女には全く公平であるといふわけには行かないと云ふ事が明かになつて来る。男は唯だ女よりも高い許りでない、彼等はより大きくもある。若し人間がその現在の高さを保留してゐて、同じ容積を常に圓柱に形造られたならば、男性の圓柱は通常女性の圓柱よりもより大きい周囲を持つであらう。我々が第三章に見出した通り、女には殆ど常により大きい唯一の寸法——腿の周囲——がある。従つて女性的圓柱の量を男性的圓柱のそれに比較する事の不平等である事は明かである、何故ならば男性的圓柱の比例數と均しくするために毎呎腦組織の絶對的により大なる量を必ず持たなければならぬからである。かの添加的オンスは單に男を女と全く平等の位地に置くために充分必要である。

ブレークマンは同じ身長 of 男女の腦重量を比較する事によつて此の困難に打勝たうと試みた(一)。けれどもラビツクが正しくも指摘する如く、そつといふ遣り方は博物學者を愕然たらしめず措かない、性は扱て置き、一、六〇米突の平均高さの女は同じ高さの男と同一ではない、通例以上である群と通例以下である群とを比較する事は不正當である、そして偶然同じ高さであつたからとて相異なる種の二匹の動物を比較する事と似てゐるであらう(二)。

(一) Biometrika, Vol. iv, 1905

(二) Bull. soc. d'Anth. 1907, P. 344 此の問題は千八百八十二年といふ可也の前に巴里人類學協會で論議され、ル、ボンは同じ重さの少年少女を選べば充分であると確言し、又マヌーヅリエは我々は一つ

の性の總數を考へなければならぬと斷言した。

身長標準の明瞭な杜撰は其れ故に多數の卓拔した頭蓋學者——クレンディング、テイードマン、ライド、ワグネル、ワイスバツハ等——をして腦重量に於ける性的相違を體重に對する彼等の比に従つて査定する方法を採らしめた。此れは明かにより論理的な方法である。此れの殆ど變らぬ結果は、體重に比例して、女は男よりも、幾分大きな腦を持つてゐるか、さもなければ殆ど同じ大きさ位の腦を持つてゐるかしてゐる事が發見されるといふ事である。此れは多年前パルシアツプ、テイードマン、サーナム、及び英國、佛蘭西、獨逸に於ける其他の人々によつて確證された(一)。更に近くはビショッフはその腦に關する重要な精確な著書中で、同様に女の腦重量は男のそれに對して九〇對一〇〇割合であり、女の體重は男のそれに對し僅か八三對一〇〇であるといふ事を示して居る、ヴィーロルトも又體重に比して女はより大きい腦を持つといふ同じ事實を例證した(二)。體重に關して——體長に對するそれよりも論理的な關係——女の腦が少く共男のそれと同じ大きさであり、又通常はより大きいものであるといふ事は證明されたものと考へても宜からう。

(一) 例へば、テイードマン、Phil. Trans. Royal Soc., 1836 vol. cxxvi, p. 306 パルシアツプ著、腦に關する研究(千八百三十六年)等を見よ。

(二) テイ・エル、ダヴルニュー、フォン・ビショッフ、「人間の腦重量」ボン、千八百八十年、エーチ、ヴィーロルト『人間の身體器官の質量増進』Archiv für an. u. 189) 及び同著者の「解剖學的表」(千八百

九十二年)中の表。トビナール(一般人類學、五百三十頁等)も又此問題を論じた。顯著な統計學者マツセダグリアも又此の問題を研究して女の腦質量は男のそれよりも相對により大であるといふ結果を齎らした。(Atti della società Romana di Antropologia 1906, Fasc. III.)

然し乍ら我々は今も尙ほ男女に於ける相對的腦質量の明確公平な叙述に到達してはゐない。腦重を體重に對するその比例によつて査定する事は若し我々が極めて多大な平均數を慎重に取扱つてゐるならば充分満足的なものである。然し我々は比較的固い要素を極めて不安定なものと比較してゐるのであるといふ事を記憶しなければならぬ。有福に暮らす、育ちの好い、そして比較的懶惰な階級の者は營養不十分な過勞な階級の者よりも遙かに重い。體と腦との間の關係は工場に死ぬ個々人にあつては通常の住民中にあるものと全く相違してゐるであらう。そこには唯だに個人と個人との間の相違がある許りでない、同じ個人にも極めて著しい變動があるのである。緩漫な衰弱症が過ぎた後死ぬ營養のよい個人は彼がその病氣の初めに死んだ時よりも相對的にすつと大きな腦を持つらしい。腦は、最も安定な組織ではないけれども、相對的には安定であり、骨よりさへより安定である、一般體重の極めて大なる部分を作る脂肪は、身體中で最も不安定な組織である、それは過度緊張又は營養不十分の有機體からの最初の要求で使ひ果さる、ヴォワの解剖に依ると、脂肪の九十七パーセントは飢餓の完成で消滅したけれども神經組織はその重さの三、二パーセントを失つた丈けである(一)。我々は腦質量を身長と比較する時一つの迷誤に陥つて居るのであるが、然し我々は兎に角も全く不變なる要素を比較して居るのであり、從

つて我々の謬りは全く不變である。我々は腦質量を體重と比較する時より健全なる根據に基づくのであるが、然し我々の二つの要素の一は他のものよりもすつと大なる程度に迄變動し、より不變ならず又その裏をかくにより大なる注意を要する謬誤を生むのである。

(一) 例へばワラーの「生理學」にある、饑餓の影響の下の様々の組織の相對的喪失を示す圖表を見よ。

腦質量に於ける性的相違を體の大きさに對する比例によつて査定する事にはもう一つの重大な又より不斷な誤謬がある。女は我々の既に見た如く、男よりも脂肪が多い。成人せる女には乳房や腕の廻り、及び殊に腹部やその廻り、臀部、腿に脂肪を堆積させる傾向、男にあつては唯だ程よい程度に存在するのみである一傾向がある。我々の見た如く、ピシヨツフは女に於ける脂肪の男に於けるそれに対する比例が二十八、二對十八、二であり、又成人せる男に於ける筋の脂肪に對する比例が百對四十三であるのに成人せる女にあつてはそれが百對七十八であるといふ事を發見した。彼の結果は二人の典型的な營養のよい主體に基づいたに過ぎないけれども、女の脂肪を蓄積する一般傾向に關しては少しも疑ひがない。それは或る人が女性の造成的變化の傾向——費消するよりも寧ろ獲得する傾向——と呼んだ所のもの一部分である、そしてそれは更に進んで男が四十歳頃はその最高重量に達するのに、その成長が男のそれよりも明かにより早い時期に終る所の女は、五十歳頃になる迄はその最大重量に達しないといふ事實によつて例證されるのである。扱て脂肪は比較的非生命的な組織である、それは筋に比較して、極めて



僅かの神経分布しか必要でない。其れ故に體重に關する脳相違を研究するに當つて、比較的に非生命的な組織の彼等の超過を酌量しない事は、女に對して公平とは云へない(一)。マヌーヴリエは女の體の此の活動的器官の質量が男のそれに對し最上七十對百であると測定した。此れは大凡の測定數に過ぎないが、然し如何なる場合にも女に於ける脳組織の相對的超過は極めて大きい、といふのは腦重量に於ける性的比は我々の既に見た如く全く確かに九十對百と指定してもよいからである。

(二) マヌーヴリエ教授は有名な巴里の人類學者であり、一般に女の解剖學的長所の有力な擁護者であるが、此の事實に特に注意を引いた。(エル・マヌーヴリエ、「腦の量の解説に就きて」*Mém. soc. d'Anth. de Paris*, 1885. 及び論文「腦」*生理學辭典*、第二卷。)

腦質量の性的比例を査定する二つの普通の又最も便宜な方法——體長に對する比と體重に對する比——は斯くして兩方共に謬つてゐるものであり、又兩方の場合に於つてその誤謬は不公平に小さい腦質量を女に割當てるよう導くのである。又一方には平衡を回復する傾きのある或る迷誤があると考へても宜からう。そういふ迷誤の源泉は男の嵩張つた骨格にあると考へても宜からう、が然し此れは何か料度し得べき程度迄事實であるとは思へない。例へば若し我々が頭蓋を考へるならば、男の頭蓋の重さの女のそれに對する平均關係は若し(モルセリの數字を承認するなら)百對八十六である、大不列顛協會のバス集會の多數な富裕な會員の重さの性的割合は百對七十九であつた、小さい大さの白耳義種族では(クトレーに依ると)百對八十七であつた、であるから此等容積の二比例は甚だしく相異り乍ら(我々の豫期

する通り)而も骨質量の性的比例の廻りに搖動して居るのである。更に又なさなければならぬ一つの正誤が實際存して居る、それは男に脳組織の相對的優越を回復するため何事かをなす正誤である。性を離れて、又(兎に角も哺乳動物間では)種をさへ離れて、體容積の増加は量に於て相對的により少なる腦の増大によつて伴はれるべき全く打ち絶えぬ規則的な傾向を持つて居る。長身の男は短身の男よりも相對的により小なる腦を持ち、長身の女は短身の女よりも相對的により小なる腦を持つて居る、そして最も短身なる女は最も長身なる男のそれよりも相對的にすつと大きい腦を持つて居る(一)。此の法則は大きくはない、やつとニパーセント位であり、又恐らくはより小さくさへあらうと思はれる一正誤を包含して居る、ピシヨッフとテイツダスは腦が男に於けるよりも女に於てより大なる程度迄高さと共に増大するといふ事を示した。然し乍ら此の考へは腦比例の問題を錯綜させ、女に於ける脳組織の相對的優越の評價を幾分減じさせるに役立つて居る。腦を身長及び容積に對する比によつて測定する事に含まれた諸々の迷誤を避けるためには未だ如何なる満足的計劃も企てられなかつた。大きな骨(大腿骨のような)に對する又は心臟に對する又は或る特殊な筋に對する頭蓋容積の關係は提出された諸々の方法中にあるのである(二)。此の點では將來數學的人體測定のため努力すべき廣大な餘地が存して居る。現在では若し我々が通常の諸方法に於ける謬誤の性質と方面とに關し一般に同意して居れば足りるのである。

(一) ピシヨッフ、プロカ、トピナール等は此れが身長比例、容積比例、將た又兩方孰れにも有効である事を示した。例へばピシヨッフ著「腦重量」三十二頁、トピナール著「一般人類學」五百三十三

頁、ジェー・マーシアル、「腦と身長及び體量との間の關係に付いて」(解剖學及び生理學雜誌、千八百九十二年七月)を見よ。

(二) 腦の大腿骨に對する關係はマヌーヴリエによつて提出された比較の基礎である。その効力はラビツク(人類學協會報、巴里、千九百七年、三百十三頁)によつて疑はれ駁された、彼は聚合的の神經中樞の大きさを決定するのは運動の夥多でなくて複雑であると指摘して居る。

其れ故に我々が重なる夫々の誤謬を除去した時、女は男よりも相對的に夥多なる神經組織を持つてゐると結論せざるを得ないといふ事は疑ひない。此の事は女が男以上に何か自然的優越を持つてゐるといふ事を必ずしも意味しては決してゐない。絕對的に大きい腦が大なる程度迄大きな筋組織の所領であるといふ事實は明かにその堅固と健康とに歸して居る。良好な筋的基礎に根づいてゐない相對的に大きい腦は必ずしも神のよき賜物ではない、それは往々知的仕事に有効に向ふ事が六ヶ敷い、それは働くに制し難く又餘り容易すぎる、それは爆發的突發に陥り易いかも知れない、癲癇患者が相對的に大きい腦を持つてゐるといふ事は幾分の意義ある事實である(一)。世界の立派な仕事の大部分は大きい(尤も身體の容積に比較して、過度に大きくはない)腦によつてなされた(二)。

(一) 例へば、クラファム、論文「腦、その重量」心理醫學辭典。

科學及び藝術の兩方面に於ける或る天才の人々が絕對的にも相對的にも非常に大きい腦を持つてゐたといふ事は疑ひない。然し絕對的にも共に大きい腦は最も不確かな價値の所有者であるといふ事も疑は

しくない。六つの最も大きな記録された男性の腦を例にとるならば(據る所の曖昧な其等を特に研究しないで除去して)、我々は一つ(ピシヨッフによつて保證された)が二二二瓦程の大きさであり、而も全然顯著ならざる個人に屬してゐた事を發見する、次のものはそれよりもやゝ小さい白痴者の腦でハンツ州立養育院に於レヴィンジに検査され、通例の堅固なものであると云はれて居る、次には偉大な露西亞小説家のツルゲネフが居る、彼は丈が高いが非常に大きい男ではなく、二〇一二瓦の腦を持つて居る、第四番目のものは千九百二十五瓦あり、普通の勞働者に屬し、ピシヨッフによつて検査された、第五番目は千九百瓦で、煉瓦職のものである、次は千八百三十五瓦で、有名な動物學者キユヱの腦であつた(一)。知られて居る女の六つの最も大なる腦(トビナールによつて起された如き)は次のようである、即ち第一は千七百四十二瓦の重さある氣違ひ女のそれであつて、彼女は肺病で死んだ、彼女の場合はスケーによつて記された、次は千五百八十七瓦のものであつて、これは六十三歳で死んだ正氣の女に屬して居る、次も同じ重さのものであるが、これは發狂した女に屬し、ウエーク・フィールド養育院に於けるクラファムに記された、次は千五百八十瓦ある二つの場合で、共に正氣の女であり、ボイドに記されて居る、最後のものは又千五百八十瓦のもので、格外な才能を持つてゐたと云はれ、又發狂の徴は少しも示さなかつたと云はれてゐる醫學學生に屬してゐるが、彼女は最後の試験に落第したと信じて自殺して果てた。大きな腦は危險な所有物である、そして——少く共此の證據が示す範圍内では——男に於けるよりも女に於て尙ほ一層危險な所有物であるらしい。大きな腦は屢々活動力ないか、煩いあるかして

居り、又それが要求する豊富な血液供給を受け損ふ、小さい、よく整つた、そして活動的な脳に好意を以て言はれてゐる事は多い。偉大なる思想家が大きな脳を持つといふ事は有り得るが、然し活動界の顯著な人々の間では小さな脳が大きな脳と全く同じ程屢々見出されるように思はれる。

(一) 尙ほ私が上記の表を書き集めて以後、此處に擧げたもの、何れよりも大きい脳が和蘭に於てジ・シー・ヴァン・ワルセム (Neurolog. centr. bl., 1st July 1899) によつて記載された、即ちそれは癲癇性は又千九百三十五瓦の重さある脳を記載した、それはその判断力とその行爲の實直とのため尊敬されたが、依然として微賤であつた一人の男のそれであつた。ツルゲネフの脳の重さの正確であるかといふ事は理由もなく疑問にされた。

兩性に於ける脳の發達の道程を考へる事によつて、女に於ける神經組織の相對的優越の意義に幾分の光明が投ぜられて居る。出生時少年の脳は少女のそれよりも大きい。ポイドは各々の性の約四十の場合の検査から、平均重量が少年にあつて三百三十一瓦、少女にあつて二百八十三瓦、四十八瓦の相違である事を發見した、是れはトビナールによつて(又ルーディングルによつても)殆ど平均相違として容認されて居る、然し乍ら更に最近多數の初生兒を量つた結果を記したミースは、七十九人の少年にとつてその重量が三百三十九瓦であり、六十九人の少女にとつて三百三十五瓦であり、僅か九瓦の相違に過ぎない事を發見した(一)。ポイドの測定は少年に體重に對する脳の超量を與へて居る、より多大なる經驗に基

ついたミースの數字は、少女に於ける腦組織に輕微の超量を與へて居る。私は大抵の觀察家が初生の男子の脳は女子のそれよりも明かに大きいといふ事を發見したといふ事實は極めて簡単に説明出来ると思ふ。異常に大きい脳を持つた小兒即ち、出生が最も死に至らしめるらしい小兒——はより多く普通に男子であり、従つて初生兒に對する脳の男性的平均を過分に上げ易い、少女は比較的此の危險から自由である。

(1) Wien, Klin. wochenschrift, 10th January 1889.

脳は出生後數ヶ月間甚だしく生長し、又人生の最初の數年間極めて急速に發達する。三ヶ月の年齢には腦は體の重さの五分の一程であるけれども、成人にはそれは單に三十三分の一をなすに過ぎない。六ヶ月の齡迄に(ポイドの全く大きな數字に依れば)腦の絶對的重量は少女にあつて倍加し、少年にあつて殆ど倍加するに近い、七歲迄に腦の重さは少女に於て四倍し、十四歲前にそれは少年に於て四倍する幼年時代に於ける女性の腦の早成は其れ故に極めて著しいのである。少女に出生時の腦の比較的小さい量を與へて居るポイドの數字さへ、四歲及び七歲の間では少女が高さに對して少年よりも大きい脳を持つてゐる事を示して居る。四歲及び七歲の間の少女は既に彼等の最後の腦重量の九十二パーセントを獲得するけれども、同年齡の少年は八十三パーセントに達するに過ぎない。少女の脳は七歲以後はほんの僅かしか成長せず、二十歲頃迄には實際上成長を止めるが、男の脳は十三歲以後はその最大容積に達しない。初年に於ける腦の急速な成長のために、兩性が高さに對して腦の最大量を持つのは幼年時代

にあり、就中二歳乃至四歳の間である。二十歳以前の脳の重さに於ける早熟的な又似而非な最大量は——三ヶ國に於いてポイド、ピシヨッフ、及びプロカによつて女性の脳にあつて重くは排他的に發見されて居るが、トビナールの指摘する如く(一)此の早い年齢に於ける女の脳成長の早熟と範圍とが男よりも大なる死の機會に彼等を曝らす(丁度少年が出生時より多く曝らされる如く)といふ事を示すように思はれる、何故ならば初年に於ける脳統計は人生の競争に於て失敗者であつたかの社會の人々に専ら基づいてゐるといふ事を常に記憶しなければならぬからである、我々は彼等から成年生活に達する社會の成功せる人々に言及する事は必然出來ない。二十歳後間もなく腦の平均重量は下り始める、男にあつては五十五歳後迄著るしい減退はない、兩性共に此年齢以後やゝ急速の下落があり、又老齡にあつては男は女よりも相對的により大なる腦損失を受けると考へるべき或る理由である。

(二) 一般人類學、五百五十七頁。

女に於ける腦のより大なる量は——我々が正しからぬ比例標準によつて引起された迷誤の除去以後も存する事を發見したものであるが、腦に對すると同様身體の一般的比例にも存する女に於ける成長の早熟とより早い停止とに相須つて居る。高い人は小さい人よりも絶對的により大なる腦を持ち、平均して最も高い又最も大きい人は最も大きな腦を持つが、然し彼等の腦は一般に彼等の身體と同じ比で増長しはしない、ピシヨッフ、プロカ、及び其他の人々の數字は男女兩方共にあつて身長及び體重が増加する如く、腦の比例が減退するといふ事を示して居る。腦組織の相對的に大きい質量は女が一般の短身の人

及び小兒と共にする一特長がある。

今や腦の様々な部分の關係に於ける性的相違の問題に向ふべき時である。此れをなす時我々は小腦に對する又巴魯里橋及び終腦と呼ばれる脊髓の上部に對する大腦の二半球の關係を考へなければならぬ。大腦にあつては我々は前部にある前頭葉、後部にある後頭葉、及び中間の顛顛顛頂部間を區別しなければならぬ、そして我々は第一に外膜の此等の最後の三細別を考へよう。

腦に於ける性的區別は全體として考へたその器官に於けるよりもその諸部分の相互に對する關係に於てずつともつとよく印付けられてゐるといふ事がメイネルトによつて云はれた。然し若し之れがそうでも、それは大腦葉の割合の性的相違に關する諸々の腦解剖學者の見解が近來倒まになつた奇妙な有様によつてよく例證されはしない。數年前、胎兒生活の初期からさへ大腦の葉には著るしい性的相違があり女に對する男の大なる知的優越を示す傾きがあるといふ事が、非常に力を籠めて、殊に獨乙に於て確言された。ブルダツハは男がその前頭葉の發達によつて女と區別されると考へた、ヒュシユケは千八百五十四年に女は *Homo parietalis* (顛頂的人) であり、男は *Homo frontalis* (前頭的人) であるといふ結論に達した、ルーディングルは千八百七十七年に男の前葉は總ゆる點で女のそれ等よりも廣大であるといふ事を發見した、そして性的相違は、彼に依ると、胎兒生活中分明であるといふ、彼の弟子パツセーは千八百八十二年といふ最近にもつと變更した形に於ては、あるけれども、此等の結果を確證した。此等の結論を説明する事は全く可能である。個々人の不同は極めて重大である、此等の結果の多くは極めて

少數の組の腦に基づいた、其の上に腦といふものは検査するに極めて困難な器官である。そして最後に前頭部は總ての高尙な知的作用の座であるといふ事が常に假定されてゐたので、男に前頭の卓越を與へた唯だ一つの結果は確らしいと看做される事が出来た。

今日最も權威ある腦解剖學者は性的腦區別に關する如何なる一般的結論を演繹するに當つてもすつともつと慎重である。例へばワルデイエルは相異なる性の雙子及び三胎兒の腦を比較するといふ健全な方法を探つて、そこに何等一定不變の性的相違がない事を發見して居る。男性の裂溝及び回旋狀の褶は往々女性の其等よりもよく發達して居るが、然し此れは決して不變ではなく、又それが起る時さへそれは恐らく男性のより大なる大さに因つて生ずるより早い發達に基づくのであらう(一)。

(一) ワルデイエル、Zeitschrift für Ethnologie, 1908, p. 262.

前頭葉が女にあつて不完全であるといふ見解を容認する事は最早可能でない。プロカは約三百六十人の腦を非常な注意と方法の統一とを以て検査した、彼の結果は全大脳半球を干とすると、男に於ける前頭葉の比例が四百七十二丈けであり、女にあつては四百三十一丈けであるといふ事を示して居る、それは干に於ける一の女に味方する相違に過ぎないが、然しそれは少く共實際上の性的平等を示すに充分である、年齢に依つて此の形態を解剖する時、初めの成年時には男は女以上の或る前部の優越を持つけれども、此の位置は老年に明かに逆轉するといふ事が發見される(二)。發狂者間では、クリツトトン、プロウンは前頭葉の殘部に對する割合が女に於てより小さくなくて、やゝより多くさへあるといふ事

を示した(二)、約四百五十人の主體を取扱つて居るクラファムの數字は兩性に於ける實際上の平等を示して居る、メイネルトとテイツゲスは發狂者に屬する可也な數の腦を取扱つて、共に前頭葉が女にあつてより大きい事を發見した。此の點に特に關してなされた最も信頼出来る精確な測定は恐らくエベルスタルレルのそれであらう。彼は成人(百七十六人の男性と九十四人の女性)に屬する二百七十以下ならぬ腦葉を非常に注意して測定した、そして彼はローランド氏溝の上端が兩性に於て相對的に同じ位置を占めて居り、そこにある丈けの相違(僅か〇・五)が女に於ける前頭葉の方にある事を發見した。極めて慎重な又信頼出来る觀察者、カンニンハム教授によつて得られた結果はエベルスタルレルのそれと正しく一致して居る、彼が少しでも性的相違を發見した範圍内ではそれは女の前頭葉の方に味方してゐた。彼は又ローランド氏溝の下端が兩性に於ける腦表面上相對的に同じ位置を占めてゐるといふ事や、又如何なる成長期にもその裂溝には性的相違と呼ばれてもいゝものが見出されないといふ事を確めた(三)。ローランド氏溝が男に於て、相對的にも絶對的にも、より長いといふ事はパツセー及び其他の人々によつて確言された、絲を注意深くその裂溝の唇の間に挿入し、總てその彎曲に隨ふようにして此の裂溝を測定して、カンニンハムは多數の腦を検査する事によつて、(出生時を除き)そこに少しでも優越がある限り女性の裂溝の方に或る優越の存するといふ事を發見した。

(一) トピナル著、一般人類學、五百八十頁。殊にマヌーヴリヒ、論文「腦」Dit de Physiologie.

(二) 腦、第二卷、六十二頁——六十四頁。

(三) デー・カンニンハム、『大脳半球の表面解剖に對する寄稿』王立愛蘭學院の「カンニンハム研究報告」第七號、千八百九十二年。

女は、そこに少しでも性的相異のある限り、男以上にある前額の優越を持つといふ事が最近明瞭になつたと同時に、前頭葉に何か特に高尚な機能を宛行ふ事には眞の根據のないといふ事が初めて明瞭に認識された。此の見解は少しも確然たる理由もなくして極めて廣く容認されてゐた。そして腦局限の正確な知識に於ける近代的進歩の先驅者であるヒットチツヒさへ、前頭葉に論理的思惟の座を宛行ふ事によつて彼の權威の重みをそれに與へたのであつた。此の古い觀念を説明する事は六ヶ敷くない、人間の心には『下』『後』『底』とよりもつと威嚴のある考へを『上』『前』『頂』と結び付けるといふ深く根ざした感情がある。前頭部は正しく此の含蓄的假定と符合する、それは確かに最も上にあり、前面にあり、頂點にある身體のかの部分である、であるから最高の智的作用に對する中樞が四足獸に關する頭蓋骨學者が其等を置いたゞらうと我々の殆ど信ずる事の出来ない位地に置かれたといふ事は驚く程の事でもない、將た又我々が後頭葉は視覺作用のような高い作用に密接に關係してゐるといふ事を信ずるようになったのは極めて近年の内に過ぎないといふ事も驚く程の事ではない。通常前額骨の前部にある葉と呼ばれる腦の一番の前部は電氣刺戟に殆ど確然たる反應を與へない(尤も前頭部が電氣刺戟に感じ易くないといふ事實は智的作用に於けるその重要さに反對する論議では少しもない)(一)。そして前頭部を如何なる特異な方法で智的作用と結び付ける事にも確乎たる實驗的根據がない。其上に、前頭部は相對的に類人猿類に

あつて極めて著るしく發達して居る、而も彼等に於ては智的作用が非常に發達して居るとは通常着做されてゐない。將た及前頭葉は相對的に胎兒に於けるより成人に於てより多く發達してはゐない。そして尙ほそれが何つちかと云ふと男に於けるよりも多く發達してゐる女にあつて、前頭部の關係は(カンニンハムの結果が示す通り)男よりも類人猿に形により多く近く接近して居る、尤も一つの重要な點ではカンニンハムの指摘する通り、男は此の部の關係に於て女よりも近く猿に接近して居る、即ち顛頂骨によつて蔽はれた前頭葉の女に於けるよりも男に於て相對的により小であるのである。尙ほ現在では腦の前部が特に高い心的作用と結び付いて居ると確然斷言する事は出来ないと同時に、又それを確然否定する事も出来ないといふ事を附言しなければならぬ(二)。それを極めて信じ難からしめる一原因は白痴と愚鈍者とによつて與へられた全體としての腦に對する前頭葉の高い百分比である、クラファムの數字ではそれは狂氣の最も智的な諸形式によつてさへ與へられたそれに對し殆ど劣らない。今や腦の顛頂部はより高い智的作用に於いて大なる又恐らく優れたる役割を勤めるといふ事が一致されて居る。男の腦が類人猿類のそれと異つてゐるのは主に顛頂葉の發達によつてである、そして顛頂葉の下部の増大して表面は多くの天才に於て認められた。心的作用に對する前頭部の影響に關しては何等一致する所がない。然し前額骨前部の範圍の障害が精神的又は肉體的徵候によつて少しも續かれないといふ事は屢々あらうけれども、此處の損傷が性格の變易及び顛倒によつて續かれる場合も又あるのである。フェリリアーは多くのさういふ場合を蒐め記した、又ロバート・ジョーンズは前額部に對する烈しい損傷がより

高い抑制の喪失によつて續かれたといふ場合を記してゐる(三)。此問題は依然として未決のまゝである。尤も脳の全體が心的作用に係り、又我々が最も詳細に互つて經驗的知識を持つて居る膜の中央の感覺運動部が確かに決して最少でないと思像する事は最も合理的であるように思はれる。

(一) シェリングトン及グリーンバウムが指摘した通り、恐らく此の分野に於ける更に一層の進歩は實驗室に於ける刺戟實驗によるよりも寧ろ臨床的及び顯微鏡的研究の根氣よい共同によつてなされるであらう。

(二) 然し乍ら、此の例は終ひには狂氣になつたけれども、それ迄は通例の生活を送つてゐた一人の女に付いて報道された(デイド、Rev. New-rol, 千五百一年、四百四十六—四百六十二頁)、彼女にあつては前頭葉が極端なる程度迄萎縮してゐて、顯微鏡的研究は此の萎縮が後天性のものでなくて先天的のものである事を示した。

(三) エフ・ダヴルユー・モット及びロバード、ジョーンス、神經學記録、第三卷、千九百七年。

此等の中樞は大脳の顛頂部に集中して居る、そして其等が男に於て優れて居るといふ事は今や疑ひないように思はれる。此の結果はプロカ(尤もプロカの數字は男に於ける此の部の唯だ輕微な優量を示して居るが)、メイネルト、ルーディンゲル、クリツチトン・ブロン、ティツゲス等によつて得られた。

顛頂部が格別の智力を有する人々にあつて極めて多く發達してゐると想像するには幾分の理由があるのである。例へばルーディゲルは十八名の顯著な人々の脳を検査して、彼等總てにあつて顛頂葉が前部の

方へ非常に發達してゐる事を發見した。猿にあつては顛頂部は前頭葉及び後頭葉兩方共の侵入のために小さいのである(一)。

(一) カンニンハムは斯う言つて居る。人間の腦に於ける此の顛頂部發達が四肢——就中上肢——の教練された運動の獲得及び腦と手との間に存し、又種の進化上あゝも重要な一役を勤めたかの驚くべき行爲の調和と何か關係する所があるか何うかを考へる事は研究に對する興味深い分野であるであらう。——『表面解剖學に對する寄稿』等、五十九頁。

後頭葉が男に於けるよりも女に於てより大きいか何うかは幾分疑はしい。プロカの數字はそれが平均上相對的に同じ大きさであり、より早い成年時には幾分より大きく、老年にあつては幾分より小さい事を示して居る。クリツチトン・ブロンはそれが女に於てより大きい事を發見した、多くの權威者達は曖昧に言つて居るが、又はそれが男に於てより大きい事を見出す方に傾くかしてゐる。カンニンハムはそれが女に於てより大きい事を發見して居る。尙ほ哺乳類に於ける後頭葉の一般的傾向は減退する事である、それは類人猿にあつてより原始的な猿類に於けるよりも相對的に小さく、人間にあつては尙ほ一層小さい、又一方ではそれは益々廻旋様になる傾きがある、従つて我々はそれを萎縮の過程にあるものと看做す事は出来ない、ガンベツタの腦は——小さかつたが、後頭部の廻旋狀褶の驚くべき典型であつた腦の脈管分布で重要な事柄に於ける性的相違は尙ほ未だ殆ど注意を受けてゐない。然し乍らジェームス・クリツチトン、ブロン卿及びシンドン・マルティン博士は少し許りの觀察をなした。彼等は腦に

分布する内部頸動脈及び脊椎動脈の合一せる直徑が、一緒に測定すると腦質量に比較して男に於けるよりも女にあつて寧ろより大きいといふ事を發見した。であるから女の腦は男の腦よりも比例上より大なる血液供給を受ける、そして後に知る通り彼等の血液の特性を表はすものである比較的缺乏に（彼等が若しそうでなければ悩むであらう如く）悩まないであらう。同研究者達は内部頸動脈が男に於てやゝより大きく、脊椎動脈が女に於てやゝより大きい事を發見した（一）。此等の結果は少數の主體に基づいてゐた尤も彼等は既に發表された諸結果と一致してゐるらしい、その譯は内部頸動脈は我々が男に於て大きい事を發見した顛頂部に分布するけれども、脊椎動脈は主として唯だに本當に大きいか曖昧な後頭部計りでなく、又女に於て大きい様々の其他の *Posterior* (腦の三大中央神経節の稱) に分布するからである。

(一) ジェー・クリツト・ブラウン卿、「教育に於ける性」大不列顛醫學新報、千八百九十二年五月七日。

若し我々が大脳の區分に於ける性的相違の思惟から大脳、小脳、及び腦の髓と中軸部とへの腦總體のより大なる又より明白なる區分に向ふならば、性的相違の諸點は幾分より明瞭になるのである。信頼し得る證據は大體に於て小脳が久しは前にゴール及びキューヴィヤーによつて述べられた如く、相對的に男に於けるよりも女に於て明白により大であるといふ事を指して居る。プロカの數字は輕微な程度に髓及び小脳が然し殊に後者が女にあつて相對的により大きい事を示して居る。フィリップ・レイ博士は

「非常に丹精してプロカの數字の材料を作り上げた人であるが、殆ど例外なく大脳以下の總ての中樞が女にあつて相對的により大であるといふ事を發見して居る（一）。ボイドの數字は小脳が七歳と十四歳との間の男性にあつて全大脳に對し百三對千であり、三十歳と四十歳との間では百六十對千であり、女性にあつてはより早い時期にはそれが百五對千、より後の時期には百八對千であり、髓は男性にあつてはより早い時期に幾分より大きく、女性にあつてはより後の時期により大きい事を示して居る。マーンは腦及び其の諸部分の重さに關する重要な一論文に於て、小脳の大脳に對する比が（ボイドの數字から）成人せる男性にあつては一對八、十七、成人せる女性にあつては一對八である事を發見した、彼は更に進んでボイドの數字から高さの每一吋に對する諸部分を作り出した――

男		女	
例數	年齡	全腦髓	大脳
103	30-40	725	631
			77
			15
85	30-40	695	611
			76
			15

(一) ベー・レイ、「腦の重量」*Revue d'Anth.*, 1884, P. 198.  
 (二) ジェー・マーン・シアル、「人間に於ける腦及びその諸部分の重量と身長及び體量との關係に就て」  
 (一部分ボイドによつて千八百六十一年、*Philosophic Trans.* 中に記された諸事實に基づき、一部分ボ



イドの原作<sup>イ</sup>から、又一部分ケーンアルの要求でボイドによつて作製されたより充分な表から）解剖學及び生學雜誌、千八百九十二年七月。

此れは男が高さに比較して女よりも大きい大脳を持ち、而もより低い諸中樞の區分では兩性が平等であるといふ事を示して居る。ライド、ピーコック、ワイスバツハ、メイネルト、及びピンツフは小脳の相對的割合に就て殆ど性的相違がないといふ事を承認した。尙ほ附言しなければならぬのは、一般に腦に付いて既に言はれた事と一致して、此の小脳の性的平等が高さに比較して實際上女に於ける小脳の優越を意味するといふ事である。腦の中央神経節の或るものは、テイツゲス及び其他の人々に依ると、絶對的に併びに又相對的に女に於てより大きい。數々の事實を纏めると、外膜は腦の内最も變異あり易い部分であるといふ事が明瞭に思はれる。小脳、様々の中央神経節、及び脊髄は大脳よりも不變であるらしく、年齢又は發狂を以てして同じ程度迄消耗しはしない。

女に於ける小脳が大脳に於けるよりも相對的に大きいといふ事は注目する價值がある。然し此の事實の意義は現在決して明瞭でない。小脳の諸機能に就ては今日では五十年前よりも積極的に確言さるゝ所が少くない。それは性的本能と嘗て想像された如くに關係を持つてゐるはしない。その破壊は麻痺も知解力の喪失も惹起しない。唯だ知られてゐる範圍内でそれが持つてゐるらしく思はれる唯一の確然たる機能は、或る程度迄筋肉運動を整へるといふ作用である。フェリエは内臓又は器官の感覺的印象が小脳に於て表はされるといふ事を言ひ出した。尙ほ小脳は特に成人の器官である、初生兒にあつてはそれは唯腦だ

腦體の約十三分の一かそれ以下かを成すに過ぎない、成人にあつてそれは約七分の一を成して居る。その發達は動物學的等位に於ける高さを指示する、そしてそれは人間にあつて相對的に最も大である。

腦に於ける性的相違は一番よくても極めて小さいけれども、脊髄の相對的量に於ける相違は幾分より著しいようである。總ゆる年齢を研究して、ブフィステルは少年に於けるよりも少女に於て、腦に對してより大きい脊髄があり、又身長に較べて脊髄は少年に於けるよりも少女にあつてより重い（尤もこれは常に少女にあつてやゝより短い）といふ事を發見した（一）。ミースは通例の主體にあつても狂氣の主體にあつても共に、女が男よりも生涯を通じてより大きい脊髄（腦に比較した時）を持つてゐる事を發見した（二）。大不列顛解剖學々會共同研究委員によつて得られた結果は（三）此れよりも更に一層進んで居て脊髄の長さに関しては、女が絶對的優越を示す傾きがあるといふ事を指示して居る。百十五人の場合を驗査して委員は脊髄が男性に於けるよりも女性に於てより低く降下する傾向のある事を發見した。脊髄の長さに對する比較上、脊髄は女性にあつてより長い、そして此のより大なる延長は一つの性的特性である事が出来る。女性にあつては又男性に於けるよりもより大なる不同があつた、女にあつては平均上絶對的により長いと同時に、測定された内で最も長い脊髄が一人の女にあつた（男に於ける最長の四六、五センチメートルに對して四七センチメートル）脊柱の平均長さに對する比較上、大後頭孔から囊の基底に至る迄、脊髄は男性に於けるよりも女性に於て僅かだがより長い、女性の脊柱は男性の脊柱に對し九七・一對一〇〇であつたけれども、女性の脊髄は男性の脊柱に對し九七、一對一〇〇であつた。此の女

に於ける脊髄的優越は(又幼兒の特長である、検査された總ての胎兒は長い脊髄を示して居る)、恐らく或る意義を有するのであらう。

(1) Neurologisches Centralblatt, sept. 1, 1903.

(11) Ctbl. F. Anth., 1899, p. 273.

(12) 解剖學及び生理學雜誌、千八百九十四年十月。

概括すれば、研究の結果女よりも非常に多くの量の神経組織を男に歸した古い見解が全く覆へされたと言つてもよからう。もつと後の見解——それによると、大さに比較して、神経的優越が女に屬する事、丁度總ての小動物が相對的に大きい腦を有するようなものであるが、その見解にはすつともつとよい根據が存して居るのである。此れは特に最低の神経中樞に就いて著るしい。諸研究家間の最近の傾向——ラビツク、ドナルドソン、ブレイクマン、及び其他の人々によつて表されたような——は、全神経中樞の相對的質量に於ける如何なる性的優越をも顧みるに足らぬものと看做す方に傾いてゐるようである。我々はそこでラビツクと共に斯う結論しても正しかるべきである『男女の身體及び腦の重量は恰も我々はその神経組織上同等な相異なる二動物に關つてゐる如く正しく相互に對し同じ關係であるのである』(1)。

(1) ラビツク、『體重に對する腦重量』Bulletin et Mémoires de la société d'Anthropologie (Paris, 1901, p. 328).

斯くして我々の現在の見地から腦の研究が何か重要な性的區別の示現に導くといふ事は殆ど云ふ事が出来ない(1)。將來諸々の事實がもつと精細に確められ、其等の意義が今日よりももつと明瞭になつた時の事は又別のものであるかも知れない。現在では腦の重要な事が大いに誇張されたといふ事實を主張する必要がある。その重要な事は疑ひもなく非常なものであるが、然し一般身體と腦の極めて密接な連絡に嚴として關係ある重要さである。我々はそれを身體の專制的支配者と看做し勝ちであつた、然るにそれが少しでも支配者である限りでは、それは明かに民主的な支配者である。腦要素は大部分行政上の便宜のために集められた感覺運動の委員に過ぎない。其れ故に我々は若し有機體その物を研究する事によつてその有機體の此等の腦の代表的表現を往々よりよく研究する事が出来ても驚いてはならない。

(1) ガスタフ・レントジウスは人間の腦に關するその極めて綿密な公平な研究に於て、性的相違の事を考へて居る(人間の腦第壹、百六十六—七頁、ストツクホルム、千八百九十六年)。彼はそこに何等特殊な又は特色ある性的相違はないけれども、我々は大體に於て、女の腦がタイプからの幾分より少ない偏倚、及びより大なる單純と規則正しさを示すと云つてもよいと結論して居る。大抵の偏倚は女の腦に於て見出されるかも知れないけれども、其等の發生の率は一般により小さいのである。尙ほ獨逸權威者の重なるもの、一人ワルデイエルはレントジウスと此の點で一致して居るやうに云つた。それは我々が後に様々の外の分野で見出す結果と一致する一結果である。

然し乍ら腦は現在では性的相違の研究に適當しない範圍であるけれども、既に知つた如く性的平等の

研究には極めて教へる所多い部分である。男は脳質量の相対的優越を持つてゐない、脳質量に於ける優越は、それが存する限りでは、女の側にある(一)、けれども此れは智的優越を少しも意味しない、唯だ短身の人及び小児の特色である。將た又そこには一方又は他方に於ける相対的劣等を意味する神経要素の著しい性的配置もない。男の顛頂的優越は恐らくさういふ特徴であらうが、然し既に知つた如く、此の優越は非常に著しからぬもので過去にはそれを女に歸屬さす事が出来た程である。脳解剖學及び腦生理學の現在の見地から言へば、如何なる優越性でも他の性以上に一方の性に歸屬さすといふ事には何の根據もない。佛蘭西人類學者中の最も偉大なる人で、その鋭い明快なる知解力が人間の研究にあつても多大の光明を齎したかのプロカは、女が自然的に又腦組織によつて、男よりも僅かだがより少い知解力を持つてゐるといふ事を多年前に(千八百六十二年の)信じた。此の見解は極めて廣く引用された、然しプロカの見解が其後もつと圓熟した知識を得て變じたといふ事は餘りよく知られてゐない、彼はその單に教育の問題である——而もそれは唯だに心的のみならず筋肉教育でもあつた事を了解しなければならぬ——と考へる傾向を持つようになつた、そして彼は若し彼等の自然的衝動に任せられるならば男女は野蠻状態に起る如く、お互ひに類似し合ふ傾きがあるだらうと思つた(二)。我々の現在の状態の智識では社會的及び實際生活の問題の解決に於ける諸要素として此等の考へを取入れるために認められるよつた科學的權威がないといふ事を明かに承認しなければならぬ。

(一) 如何なる程度迄此の同じ規則が下等動物に當嵌まるかを知るは興味深い事であらう。最も綿密

に研究された蛙に於て、ドナルドスン及びビシューメーカー(Jour. comp. Neurology, 1900 p. 300) は、フルビニに反對して、雌の蛙がその體重に比較して、雄より大きな脳質量を持つてゐるといふ事を示して居る。白鼠に關する處に最近の研究に於て(比較神經學及び心理學雜誌、千九百九年五月)ドナルドソンは、體重と身長とを計ると、全神經組織の重さは兩性に於て類似するが、雌は雄に於て又脊髓は雌に於て幾分より重いといふ事を發見した、此れは彼の言ふ如く、人間の神經組織に關する最も最近の觀察と一致して居る。ハタイ(亞米利加解剖學雜誌、千八百八年、四號)も同様に白鼠の頭蓋容積に於ける總ての性的相違が體重の相違によつて説明出来るといふ事を發見して居る。

(二) 巴里人類學協會に於ける論議、Bull. Soc. Anth. 千八百七十九年七月三日。

## 第六章

### 感 覺

觸覺——ロンブロッソ、ジラストロウ、ガルトンマロー等の諸結果——女のより大なる觸覺的易感性——觸覺感官の發育可能性。

苦痛に對する易感性——ジラストロウ、ギルベルト、グリツフイング等の諸結果——此の問題の錯雜——野蠻人、小兒及び多分女に於ける非易傷性。

嗅覺——ニコールス及びベイレイ、オットレンギ、ガルビニ、マロー等の實驗——意見の相違。

味覺——ニコールス及びベイレイ、オットレンギ、トゥルウズ等の研究——味視は女に於てより鋭敏也——聽覺——健康中の聽覺の鋭敏に關する實驗は少く且つ歸著なし——聽覺の範圍は恐らく男性にあつてより大ならん。

視覺——盲目は男により普通也——より少なる眼缺陷は女により普通也——健全なる視覺の鋭敏には著るしき性的相違なし——色覺と色盲——色盲は女にあつて極めて稀れ也——又野蠻人間にも稀れ也、

色聽——此れ及び類似の現象は男に於けるよりも女及び小兒にあつてより普通也——感受性と感動性間の混同、

### 觸 覺

觸覺的感受性に就ては女が男よりも優れてゐるといふ事は殆ど疑ふ事が出来ない。重に伊太利に於てロンブロッソ及び其他の人々によつてなされた、此の點に於ける性的相違に關するより早い頃の實驗(大部分病的な主體に基づく)は歸著する所がなかつた。屢々もつと巧妙な器械を用ゐてなされた、其後の實驗は、少女及び女が殊に少年及び男よりも觸覺的印象により多く感じ易い事を示した。此れは伊太利に於てすらそうである事が發見されてゐる。女が男よりも鋭からぬ觸覺的感受性を持つといふ結論に達したロンブロッソさへ、それが六歳及び十二歳の間の幼い少女にあつて非常に發達して居る事を發見した。デイ・マツテイは百六十人の小兒を驗べて、少女の觸覺的感受性が少年のそれよりも大きい事を發見した(一)。オットレンギも又伊太利に於て、總ての階級と年齢との(數に於て七百人に近い)少女と女との間で廣大な検査を行ひ、大體に於て彼等が少年及び男よりも感じ易い事を見出した(二)。露西亞のデンは温度、電流、及び場所に對する易感性を驗べて、殆ど性的相違を見出さなかつたが、然し起つたようなさういふ性的相違は女のより大なる感性性に味方してゐた。獨逸では、ミューニツヒのステルンが、多數の個々人の間で、女が指の觸覺的感受性の點で明かに男よりも優れ、少女は少年よりも優れてゐる事を發見した、植字工も又極めて高い程度の易感性を示し、同時に觸覺的感受性の最も高い發達は盲目者中に發見された(三)。英國に於ても亦ガルトンは項に當てたコンバスを用ゐて(斯うして皮膚

の運動したりしなかつたり又ざら／＼になつたりならなかつたりする諸々の結果を避け、千三百人の個々人の間で女が男よりも多くの易感性を示し、相対的易感性は大ざつばに言ふと約七對六である事を發見した。彼は女に於けるより大なる變化性を見出した、そして此れを女が、男よりもずつと多く、續けて居る注意の行使に缺けてゐるといふ事實に歸して居るが、疑ひもなく正しい。彼等の不注意は減少せる感受性と同じ方面に結果を及ぼすものである(四)。ガルトンの結果は特に信頼出来るものである、といふのは其等はさういふ試験に極めて都合のよい體の部分でなされ、又測定の極端な精密が少しも要求されない部分(項に於て先づ第一に感じ易い間隔の平均は約半時程であるので)でなされてゐるからである。市俄古に於けるその研究の一結果としてヘレン・トンブソンは女が二點の辨別上男よりも鋭敏であるといふ事をガルトンと同意して居る。

(一) デイ・マツテイ、*La sensibilità nei fanciulli in Rapporto al sesso e all'età*, 心理學記錄、千九百一年第三部。

(二) オットレンギ『女の感受性』科學評論、千八百九十六年三月二十八日。

(三) エイ・ステルン、*Zur Ethnographischen Untersuchung des Tactsinnes der Menschen (tactbeurteilung)*, *Beitr. zur Antrop. u. Urgesch. Baierns*, 1895, Bd. xi, heft 3-4, 千八百九十七年 (Zell. f. Ant. 中)に極説する。

(四) ガルトン、『男女の相対的感受性』、自然、千八百九十四年五月十日。

亞米利加ではジストロウ教授(一)が男性及び女性の學生に關する觀察を少々提出したが、それは究極的のものでないけれども、完全に比較的であるといふ便宜を持つてゐる、その試験は迅速に少數の典型的结果を齎らすために選ばれた。其時用ゐられた皮膚感覺測量器はジアストロウ教授自身によつて工夫されたものであつた、人差指の尖では平均は三十二人の男にとつて一・七一、二十二人の女にとつて一・五二であつた、手の甲ではその平均は三十人の男にとつて一七・五、二十二人の女にとつて一五・〇であつた。手の掌の感受性は一片の原紙(九ミリグラムの重さあり、又原紙に貼つた一枚のミリメートルの紙から縦二ミリメートル横一ミリメートルの矩形に切取つたもの)の墜落が認知され得た最小限の高さを定める事によつて試験された、此の距離は二十七人の男にあつては五十八・二であつたが二十二人の女にあつては僅か二十一・九であつた。變形した郵便天秤の秤に置かれてある指に於て示されるやうな壓迫感覺を試めそうとする試みは、男女が殆ど同等であり、秤皿に於ける初の重さの六分の一又は七分の一が正確に感知されるといふ事を發見した。

(一) 『ウイコンシン大學の實驗心理學實驗室からの諸研究』、亞米利加心理學雜誌、千八百九十二年四月。

アーサー・マグドナルド博士は腕關節の手掌表面に於て少女が發情期の前後共少年よりも位置に對しより多く感じ易いといふ事を發見した(發情期は兩性共にあつて減退せる感受性に導くらしい)。此等の結果は成人の場合には變更の必要あるやうに思はれたが、然し主體變更の必要あるの数は此の點では極

めて少なかった(一)。

(一) エイ・マクドナルド、心理學評論、千八百九十六年三月。  
尚ほ十歳及び二十歳に於ける人差指の尖の感受性に關するマローの觀察は、十四歳以後に少年がより多く感じ易く、十四歳以前は少女が、より多く感じ易いといふ事を示した。外の然し極めて少數の組では(然し乍らその年齢はより高かつた)、彼は女が勝れてゐるのを發見した。彼は不足な注意、及び(彼の信する所のだが)不完全な酸化の影響を女に於ける減退した感受性の役立つものと看做して居る(一)。

(二) マロー著「春機發動期」五十七頁。  
觸覺的易感性は我々が常に假定する傾きあるよりも一層變じ易く又一層教育し得るものであるといふ事を心に留めなければならぬ。露西亞に於ける常態の女、犯罪婦人、及び賣淫婦の感受性に關するパーリン・タルノウスキー博士の研究に、都會に住む女が田舎に住む女よりも鋭敏な感受性を持つ事を示した、例へば犯罪者は一般に通例の人々よりも鋭き感官知覺を持つと同時に、彼女は都會に住む悪者が一度も都會に住んだ事のない正直な百姓女よりもずつと鋭い味覺を持つてゐる事を發見した(一)。フェルキン博士は同じ點に關し或る極めて興味深い觀察をなした。彼は百五十人の黒人のスタン、アラビヤ人とに於ける身體の二十六部分を試験して、辨別力が歐羅巴人の舌の尖に於ける一、一ミリメートルに對し黒人ではミリメートル、スタン人では二、六ミリメートルであつた、然し二人の黒人の少年は四年間歐羅巴で教育された後、觸覺的感受性がより鋭くなり、二ミリメートルで辨別する事が出來た(二)。又クロー

ン教授は皮膚が益々正確に壓迫の感覺を局限するよう段々と教育され得る事を發見した。最初相異なる個的順序で、主體は一般に七の内二しか位置を示す事が出來なかつたが、幾座時かの後(百三十)彼は七の内五の位置を示すのに困らなかつた。此の練習からの進歩は極めて早い(三)。觸覺計に依る皮膚の教育は又ドレッツラーによつて綿密に研究された(四)。

- (一) 『女性犯罪者に於ける感器官に就て』Actes du Troisième congrès International d'Anthropologie criminelle プラツセル、千八百九十三年、二百二十六頁。  
(二) フェルキン『歐羅巴人と黒人ととの間の感受性の相違』大不例顯協會報告、千八百八十九年。  
(三) ダウルユー・オー・クロイン、『觸覺の同時的刺戟的研究』神經病及び精神病雜誌、千八百九十三年三月。  
(四) 亞米利加心理學雜誌、千八百九十四年六月。

### 苦痛に對する易感性

ジアストロウ教授は男性及び女性の學生に於ける苦痛に對する易感性を測らうとする或る試みをなしたが、それには鍵の頭から二〇〇ミリメートルの點に樞軸を備へた軽い鐵槌を用ゐ、それを各々の食指の尖に落ちるようにした、指も手も共に支へられてゐた。鐵槌が苦痛の感覺を引起すために落ちなければならぬ程度の最小限數は驚くべき程度不變である事が發見された、そして豫期される通り、それは女

にあつてすつともつと小さかつた。右手に對するその數字は、男にあつて三三・九、女にあつて一六・六であり、左手に對するそれは、男が二二・七、女が一四・八であつた。左手に就ては男女がより近く同等であるが、右手に就ては非常に多い不平均があつて、明かに右手によつて受けられる烈しい使用を指示するといふ事は注目すべである。マクドナルドは顚額に當つた彼自身の工夫の痛感試験器を用ゐて少女及び女が總ての年齢に於て少年及び男よりも苦痛に感じ易いといふ事を發見した、そこには一般に年齢と共に減退する易感性があつた、そして左の顚額は(左手と同様に)右よりも感じ易かつた。兩性に於ける非勞働的階級勞働的階級よりも感じ易かつた(一)アダカルマンはマクドナルドの痛感試験器を用ゐて、ミシガンに於ける千五百名の學校兒童に對する實驗の連續で類似の結果に到達した(二)。スウィフトはウイスコンシン州立師範學校に於て又マクドナルドの痛感試験器を用ゐて、顚額に於ける痛苦に對する易感性が研究した殆ど總ての年齢に於て(七歳乃至三十二歳)男性よりも女性にあつてより大きい事を發見した、彼は又此の女性のより大なる感受性が小兒的特徴である、といふのはそれは幼い小兒にあつて最も著るしく、年齢と共に減退するからであるといふ事を見出した、彼は更に進んで痛苦に對する感受性が神經的優越と關聯して居り、『優れた』才能ある小兒が『愚鈍』な者よりも苦痛に感じ易いといふ事を發見した(三)。ギルバートも又イオワの學校兒童の間で、痛苦の始まりを試験したが、それには右の人差指の爪に壓力を加へた一つの痛感試験器を用ゐた、そして此の方法に對してはそれは唯だに皮膚の相變する硬結に基づく困難を除く計りでなく、壓力が苦痛に道を開ける定まつた點があるといふ事が主張

されて居る。少年は常により少なく易感的であり、又六歳から十九歳に至る迄を通じて易感性は漸次に減退するといふ事が發見された。兩性間の平均相違は十三歳迄繼續して同じであつたが、その年以後は少女は殆ど不變なるまゝで、その若々しい易感性を保持したけれど、少年は益々易感性を失つた(四)。

(一) 心理學評論、千八百九十六年及び千八百九十八年。

(二) 亞米利加心理學雜誌、千八百九十九年四月。

(三) イー・ジェー・スウィフト、『苦痛に對する感受性』亞米利加心理學雜誌、千九百年四月。

(四) ギルバート、University of Iowa studies in psychology 千八百九十七年、十一頁。

斯くして我々は大體に於て、正確な測定が信用出来る限りでは、女が男よりも苦痛に對しより多く感じ易いと結論して正しいやうに思はれる。然し此の問題は全く單純といふわけに行かない發條痛感試験器を用ゐて女が顚額に於て苦痛により感じ易い事を發見したヘレン・トムプソンによつて云はれる如くそれは個人の『苦痛』觀念に依るのである。そしてグリツフィングの云ふ如く、カツテルの壓迫痛感試験器を用ゐた又感應コイルを用ゐた實驗の結果として、そこには體中の必然的一致がない、従つて手に對する烈しい苦痛の始りは必ずしも、前額に對する同様に烈しい始りと結合しないのである。其上に電氣刺戟に對する易感性は壓力易感性を離れてゐる(一)。

(一) エーチ・グリツフィング、『苦痛に對する個的易感性に就て』心理學評論、千八百九十六年七月。大體に於て苦痛に對する易感性は、その性的不同上一般的觸覺的易感性に一致して居るようである。

然しそれは實行して極めて満足的な試験でなく、將た又その結果は解釋の全く容易なるものではない。此のために男女孰れが痛苦に對しより多く感じ易いかに就ては今尙ほ或る意見の相違が存するのである。伊太利では、一般的感受性が女に於てより多く鋭敏な事を發見したオットレンギは、痛苦に對する感受性が男に於てより多く鋭敏な事を發見した。彼は手の濡らした甲に對しエデルマンの感情電氣測量器を用いた。彼の結果は二十四歳迄の痛苦に對する易感性の増進を示して居る。その年齢後女は男の三倍の多くの鈍感の場合を示した。然し乍ら彼は此の問題が女の側に於けるより大なる痛苦に對する抵抗力によつて幾分錯雜にされるといふ事を承認して居る、或る學校では少女の内幾人かは、虚威張して感傳電氣測量器の最後の限度迄痛苦を承認する事を拒んだ。

男女の苦痛に對する相對的易感性の問題は通常より一般的性質の材料の研究によつて定められた。女が男よりもより少く痛苦に動かされ又悩むといふ事を示すに傾く事實や叙述は數多い。セルギ教授は女がより少く苦しむといふ事實は（女がより大なる意志の力を持つとは殆ど主張する事が出来ないからして）彼等の甘從によつて示されると考へて居る、そして彼はその近親を養ふ男が肉と健康とを速く失ひ、一方女は、母さへ、屢々彼等の上機嫌と嗜慾とを留めるといふ事を指摘して居る（一）。職業的割青師ウイリアム氏はポール・モール・ガゼットの主筆に斯う云つた「婦人は男子よりもすつと多くの勇氣を持ちすつとよく苦痛に耐えます、尤も私は貴方に文身は、若し科學的にすると、殆ど苦痛がないと云ふ事を申上げねばなりません。けれども男は女よりもすつと落付きがありません、女は全く靜かにした

きりです。』十六世紀の慧眼な佛蘭西の筆者ブーシェは女が男よりもよく寒さに耐え、又そんなに多く衣物を着る必要がないといふ事を認めて居る（二）。

（一）セルギ、『女性の易感性』L'Anorale, 千八百九十一年十月。セルギは器官的感受性よりも寧ろ情緒的感受性を検査した。

（二）L'Anorale, p. 15. 然し乍ら此の事實の實際の説明は女が脂肪てふ自然的衣服を持つてゐるといふ事である。前書四十八頁を見よ。

我々が兩性に於ける非易傷性てふ極めて酷似した問題に向ふ時、此の問題に恐らく或る光明が投ぜられるであらう。非易傷性とは創傷の速い回復及び劇しい損傷後の惡結果からの比較的免除を指示するためベネダイクト教授によつて初めて用ゐられた言葉である。下等動物間では高い程度の非易傷性がある。野蠻人間にもそれは總ゆる所著るしく、又相當に高い程度の無感覺と結合して居る。例へばザンジバル人は驚くべき創傷回復力を持つて居る（一）。そしてレイバイン博士は千八百六十五年から千八百七十二年迄亞米利加貧民收容所の醫事部によつて取扱はれた四十万人以上の黑人患者の場合の解剖から、黒人が白人よりも損傷及び其他の外科手術後のより大なる回復力を持つてゐる事を發見した。様々の種族間には必ずしもその種族の進化的等位に關係あるようには思へない苦痛に對する様々の程度の抵抗力があるようである。顯著なる外科醫ピロゴツフは猶太人、回々教徒、及びスラヴ人がよく苦痛に耐える事を認めた。ウイリアム・マックコーマック卿は土耳其人が苦痛に對する全然の無感を示すと云つた。（二）



病人の時の小児の上機嫌は屢々注意を惹いた(二)佛蘭西の外科醫マルゲイヌは五歳から十五歳迄の小児が成人よりもよく切斷術に耐えるといふ事を初めて千八百四十二年に結論的に示した、これこそ其後確證され、今日一般に認められてゐる結論である、我々は「手術的處置の行はれる範圍内では、小児の神經組織が成人のそれよりも *Trucasia* によつてより少く影響されるといふ事には少しも疑ひがない」といふホースレイ教授の叙述を容認してもよい。マルゲイヌは又女が男よりもよく切斷術に耐えるといふ事を示したが、これも又確證された結論である。ルグーエは巴里に關するマルゲイヌ、グラスゴウに關するラウリー、ニューカッスル、グラスゴウ、及びエヂンバラに對するフェンウィックの數字を一つに合はした。男に於ける千二百四十四の切斷術の場合の總體に於て、八十三の死亡、即ち二九・二九パーセントの死亡があつた、是れは即ち女の方に宜い重大な相違である(四)。一つの表によると、女の方にはよい相違は一六・二パーセント程である。此の相違は男が受け易い事故のより重大なる性質に基づく主張する事も出来よう、然し此の相違は唯だに損傷に基づく切斷術に於て著るしい許りでなく、又疾病によつて惹き起された其等に於ても著るしいのである。我々は此處に唯だに女性的幼兒によつて出生時に示される許りでなく、又より長命の女によつて老年に示された死に對するよく認められた抵抗力と密接な關係を有する性的相違を持つといふ事が恐らく見出されるであらう。

(一) テー・エーチ・パーク著、赤道近傍の亞弗利加に於ける諸經驗、四百三十五頁。

(二) マックコーマック、論文「銃創」ヒースの外科辭典。

(三) 例へば千八百九十一年ワシントンに於ける亞米利加瘡兒療法協會席上のエイ・ビー・ジアットソン博士の總裁演説を見よ。

(四) 論文「切斷術」醫學百科辭典(佛)。

ロンプロリーによる一論文「女の易感性」はロンドンに於ける國際實驗心理學研究會(千八百九十二年)で讀まれ(又その研究會の「會報」四十二頁四十四頁中に省略し翻譯した形で公けにされた)ものであるが、その中には様々の論議が女のより大なる感覺的鈍感及び彼等のより大なる非易傷性のために提出されてゐる。此の論文は精確な細目には豊富でなく、又幾分批判を受け易いのである。然し次の文は引用してもよからう——「ピルロツスは初めて或る外科手術(幽門の切除)を試みる時の女に關し實驗して彼等はより少く感じ易く、従つてより多く非易傷的である——即ちよりよく苦痛に抵抗する事が出来るといふ事を斷定した。ガールは私に女は殆ど彼等の肉が外のものであるかの如くに手術させるのが普通だと確言した。チオルダノーは分娩の苦痛さへ女に(彼等の危懼にも拘らず)比較的僅かの惱みしが惹起さないと私に語つた。ツリーンの最も顯著なる齒科醫の一人マルチニ博士は女が總ゆる種類の齒手術を男よりも容易く又勇敢に耐えるのを見て感じた驚嘆を私に知らした。メラも亦男が、そらいふ状態の下では、女よりも多く屢々失神するであらうといふ事を發見した。様々の國民の諺は女の苦痛に抵抗する能力の事實を確めて居る——例へば「女は決して死なず、七枚の皮膚を持ち、大きに魂とを持つ」等是れである。同じ論議はロンプロン及びフェレローの *Ta'anna Delicore* 千八百九十三年、五十八

——頁六十六頁）中により充分に述べられて居る。又エーチ・キャンベル博士の「神經組織、等」（五十四——五十五頁）を見よ。キャンベル博士は如何によく女が血液の損失にも睡眠の不足にも耐えるかと指摘し、又「多くの女が以て肉體的苦惱に耐え、又差迫る死に面する異常の忍従（殆どそれは不感のように思はれるであらう）よりもつと私を驚かしたものは何もない」と云つて居る。

ピルロツス教授に歸せられたかの叙述に就ては、私は當時その有名な維也納の外科醫の重なる助手であつたアイゼルスベルヒ教授に手紙を遣つた所、彼は斯うロンブローリ教授の叙述を確證したといふ事を附言して置かう、即ち「ピルロツス教授は腹部の總ての手術に對し女がより多くの抵抗力を持ち、従つて彼等に關する手術はより多くの回復の機會を與へると實際思つて居る。」

あゝも高名な權威者の口から出た此の意見は、統計表によつては伴はれないけれども、當然注意される資格あり、又それは切斷術に付て記された諸結果と一致して居る。此の性的相違は多くの勝れた外科醫（例へばジエームス・ペーゲツト氏）がそれを認めなかつたからして大きいものである筈がない。然しそれは實際であるように思はれる。此の書の第一版が現はれて以來此の問題はマルセル・ボードウエン（『腹部手術の見地に於ける女性の優越性』*De Progr. Med. G.*, 千八百九十七年七月十日）によつて取扱はれた。彼は獨乙の統計（*Arch. f. Klin. Chir.*, 1895-96, pp. 481, 561）を引用して居るが、それは胃腸接合術の多數な場合に於て男性間の死亡率は五十四パーセント、女性間のそれは僅か三十五パーセントであり又一方脚門截開の場合ではそれが男性間で六十四・三パーセント、女性間で五十二パーセントであるとい

ふ事を示して居る。ボードウエンは此の相違の説明上多數の相當な原因を提出して居るが、然し其等は極めて信服させるもの、よようには思へない。

實驗的證據は大體に於て苦痛に對する感受性併びに又一般の觸覺的感受性が男に於けるよりも女に於てより多く鋭敏であるといふ事を示すに及んで居るけれども、前者の感受性が後者よりもより多く複雑な性質のものであるといふ事を容認しなければならぬ、そしてそれを決定する時我々は正常な感受性の範圍に眞實屬してはゐない、諸要素に出合ふのである。或る觀察者達に依ると、我々の既に見た如く、假令女がより早く苦痛を感じても、彼等は男より苦痛に對するより大なる抵抗力を有し、それによつて少く影響されるらしいのである。恐らく、大抵の點に於ける彼等のより大なる神經的感應性にも拘らず、女は男よりも實際上よりよく苦痛と不性とに抵抗する事が出来るのであらう。女の社會的生活兩親や夫や子供に對する彼女の從屬、彼女に課せられた服従と隱蔽との義務、是等は總て苦痛の堪忍を養ふに役立つた。女は若し此の役割をして男に於けるよりもより多く自然的に又より少く苦勞的にならしめる本質的基礎があつたのでなければあゝも一般的にそれに入り込みはしなかつたであらうと考へるのは合理的である。我々は女の感動性を考へるに至る時もう一つの見地から此の問題に近づく事になるであらう。

## 嗅 覺

嗅覚の鋭敏に於ける性的相違はイー・エーチ・エス・ベイレイ教授及びイー・エル・ニコルによつて初めて精確に測定された千八百八十四年のカンサス科學會々報中に、多くの普通の匂ひに就て知覺の鋭敏が女性間に於けるより男性間に於てずつと著るしいといふ事を示すベイレイ氏による一論文が記載されて居る。私は未だ此の論文を読む事は出来なかつた、が然し千八百八十六年十一月二十五日の「自然」中にはニコル及びベイレイ兩教授からの一文があつて、彼等の方法や結果を簡單に概説して居る。彼等は次の物質を使った——(一)丁香油、(二)亞硝酸アミール、(三)胡越幾斯、(四)臭素、(五)ポツタシウムケアン化物。一列の溶劑が調合されたが、その各部は前のものゝ強さの半分であつた。其等は其物質をその匂ひによつて嗅ぎ分ける事の出来なくなる迄相繼いで稀薄にされて行つた。その擧はそれから主體が嗅覺によつて類別するために出鱈目に置かれた。第一回の實驗には十七人の男性と十七人の女性とがゐた。その結果は次の表(嗅ぎ分けられた各々の物質の量を示す)中に現はされてゐよう——

男性の平均

丁香油	水八八二一八分に於ける一分
亞硝酸アミール	七八三八七〇に於ける一
胡越幾斯	五七九二七に於ける一
臭素	四九二五四に於ける一
チアン化物	一〇九一四〇に於ける一

女性の平均

丁香油	水五〇六六七に於ける一
亞硝酸アミール	三二一三三〇に於ける一
胡越幾斯	四三九〇〇に於ける一
臭素	一六二四四に於ける一
チアン化物	九〇〇二に於ける一

第二回の實驗は其後二十七名の男性と廿一名の女性とになされたが、次の結果を示した——

男性の平均

青酸	水一二二〇〇〇分に於ける一分
檸檬油	二八〇〇〇〇に於ける一
冬綠油	六〇〇〇〇〇に於ける一
青酸	水一八〇〇〇〇に分ける一
檸檬油	一一六〇〇〇〇に於ける一
冬絲油	三二一〇〇〇〇に於ける一

女性の平均

青酸	水一八〇〇〇〇に分ける一
檸檬油	一一六〇〇〇〇に於ける一
冬絲油	三二一〇〇〇〇に於ける一

男性實測者の内三人は水約二〇〇〇〇( )〇分に於ける青酸一分を嗅ぎ付ける事が出来た——尤も此等

の人々の内二人は此の感覺の修練に都合のよい職業に従事してゐた——が其時最も注意深い化學試験は其酸を示す事が出来なかつた。又一方では、兩性の或る者は匹敵するものゝない強<sup>い</sup>の溶液にあつてさへ青酸を嗅ぎ付ける事が出来なかつた。研究者は斯う結論して居る「我々の平均は嗅覺が女性實測者の場合よりも男性の場合に於てずつと鋭敏であるといふ事を示して居る」と。

私が差出して様々の質問に答へた、ニコールズ教授(當時コネル大學の教授)からの興味深い手紙(千八百九十二年十一月十四日)から、私は次の文章を引用する——「私達の仕事を考へる時、ベイレイ教授も將た又私も、感覺の生理學に於ける専門家では少しもなかつたと云ふべきであらう。彼の此の問題に於ける興味は化學に對するその關係にあり、私のそれは物理學に對するその關係にあるのである。出會した性的相違の諸點は私達の實驗を計畫する時求めたものではなかつた。其等は殆ど例外なく、さういふ相違に關する我々の豫想した觀念の丁度反對であつた。試験した個々人の數は恐らく極めて廣大な結論を引出し得るには不充分であつたであらう。我々は然し乍ら此の相違を記録の價値あるものと信じた。試験された個々人の階級に付て言ふならば、彼等は殆ど全部カンサス大學の學生であつた、其處は立派な程度 of 共同教育的組織で、當時殆ど同等の若い男女を持つてゐた。年齢は重に十七歳内至二十五歳である。性的以外の、人の引出し得た唯一の區分は、重要な課目選擇を圖つて居る學校の少年が、文學よりも寧ろ科學を選び、その結果特殊な感覺の或る訓練を得るといふ事實から生ずるそれであつた。訓練の入つたのが確かであると我々の信じた少數の場合は藥學の學生のそれであつて、彼等は一本立ち

の諸感覺、觸覺、味覺、嗅覺等の使用によつて藥劑を認識する多くの實習を與へられてゐたのである。我々は男性實測者が煙草又は酒精に於ける耽溺によつて目立つ程影響されたとは思はない。孰れの使用も例外であつた、そして喫煙者及び非喫煙者を平分する事によつてさういふ習慣の影響を説明しようとする試みは何の結果も示さぬように思はれた。扱て概括すると——

「取扱はれた階級は或る者に於ては特殊なものであつた(大學々生)。」

「その階級の内では選擇しようとする試みも、將た又喫煙者等を除外しようとする試みもなかつた。」

「實驗は性的相違の目的で行はれなかつた。」

「男性及び女性の實測者は様々の實驗に於て同じではなかつた、尤も試験された群は共通の多くの部分を持つてはゐた。」

オットレンギ博士はチューリン大學の法醫學實驗室に於て、三十人の常態の男と二十人の常態の女(中流及び下流階級の者で、その内一人も煙草を吞まず、又鼻道の如何なる疾病をも示さなかつた)に關し一聯の觀察をなした、同時に彼は八十人の犯罪男女に關し實驗した。彼は五〇〇〇分の八から漸次に強く列べられてゐる丁香精油の十二の水溶液を用ゐた一種の嗅覺計器を作つた、外の點ではニコールズ及びベイレイの方法に倣つた。丁香精油は極めて香り高く極めて小さく分けられる、又よく知られた物質であるので選ばれた。彼は嗅覺的鋭敏が男に於けるよりも女に於てやゝ少ない事を發見した(一)。オットレンギの諸結論はガルビニによつて批判された、彼は其等がオットレンギ自身の數字によつても殆